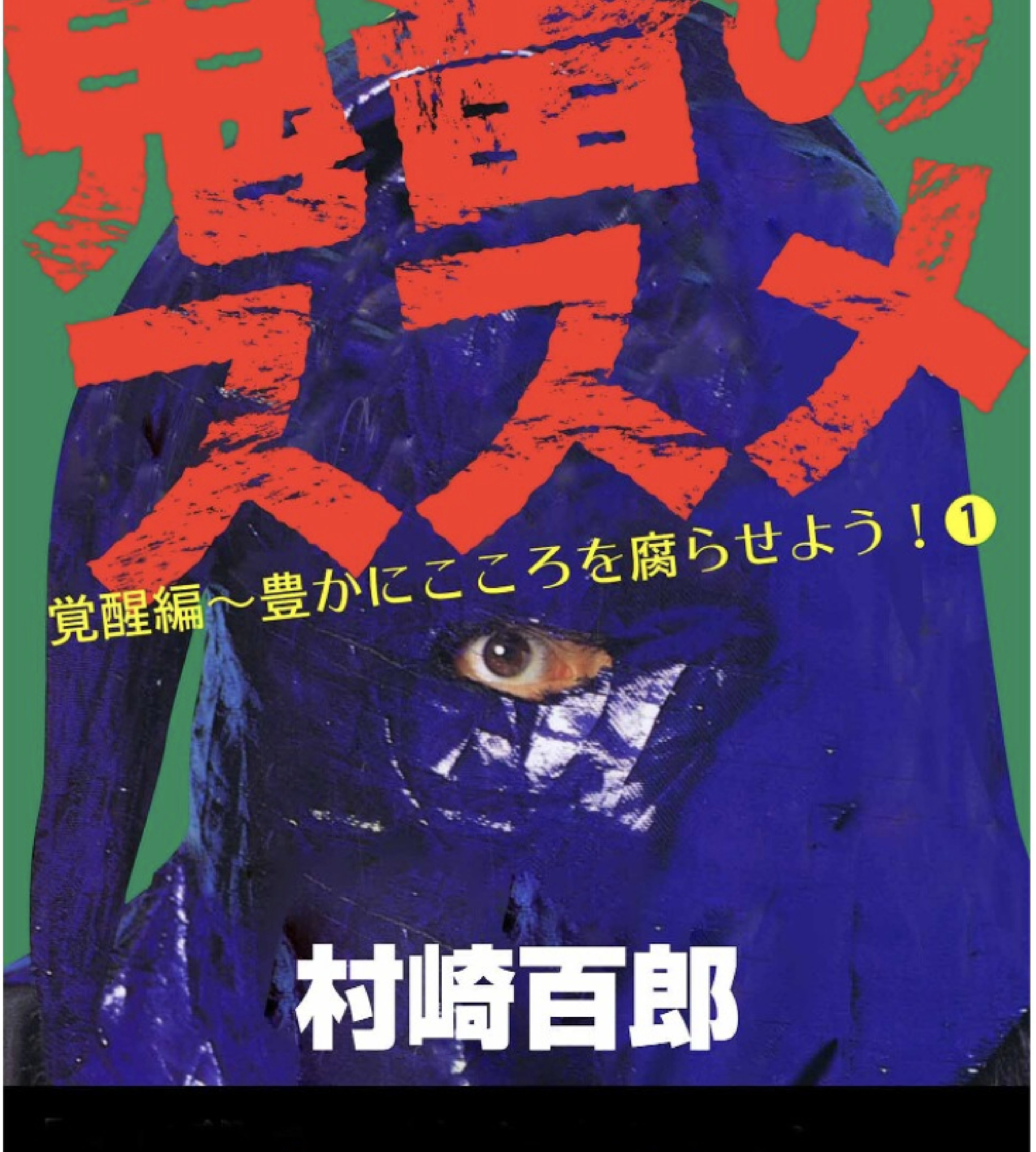
村崎百郎のパンデミック時代を生き延びろ!④

鬼畜のススメ

覚醒編〜豊かにこころを腐らせよう!❶



村崎百郎

パンデミック時代に迷える若者のバイブル!

ゲ

ネットと妄想電波

ス



的で官能的な女の裸が溢れているんだろうなあ、中学を卒業したらこんな臭え村からは永久にオサラバして大きな街へ出て、やってやってやりまくるぞ！　精子が尽きてち●ぽこの先から血が出るまで、腰が抜けるまでやりまくるんだ！」などと、少年らしいロマンティークな夢想に耽っていたものだ。

　こうした欲望は人がいるところなら、時空を超えてどこにでも数多く存在する類のものである。言い忘れたが、神だの悪魔だのを自称する声が絶えずデタラメに聞こえてくる電波系の俺には、そうした他人の欲望がときおり電波として頭の中で渦を巻いてこだますることがある。日本のどこかで、世界のどこかで、または時空のどこかで行われているとてつもなく下品な行為の数々、誰かが考えている邪悪な事や、誰かが感じている性的な快楽、誰かの強烈な想いや欲望などが電波として俺のアタマに何の規制もなしに流入する。

　死の恐怖、死の記憶、断末魔の絶叫、犯される女の悲鳴嬌声、アクメの声、強●の恐怖、強●の快感、射●後に男が感じる軽くみじめな想い……誰の記憶だか知らないが、次から次へとやってきては世界の広さと人間の業の深さを俺に教えてくれるのだから親切このうえない番組である。これが入会金はおろか電話代すらかからないで楽しめるのだから、インターネットよりも確実に安上がりだ。

目次

てが充実していて、変態性欲に目覚めかけていた俺を魅了するのには充分だった。

なるほど。こういう世界があるのか、くっくっくっ、こりゃあたまらんなあ。岩場のかげで熟読して興奮した俺は、たまらずそのままそこで一本抜いて、立ち上がった時にはすでに立派なSM野郎になっていた（気がした）。

あの日俺は岩場で「ア●ス」や「股縄」や「亀甲縛り」という新鮮な言葉を覚え、「潔癖」や「清潔」などという忌わしい言葉を永久に忘れたのだ。それからあとの俺の性的嗜好はまさにSM一直線であった。

とにかく情報の収集には最大限の努力をした。土地の先輩から教えられて、バスで一時間半ほど離れた少し大きな漁港のある街へ行って、店の奥で月遅れのエロ本を売っているという妙な駄菓子屋で大量にSM誌を買い込んだ。今考えると小学生にそういう本を平気で売っていた店のジジイとババアもとんでもないが、俺の方も背中にどす黒いオーラを背負って「売ってくれなきゃ暴れてやるぞ！　火ィつけられてえか、この野郎！」という、尋常ではないイキオイで目をギラつかせて行ったので、その迫力で売ってくれたのかもしれない。

たぶんもう生きてはいまいが、今の俺の性欲があるのはそのジジイとババアのおかげで

妄想インターネット

さしあたり、我々が幸せな時代に生まれたということは確認するまでもないことだろう。今の日本ではコンビニエンスストアで男性誌を手に取れば、野菜以上に新鮮な女のヘアヌードがいつでも拝める情況にある。これはイナカ育ちの俺には、どうにも夢のような話だった。俺の育った村には一軒の本屋もなく、ち●毛の生え始めた小学5年生の頃の俺は、山奥のゴミ捨て場か、さもなくば観光客が海岸に捨てていく雑誌を拾ってしか裸の女の写真を拝めなかった。

テレビもお茶の間に一台あるだけで、とても親の目を盗んでHな深夜番組など見ることはできなかったし、同級生の女どもなどはどいつもこいつも人間というより「ナントカ原人」という言葉が似合うような奴らばかりで、連中に比べれば農場の豚やニワトリの尻の方がよっぽど魅力的だった。

そんな絶望的な情況の中にあっても、俺は人間としての尊厳と向上心を失うことなく、獣●もせずに丘の上から遠くの山を眺めては、「ああ、あの山の向こうには大きな街があって、そこにはたくさんの人が住んでいて、思わず押し倒して●したくなるような肉感

なあ、「青少年に有害」って何だ？　街を歩いていると、たまに「青少年から悪書を追放しよう」などというたわけたスローガンを目にするけど、クソみてえな建前にあふれた学校の教科書以上に有害なモノがあるのか？　あんなつまらねえもんを無理矢理読まされたらグレたくなるのも当然だ。青少年が、現実の自分とは何の関係もないエロ本の裸のネエちゃんの写真のアソコに欲情して何が悪い？　青少年は一体どこに欲情するのが正しいと言うんだ？

「学生は欲情しちゃいけません」なんて言う答えは聞きたくないぞ。俺は知っている、エロメディアを規制すれば性犯罪がなくなると考えてるんだったらお目出たい話だ。むしろエロメディアや性産業のおかげで犯罪をおこさずに済んでいる連中だって沢山いる。カネでやらせてもらえる情況があるからこそ、強●魔にならなくて済んでいる連中だっているのだ。別に障●者に限らず、様々な理由でまともな恋愛など到底できない連中を、俺は自分の働く工場で数多く見てきた。

そいつらにとってのソ●プやヘ●スなどの風俗産業は、単に性欲を満足させる以上の場になっていたりするものなのだ。いいか、想像しろよ、この鬼畜な俺でさえ「まじめに働いていれば、そのうちきっと良い恋人ができるよ」なんて、冗談でも言えないような絶望的な個性を持った連中なんだぞ。そんな奴らにどういう気休めを言うつもりだ？　男はま

猿の哀しみ

そんな電波に囲まれていると、我々が抱く性欲が実は我々の欲望ではなく、ＤＮＡに組み込まれた遺伝子情報からきていることもなんとなく自覚できて、自由意志を持っているかのように見える自分が、本当は大部分本能にあやつられている機械みたいなものだってことも分かるんだけど、やりだしたら止まらない猿の哀しさで、俺はせん●りをやめることができなかった。

飯を食うとか眠るとか「本能」の命令通りに動くのは、ぬかるみに足を取られて、もうこれ以上泥が長靴の中に入ってくる心配をしなくて良くなった瞬間のようなけがらわしい解放感があって、なかなか気持ちの良いものだ。

オ●ニーを覚えたての頃などは、射●の度に「ああ、猿でいいや、お猿で結構、猿だったんだな、俺は、キャッキャキャッキャッ」などと、あやつられている事を承知の上でち●ぽこをしごいていた。だけど、このまんまじゃ終れない。どうせ本能にあやつられるなら、誰よりも強力に本能の命令を聞き、欲望のおもむくままに行動してやろう。本能を喰いつくすぐらい大きく欲情し、快楽の中に身をゆだねよう。

そんなふうに決意した矢先に、村はずれの岬の浜辺でポケットサイズのＳＭ雑誌を拾ったのだ。それは何かのエロ本の「別冊ＳＭ特集」という感じだったが、実に素晴らしくバランスのとれた出来の本で、気合いの入った縛りのグラビアから中の小説まで、内容の全

事」を加えてもいい（俺はキャスターの櫻井よしこさんの声を聞くと全身の血が沸騰して誰でもいいから●したくてたまらなくなるんだ）。さあて、どうするねババアども？　いま俺があげたモノを取り締まれるかね？　変態をナメちゃいけないぜ。

「ドラえもん」を見ても「サザエさん」を見ても激しく欲情する奴はするんだよ。で、実際問題として、通常の単純なエロメディアよりも、こういう一見何でもないようなモノで複雑に欲情する歪んだ奴らほど、アブナくて犯罪予備軍なんじゃねえのか？　文脈でモノが読めない文脈文●のためにもう一度分かりやすく書いてやろう。

「変質者は、
どんな上品なモノであろうとも、
発情したり欲情したりできるからこそ、
変質者なのだ」

人の欲情を止めることはできない

極端な話、鼻の穴だろうがドーナツの穴だろうが欲情するやつはする。俺から性欲を完全に取り除くためには、俺の目を潰して、鼓膜を破いて、鼻を潰して、舌を抜いて、全身の神経を引き抜いて植物人間にでもするしかないだろうぜ。それでも俺は意識のある限り

ある。八年前の正月に、そのジジイ夫婦がなぜかサンタクロースになって、良い子の眠る枕元にＳＭ誌や真新しい浣●器やア●ストッパーを配り歩くという夢を見たが、大人のおもちゃを配り歩くサンタというのもいれば面白いだろう。

そうして買い集めたＳＭ誌を家の天井裏に隠して、夜毎読んでは抜き、読んでは抜きという忙しい日々を送ったものだ。

うだうだと書いてきたが、何が言いたかったかというと、一冊の雑誌ですら、読んだり目にする時期によって、人の一生の性的嗜好を決定づけてしまうぐらいの影響力を持ちえるという、そういう例を示してみたかっただけだ。エロメディアの偉大さと俺の単純さがお分かり頂けたと思う。それにしても安い話だなあ。

エロメディアと規制

しかし、こういう話になると、必ず出てくるのがエロメディアへの倫理だの規制だのというド退屈な問題だ。これはインターネットにしても同様で、Ｈ画像やＨ映像が氾濫していると聞くと、待ってましたと言わんばかりに学級委員長なみの「聞いてると腹の立つ正論」をかます馬鹿が偉そうにワメキ出すんだから言論の自由ってのは本当に鬱陶しい。

は何の雑誌を拾っても必ず「インターネット」という見出しが飛び込んできてうるさくてしゃあない。まるでひと頃の「マルチメディア」と同じ状態である。あの時は「絵に描いたモチメディア」と言う、とても冗談とは思えないきつい冗談が飛び交っていたが、すでに『GON!』という雑誌では「どーでもインターネット」というこのブームを象徴するような秀逸なネーミングのコーナーがあり、俺も全くそう思う。

そう言えば、こないだゲイツ君の『未来を語る』とか言う著者を読む機会があって、俺はそこで描かれていた「情報スーパー・ハイウェイができたら教育が進み、文●もいなくなり、この世はハッピー、良いことずくめだ」とかいう未来のヴィジョンが、あまりにも玉虫色で眩しくて目が潰れそうになったもんだ。

ああ、ゲイツ君のこの語り口調は、確か最近どこかで読んだ何かに良く似ているなあ、と思ったら、それは、この前拾った有名な通販洗剤売りグループのスターターキットの中の勧誘マニュアルのセールスの口調とそっくり同じだった。

どちらも見事な玉虫色のお話で、読むだけで儲かった気分になるから素晴らしいものだ。ウサン臭さは超一級、そんな山師が沢山かかわっているインターネットの闇の奥にはとてつもないお宝が眠っていそうで、みんなの期待は膨らみまくり。誰しもこの「新しいいかがわしさ」がもたらす経済効果についてワクワクしながらソロバンならぬ電卓を叩い

だいい、ソ●プやへ●スがあるんだからな。女の場合は見たくも考えたくもねえよ、そうは言っても電波で来ちゃうんだけどさ……。

質者とその欲情

俺は若い頃から「カネで女を買うぐらいなら●姦したほうがマシ」だと考えていたあきれた男根中心主義者である。今までも「一回でやめれば強●だが、そのまま住み込んでし続ければ単なる〝愛〟だよな」などという酷いコトを実践したり、ヤリ飽きた女の頭に袋をかぶせて、雑誌のグラビアのヌードを見ながらセ●クスだかオ●ニーだか分からないような性●をして女から「鬼！」と罵られたりもした。

しかし、断言してもいいが、俺がいままで女に対して行った鬼畜行為は全て、巷で言われているような「悪書」の影響によるものではない。やった本人が言うんだからこれ以上確実な事もないが、先にあげた発想や鬼畜行為を誘発したのは加藤諦三のいくつかの著書と、チャップリンの映画、それに高校の日本史の教科書、あとはＮＨＫの一連の朝の連続テレビ小説である。

何だったらそれに『窓際のトットちゃん』と日本テレビの深夜ニュース「今日の出来

もちろん、フォトショップが広く出回る以前に写真が真実ばかりを写していたなんて言うつもりはない。写真の加工はエセＵＦＯ写真や旧ソビエトの宇宙飛行士や閣僚達の記念写真を引き合いに出すまでもなく、昔から庶民の見合い写真あたりでも修正は常識だったし、もともと写真なんて、数ある現実の中から特定の場所と特定の瞬間を選んで切り取り平面に焼き付けただけのもので、それは小説などの大きな文脈の中から特定の語なり文節なりを取り出して「この表現は不穏当だ」などと言うのに似て、解釈次第でどうとでも取れる案外いい加減なものである。

良い例が写真週刊誌によく載っている不鮮明な芸能人のスキャンダル密会写真で、何が写っているんだかよくわからないが、記事を読むとどうやら不倫らしいと言う事がわかるという退屈な代物だ。そう考えると、画像編集ソフトの普及というのは、今まで以上に「写真や映像の世界で嘘がつき易くなった」という程度の効果しかメディアに与えないのだが、これはある種の性欲の強い連中には、待ちに待った夢のアイテムだったのだ。

今から10年以上前の夏の夜の話だが、俺は早稲田で趣味のゴミ漁り最中に、おそろしく情念のこもったハンドメイドの「アイドルの首のすげ替えヌード写真集」を３冊ほど拾った。それは大学ノートにびっしりと貼られた各種ヌード写真の首から上の部分に、当時人

欲情する事を止めないだろう。
早い話が生命のある限り、人間の発情なんて止められないのだ。わかったか？
エロメディアの規制だの倫理規定なんて、気休めの自己満足にしかならねえんだよ。マトモな性教育もしないで規制ばかりしているようではガキどもは陰湿に欲情するだけだ。現状ではむしろ、エロメディアの側が性教育の一翼を担っていると言っても過言ではないだろう。親の目を盗んでエロ本を読んで、アダルトビデオを見て、男の子はやるべきコトを秘かに学ぶ。
しかし、ビデオの「顔●」シーンを見て、あれがセ●クスにおけるフィニッシュの礼儀なんだとカン違いする奴も結構いるらしいから、やっぱりちゃんとした性教育は必要なんだろうな。「だけど、そうまでして欲情して楽しい？　目的はあるの？」と聞かれたら、俺は「たぶん、根底で誰も愛していないからこそ、相手を滅するぐらいに激しく欲情できるんだろう。自己保存本能に逆らってまで守りたい好きな相手が出来たなら、俺の欲情は別の形態を取るかもしれない」と答えるだろう。

ゲス情報ネット

さて、世の中は猫も杓子もインターネットだ。俺も趣味でゴミ漁りをしているが、最近

アイドルの首すげ替えヘアヌード

ともかく青少年の「アイドル達のヌードが見たい」という欲望は、画像編集ソフトの出現でパソコン1台とスキャナさえあれば、容易に実現が可能な時代になった。

今年に入ってやっとネット上の『アイドルの首すげ替えヘアヌード』の問題が写真週刊誌などでクローズアップされ、スポーツ新聞の芸能欄をにぎわせたが、何を今更という感じだ。今後仮にネット上に流された画像を法的に取り締まる事ができても、そう言う画像を作る事自体を規制するのは到底無理な話である。

警察や芸能人の所属事務所は個人個人の家のパソコンまでは取り締まれない。一枚でも顔写真があればそこからどんな恥かしい図版を作られても不思議はないのである。潔くあきらめるしかないだろう。現在、アイドルになったり有名になってメディア上に顔をさらすという事は、見知らぬ他人にいとも簡単に恥知らずな写真画像を制作される可能性を持つという事なのだ。

アイドル達にとっては、それも大した事ではなかろう。所詮はファンに妄想されてナンボの存在である。性欲で走る馬の鼻先にぶら下げられたエロいニンジンが「馬にいやらしい目で見られた」と泣き出すようではニンジンの役割を果たせない。せいぜい美味そうに

ている。
そうした中で、男性向けの週刊誌などではネットの中に無尽蔵に溢れるH画像やH映像が話題だ。これにはずいぶんと大きな期待がかけられているが、いかに無修正のポルノグラフィとは言え、氾濫すれば見飽きるのは時間の問題で、みんなもそれはヘアヌードの前例で充分承知していると思う。
われわれはかって洋モノの無修正ポルノを見て「うわあああ、凄えなあああ」と驚いたりもしたが、すぐに冷静になって「しかしでかいなあ、外人のここはこんなに凄いのかあ。ああ、これなら俺達は日本人に生まれて本当に良かったなあ」などと思考できるものなのだ。これを人間の尊厳と呼んでいいのかは知らないが、もう一つの話題は画像編集ソフトで作られた、首をすげかえられたアイドルたちのヌードである。

現実の怪しさがヴァージョンアップ

もうずいぶん前の事だが、初めてＭａｃの画像編集ソフトの「フォトショップ」を知ったときには、本当に「ざまあみろ」と思った。これで写真も絵画と同じようにパーソナルユースで手軽に精巧に描き換えが可能になり、写真が真実を写すなんて誰も思い込まない時代が来るだろう。現実の怪しさが更にヴァージョンアップされて、俺は本当に嬉しくなったものだ。

馬の気持ちをソソルのがニンジン達の使命なのだ。その馬が何処へ行くかなんて俺は知らねえけどな。たぶんロクな所じゃないと思うぞ。

やがて、そういうヌードもじきに飽きられるだろう。……おそらく、みんなが普通のヌードに飽きた所からが本当に面白い気の狂った画像が制作されはじめるのだ。アイドルたちの画像は制作者のどす黒い悪意を受けて醜悪に歪められる。……まともな人間なら目を覆いたくなるような凄絶な画像が多数作られるだろう。男性とのカラミももちろんアリだ。動画や3Dもそのうちできるに違いない。超清純アイドルの肛●収縮ダンスなんて言うマニアックな画像もさして珍しくもないものになるのだ。

やがて政治家や各界の有名人も標的になる。新興宗教の教祖や高貴な方々もその例に漏れず気が遠くなるような下品な画像に組み込まれる……およそ考えうる超最悪、超醜悪な画像が作られるだろう。いや、最後は作るのもかったるくなって、みんな想像で済ませてしまうのではないか。

それから先のことは知らない。好きにやってくれ。この程度の想像力の暴走なら、世の中なんてどうせ大して変わらないだろう。真実なんてひとつじゃないし、現実が今よりもっと怪しくていかがわしいものになるんだったら、俺はどんな事でもするぜ。「人の心の闇の奥にある、暗くて深い夜の果てを俺はこの目で観たいんだ！」なんて、芝居じみた

気が全盛だったアキナだのセイコだのミハラジュンコだのというアイドル歌手の写真が貼られていたもので、電波系で若干のサイコメトリー能力のある俺は、ノートを持ったその指先から作った奴の尋常ではない意識や深い思い入れが流入してきて、頭がクラクラした。

当時は今のように、アイドルが陰毛だの乳首だのア●スだのを簡単に人前にさらすなんて事はあまり考えられなかった時代で、それだけに、青少年たちのそうしたものを「見たい」という欲望にはモノ凄いものがあったのだ。

俺が拾ったものは、作った奴の性欲と執念の感じられる実に素晴らしい仕事だった。アイドルの首と、エロ本から取ってきた誰かの裸の胴体のサイズがぴったり合った写真もずいぶんあったし、そうでないの含めても、ズリ●タとしての使用も充分可能な立派な出来映えだった（蛇足ながら、こういう労作がゴミとして捨てられる背景と言うのは、たぶん作り手に性交のできる恋人でもできたのだろう。

そうでなければ、腹をくくってこのアイドルを強●してやろうと決意し、身の周りを清算した結果だろうが、その後そのアイドルが襲われたと言う事件は聞かなかったので、やっぱり恋人でもできたんだろうな）。おそらくこれを作るのには相当の時間と金がかかったろう。こんな欲望を手軽で簡単に、そして更に精巧に結実させることができるのがフォトショップなのだ。

台詞を臆面もなく吐きながらね。

最後に、パソコンを使用してのオ●ニーについて考えてみよう。実際のところインターネットで引いてきたエロ画像でオナ●ーをしている連中はまだそれほど多くないように思える。そもそも長時間パソコンに向かっていれば、なんとなく性欲も停滞ぎみになるし（これはモニターから出ている電磁波と関係があるのかも知れない）、インターネットで通販したモノをオカズに抜く奴はいても、モニターの画像を見ながら抜ける奴はあんまりいないだろう。

自分のパソコンのマウスやキーボードがイカ臭くなって嬉しい奴は少ないと思うし、モニターに顔●なんかキメた日にゃあ、スペ●マがキーボードにもひっかかってガビガビのバリバリにヤマト糊がこびりつくのは間違いないからな。

絶好の妄想びよりだ

感情の希薄な俺は、現実もほとんどイリュージョン状態なので、わざわざフォトショップで首のすげ替えヌードを作る必要もない。想像すれば、細部までリアルにその映像を見る事ができるからだ。だけど俺は妄想であってもアイドルの首をすげ替える事はないだろ

う。

そんなスカしたいけすかない奴らよりも、家の近所や工場の側で顔を合わせる身近な女の子達の方がはるかに魅力的だし、どうせ自分には何の関係もない女なら、いくら希薄な現実とは言え遠くのイリュージョンよりも、目で見える近くのリアルの方が生々しくて強烈で美味しそうで妄想のしがいがあるってもんだ。

さあて、今日も春先で暖かくて空が青い。絶好の妄想びよりだ。昼休みにはコナまみれで汚い工員らしく、工場の前を通る女子高生の裸でも下品に妄想しようかね。

いやいや、俺の汚い風体を見て、いつも顔をしかめる近所のバアアだとか、道で俺を見ると不愉快そうに目をそらせて足早に通り過ぎる隣の工場の事務の姉ちゃんたちの首を、オレらが休み時間に撮った記念写真の中の、一番汚れた作業着を着ている俺の体にすげ替えてやろう。

……なんだ、あんたらだってコナまみれが結構似合うじゃねえかよ！　ハハハハハ……。

初出不明／１９９０年代後半～２０００年頃

ネットと性欲

俺は鬼畜系工員の村崎百郎だ。このインテリどものお上品雑誌に「単純痴的低能バカ層」を勝手に代表して好き放題を言わせてもらおう。所詮、「ご立派な意見」などと言うものは字が読めて文が書ける一部のインテリの独占市場なんだから、たまにはゲス工員の下品な文章を読むのも悪くないだろう。「時には下々のバカの意見に耳を傾ける」のも、深い人間理解と、度量の大きな人間性を目指す上では必要なんじゃねえか？　お上品で慈悲深い単純ヒューマニストの皆さんよ。

さて、それでは工員らしくゲスで下品な話題に移ろう。最近は男性誌やエロ雑誌でさえ「インターネット特集」を組んでネット上のエロ画像を紹介するのがあたりまえになりつつあるが、こうなると「待ってました」とばかりに猥褻画像がけしからんとか、青少年の健全な育成に悪いだとかと声高に「倫理」を叫ぶ「正義の人」が雨後のタケノコのようにニョキニョキ現われるから戦後民主主義ってとってもステキでヘドが出そうになるぜ。

「インターネットのエッチ画像」問題は、建前の正義と倫理に照らし合わせれば「許せない！　絶対に規制すべきだ」と言う連中の意見が圧倒的に正しいのだろう。そのぐらいは、この俺でもわかる。しかし、そんな意見は単に正しいだけで、所詮は机上のクーロン黒沢だ（おお、我ながらハイレベルな駄ジャレじゃ！）。そもそも「エッチな画像を規制すれば性犯罪がなくなり、青少年が一人残らず健全に成長する」などと言う発想はそれ自体がペケだし、これがオ●ニーや●姦などの現場の声を無視した、青少年の欲情の本質を全く考えない馬鹿な意見であることは明白だ。

現実問題としてよ〜く考えてみてくれや。ネット上のエッチ画像や映像で欲情して、いても立ってもいられなくなり、残された人生を全て投げうって、街中へ飛び出して女を●しまくるワイルドな奴がこの世に何百万人いるんだ？　いくら普及が進んだとは言え、まだまだパソコンは「現実と虚構の区別ぐらいは明確に判断がつく」おりこうなインテリ層中心のオモチャなんだぞ。欲情したひ弱なインテリどもに、せ●ずり以外に一体ナニができるってんだ？　女を強●するような根性のある奴は、ハナからネットなんてかったるいモノに接続しないで直接自分のペ●スをやりたい女のヴァ●ナに接続するもんだぜ。

言っとくけど強●魔や性犯罪者が捕まってから言う「エッチな本のグラビアを見てムラムラとして、つい、犯行に及びました」なんて言う発言を真に受けるなよ。どこの馬鹿が「自分はしんそこ恥知らずで品性愚劣な最低のゲス人間で、とにかく女を見ると●りたくて●りたくてタマラなくなるんです。〝あの女を犯さなければ俺の人生は先へ進まない〟そんな衝動にかられて思いっきりやっちまいました。けっ、あん畜生！　ブスでマ●コ黒いくせにソソりやがって、全くとんでもねえぜ！」なんて正直に言うんだよ？

裁判だってあるんだし、性犯罪者が法廷で自分の心証を少しでも良く見せようと、「自分は本来まじめで気の小さい人間なんですが、劣情をもよおさせる邪悪なエロ本を見て欲情し、悪夢のような犯行に及びました。だからどちらかと言うと悪いのはエロ本で、僕ではありません」的な証言をして、自分の犯した罪をエロ本になすりつけるのは至極あたりまえのことなのだ。責任を転嫁されたエロ本やエロビデオこそいい迷惑である。

あまりにあたりまえすぎて、書いていてだんだん馬鹿馬鹿しくなってきたが、今回は特別サービスなので、もう少し人間存在の核心にふれる話をしてあげよう。もう一つ大切なことを覚えておけ。それは「マ●コやチ●コの写真ばかりが人間の情欲をあおると思った

ら大間違いだ」と言うことだ。人間の性欲をナメてはいけない。人間と言うものは、そんな単純な存在じゃない。マ●コやチ●コが見える程度の、誰もが「これはエッチな画像」とわかるような単純なエロで興奮する人間はまだいい。そんなもので欲情するのはある意味でとても健全なことだ。

だが、俺のような根性のねじまがったハイレベルな変態になると、駅の自動改札機に切符を入れるだけでも欲情するし、教会の十字架を見ても垂れ下がったチ●ポが連想されて全てのキリスト教徒の尻を●したくてたまらなくなる。世の中にはどんな清楚で可憐なものからも、超最低の下品でヒワイな妄想ができる奴らがごまんといるのだ。そういう連中にはエッチ画像の規制など何の意味もない。もし仮に、「サザエさん」のカツオを見て激しく欲情した変態が、次々と少年を●して殺すという犯罪が起きたら、規制好きの善人どもは「サザエさん」の放映中止を叫ぶのか？

もっと言うなら、冷静に考えて最も強烈に性欲をソソるのは、ネット上の無修正画像でもエロ本でも裏ビデオでもない。それは我々男性が普段接する生身の異性、「生きている身近な女」こそが一番のズリネタだし基本なのだ（同性愛とかフェティシズムなんかの例はまた別な話だぞ）。

さァてネット上のエロ画像規制を叫ぶ正義の善良ども、結論が出たぞ。青少年の健全な育成を阻む最もけしからん存在は、時にはエロ画像よりもエロくてソソる生身の若い女性だ。実際、いくらエロ画像を規制しても、モトを絶たなきゃダメだよな。だけど、どーやって生身の若い女を規制するんだ？　皆ゴロしにするのかァ？

性犯罪を完全になくしたかったら、この星ごと人類を滅亡させる以外に方法はないだろう。それでも「憎むべき性犯罪がなくなるなら、人類を皆ゴロしにしてもいい」って言う鬼畜な態度をつらぬくんだったら俺も協力してやるよ。昔から手段の為なら目的なんかど～だっていいんだからな、俺はよォ。

さて、最後ぐらいはマトモな結論を書いてお別れしよう。「人に性欲がある限り性犯罪などなくならない。我々に必要なのは青少年の欲情を規制することではなく、欲情の処理方法をしっかりと教育することだ。それは教師が勃●した生徒のち●ぽこにしっかりと手を添えて、具合いのいいしごき方を教えるにとどまらず、女のくどき方、ハ●倒し方、イカせ方、クソ生意気なコギャル対策、立ち●ぼのま●こ代の値切り方などを、自分の体験

中卒からの裏ネットワーカー入門　序章

★インターネットは世界便所
村崎百郎の超ウルトラスーパーハイセンス妄想インターネット
便所の底からコンニチワ！

○インターネットでヤリまくれ！

「インターネットはイイッスよォ！　一生かけても見きれないぐらいのエロ画像にあふれて適当にメール飛ばせば愛人やマゾ奴隷がいくらでも釣れてヤリ放題のハメ放題！　精子が溜まるヒマもないぐらいのセックスの嵐が訪れて味気ない人生が一気にバラ色になるんだから、こ〜んなウマい話に乗らない手はないッスよォ！」という甘い言葉を俺にささやいたのは何を隠そう本誌編集部のＭａｄである。

疑り深い俺が「そんなもんかねえ、ホントだったらずいぶんとイイ話だねえ」と言う

を踏まえて懇切丁寧に親身になって指導するしかないのだ」ってな！

☆村崎百郎「非公認」ＷＥＢより☆

初出不明／１９９０年代後半～２０００年頃

と、Ｍａｄは「ホントですよ、インターネットをやれば女やエロ画像に不自由しなくなるばかりか、村崎さんと同じ低俗な志を持つゲス変態を集めて〝すかしきった日本文化を下品のどん底に叩き墜とす！〟と言う例の野望をグ～ンと推し進めることだって可能なんですから」などとさらに甘いコトを言う。

「何だって？　そんなことまでデキんのか？」「そーですねえ、さすがに村崎さんと同レベルの下らなさを持ったゲスで下品で卑怯卑劣な低俗低能最低なハイパーどアホ白●キ●ガイはネット上どころか地球上のどこにも存在しませんが、それでも世間的に見るとずいぶんハイレベルな変態が昼間っから堂々とうろついてますからネットは楽しいですよォ」そんなことを聞いては密かに世界下品化計画を企む悪の権化の鬼畜として黙っていられない。「よし決めた！　俺はインターネットをやるぞおおおお！」

「いいですね、どーせやるならゆくゆくは一流のハッカーになってペンタゴンのコンピュータに侵入して、奴らの頭から糞をかぶせるような華々しいイタズラをやって欲しいもんですねえ」「おお、やったろうやないけえ！　ペンダコだか何だか知らねえけど、そのうちいつか奴らの最高機密データの上に俺の巨大な５角形の肛●写真を貼り付けてやるぜえええええ！」

……などと吠えたはいいが、すぐに俺は不安になった。「でもさあ、中卒の俺がはたし

てインターネットなんかに入れるのかねえ?」するとMadは「大丈夫ですよ、最近は●●●や●●●や●●●だけでなく●●●や●●●●●や●●●●の●●●や●●●●までインターネットに入ってますからね。たかが●●●●●の分際でインターネットですよォ! だから中卒なんて別にど〜ってことないッスよ」という。「けどよォ、俺はそこいらにいる並のレベルの中卒連中とは違って、自堕落で向学心も向上心も全く無いうえに卑怯卑劣で正義感や倫理感が完全に欠如して他人様の不幸が嬉しくてたまらないゲスで下品な超超超超最低でカエルの糞よりも数億倍も下らない史上最悪の鬼畜野郎なんだぜ!

そんな俺にコンピュータが扱える賢いインテリどもがひしめきあってるインターネットなんかに挿●できのかねえ? 接続した瞬間に〝あなたは学歴不足で入れません〟とか画面に表示出ねえか?」そう言うとMadは「大丈夫ですよ」とカバンの中から『超極秘!バカでも中卒でもミトコンドリアでも字さえ読めれば誰でも分かるすごくカンタンなインターネット』(出版社不明/この本に関する問い合わせには何があろうと一切答えられません:編集部注)というハイホーなタイトルの本を取り出して俺に渡した。

ページを開いた俺はその瞬間に膨大な電波の干渉を受けて頭がクラクラしちまった。はじめてVALISと接触したホースラヴァー・ファットや、地球外暗号統合局と接触したサイコ・リリィの心境だぜェ! 誰が書いたか知らないが、これは俺が現在妄想執筆中である

名著『暁の超特急―　38歳からのピンポンダッシュ！』に勝るとも劣らないほどの重要な本であることだけは理解できる。そこで分かったのはインターネットの基本的な仕組みと構造だ。何のことはない、コンピュータだ何だと偉そうにしていてもインターネットは網の目のように複雑に繋がった世界的な水洗便所＝下水道システムだったのだ。

　インターネット（世界便所）以前の世界では、人は他人様の糞尿や便所の落書きを読むためには直接相手の家の便所に侵入するか、家の外側についている汲み取り口から勢い良く便槽にダイビングするしか方法がなかったが、インターネットのある現在では自宅に居ながらにしてコンピュータを通して赤の他人様の糞尿や便所の落書きが覗けて楽しめるからスカ●ロマニアにとってこんな素敵なユートピアはあるまいとせんめんき（↑シャレだ！　笑え！）。よしだたくろうもその昔チ●ポを立てながら歌っていたが、昔も今も、古い便器に流れるのは常に新しい糞だし、新しい便器ができれば必然的に大量の新鮮な糞尿がそれに注ぎ込むことになるというわけだ。それが何だと問われれば「便所の数が増えれば流れる糞も増えるからイイぞ！」と答えるだけで、俺は何もいまさら「流れる糞は腐らねえぜ！　ライクアローリングストーン・ボットントイレ！」などという青臭いセリフを吐く気は毛頭ないので頼むから俺の言葉にいちいち感動しないでくれ（しねえよ腐れ馬鹿！・編集部注）。

要は、これまで半キ●ガイの心理学者どもに「集合的無意識」などと言う名前で呼ばれていた見えざる疑似情報伝達システムに変わる「全世界の鼻たれチ●カス糞変態どもが抱える心の闇&暗部情報交換システム（超不完全）」と言う名前のインタラクティヴなでかい共同公衆便所ができたと思っときゃ間違いない。この便所のイイ所は地位や学歴に関係なく、時と場所を選ばずに誰でもとびきり臭い糞をたれることができ、数千万キロ離れた場所で誰かがたれたホカホカと湯気が立つ新鮮な糞の匂いや味を不特定多数の他人が自分の部屋でき●玉をいじりながら楽しめることだが、そもそも知識や糞尿の共有ぐらいで人類が賢くなれると思ったら大間違いなんだよ馬鹿野郎！

インターネットは結果的に携帯電話と同様に、どーにもなんねえカルシュウムとマナー不足の野暮なバカを大量生産することになるだろう。なぜならインターネットの普及は「言語ウイルス」どもによる人類白痴化計画の陰謀の一環にすぎないからだ。嘘だと思うならネットの現実を見るがいい。どこもかしこも誰それがああ言った、こう言ったの限りなく不毛な議論と罵倒と悪口と悪ふざけの洪水である。気にくわないなら直接行って会って相手を全力でブン殴ればそれで済むだけの単純な話なのに、それぞれが気が遠くなるほど膨大な量の文章を書いて不毛な掲示を続け、ひたすら人生を無駄に消耗しているんだから大変なもんだ。

そういう奴らは例外なく言語ウイルスどもの支配と干渉を受けてアホか白痴になってしまっているのだ。覚えておくがいい、言語ウイルスどもは我々が文字を書き、言語を使用すれば使用するほどエネルギーを得て増殖して活性化する性質を持っている。

奴らは我々により多くの量の言語を使用させるために、我々をいたずらに対立させ、状況を悪化させるのだ。だから言語による対立は我々の本意ではない。憎悪は奴らの思うつぼだ。言語に端を発した争いは全て言語ウイルスの陰謀だと思って間違いないのだ。それが分かったらつまんねえ議論は今すぐやめろ！

我々は言語に重点を置いて生きてはいけない。言語で考えるな！　チ●ポ（またはま●こかア●ス）で発情しろ！　戦争やるぐらいならア●ルセ●クスによる尻●和平をめざせ！　お前らの身体をクソたわけた電波や妄想どもに手渡すな！

★この章のまとめ

携帯電話やインターネットはそれを使う人間たちを知らず知らずのうちに野暮にする。
確かに両者は便利ではあるが、その反面、口に出したり文章に書いたりしなければ他人に

何も伝えられないようなハイパー野暮なツマラネエ人間を育てているような気がしてならないのだ。まあ、そんなことは鬼畜の俺には徹底的にどーだっていいハナシなんだが……。

○汗とま●こと悪夢のプロバイダ選び

さて、インターネットに接続するためにはプロバイダが必要らしい。そういえばMadも「プロバイダ選びは重要ですよォ〜」と力説していた。ふん、「プロバイダ」が読んで字のごとくプロのバイタ（●女）＝●春婦をさすことぐらいは中卒の俺でも見当がつくぜえ。

「ヘルスやイメクラでは駄目なのだろうか？」と言う疑問がふいに頭をよぎったが、「ヘルスやイメクラのような本番ナシのフーゾクは売春禁止とかいう寝言に近いタテマエの法律だけがやたらと厳しい日本独自に発達したもので、とてもワールド・スタンダードとは言えないから国際的なインターネットでは駄目なのかもなー」などと勝手に納得した。

次に「プロのバイタといえばやっぱり〝立ち●ぼ〟がベストだろう」と考えた俺は、そ

のまま新大久保の街へと向かった（別に錦糸町でも良かったのだが俺の家から新大久保の方が近かったので今回はパスしといた。歌舞伎町に行かなかったのは、その昔コマ劇場の周辺に出没していたオカ●のプロバイダたちの、どーにも耐えがたい悪夢のようなイメージが根強く残っていたからだ）。

しかし「プロのバイタである立ち●ぼがインターネットの窓口になっている」と言うのはなかなか興味深く〝インターネット便所論〟の正しさを象徴するような事実である。「女の尻●や●穴の向こうに広がる未知の世界」と思っただけでハナが曲がりそうな醜悪なニオイが匂ってきそうでたまんねえぜ馬鹿野郎。

「はたしてインターネットの窓口はプロの売女の尻●なのか●穴なのか？　まさかと思うがへその穴では？」などというアオリ文句を考えながら電車にゆられること数分、俺は新大久保の駅のホームにチ●ポを立てて降り立った。さすがは東京きっての国際暗黒地域だけあって、極太チ●ポをキンキンにおっ立てながら駅前の通りをブラブラしていると見るからにプロバイダらしき派手なメイクの毛●のオナゴがくわえタバコで次から次へと俺に近づいてきてはオレをインターネットに誘いはじめた。

「コンニチワ」「オニイサンアソンデカナイ？」ここですぐに相手の言葉に飛び付いたら

安く見られてナメられる。俺はたかが中卒の分際で極めて知的で優秀なビジネスマンを装い（ああもうぜえったいに無理だと思います。やっててミジメにならないんですか？‥編集部注）、落ち着いた声で「うん、ああ、そういえば僕も最近インターネットぐらい入ってもいいかもなあと思っていた所なんですよ。全部でいくらぐらいかかるのかなあ？」と余裕をかまして聞いてみた。

　すると女は一瞬怪訝な顔をしたがすぐにニッと笑いながら「1ジカン3マンエンデドウ？」などと言った。俺はナメられないように平静を装ってヘラヘラ笑っていたが内心では「1時間で3万円だあ⁉　オイオイＭａｄが言ってたのと話が違うじゃねえか、インターネットってそんなに金がかかんのかよ！」と驚きアワをくった。しかしここで引いてはウタマロチ●ポの日本男児の名折れである！

　俺は発作的に女を殴り倒してハメ●したいという強い衝動を必死に押さえて「それ、もう少し何とかなんないかな〜給料日前だしィ……」などとテキトウなことを言ってみたら女は眉をひそめて「チッ、シケテンナア……ジャア、オオマケニマケテ1ジカン2マンエンデイイヨ」と言うではないか。

　やっぱりビジネスは最終的に交渉の手腕がモノをいうようだ。1時間2万円でも高い気

はしたが、とにかく今は一刻も早くインターネットに入るべきだと言う気もするので今回はこの辺で妥協しておこう。俺は女に案内されて露地裏の小さな安ホテルに入った。「こんな所にプロバイダの会社があるのかよ？」とかすかな不安を覚えたが女は慣れた感じでフロントで鍵を受け取り奥の部屋へと俺を導いた。

部屋に入ってみると、驚いたことにそこにはパソコンの設備など一切なく、小さなベッドとテレビとチャチい冷蔵庫があるだけだった。「パソコンは後から届くのかな？」と聞くと女は「サキニオカネヲチョウダイ！」と言うのでしぶしぶ２万円払ったら今度はシャワーをあびろという。どうやらインターネットに入る前には身体を清めなければならないらしい。

確かにイカ臭いチ●ポや糞のべっとりこびりついた汚い●穴は国際社会のマナーには少々反するような気もするので、俺は言われるままにシャワーをあびてチ●ポと●穴を入念に洗った。その後女もシャワーを浴びて、やっとインターネットに入る準備が整った。「もうそろそろパソコンを運んできてもいいのでは？」と女に聞いたら女はいきなり俺をベッドの上に押し倒して自分の口を俺のチ●ポと接続させた。

「オイオイ違うだろう？」俺は何が何だかワケが分からなくなったが、とりあえずは非常

にチン●コの気持ちがイイのでされるがままにマグロ状態になって快楽に身をまかせた。すると女は全身で俺にからみついて様々な部分での接続を深めた。俺はチ●ポと女の●穴の接続を強く希望したが「オオマイガ〜！　コンナビッグナペ●スハ、イクラナンデモNGヨ！」と言われて少しがっかりだった。本当にチ●ポがでかくて太すぎるのも考えものである。本当にチ●ポがでかくて太すぎるのも考えものである。本当にチ●ポがでかくて太すぎるのも考えものである。

本当にチ●ポがでかくて太すぎるのも考えものである。本当にチ●ポがでかくて太すぎるのも考えものである。（しつけえよ！・・編集部注）ああチ●ポの細い連中がうらやましい！

そんなこんなで体位を変えながらイロイロやって、最後に女が上になってチ●ポと●穴を接続して激しく上下運動をしたが、女の●はクサい上にガバガバぎみだったので俺はなかなかイケず、しようがないので浅香光代と淡谷のり子のヘアヌードを全力で克明に思い浮かべてやっとの思いでイッたが俺はこの毛●●女のマ●コにはもうウンザリだった。

確かにＭａｄの言うようにプロバイダ選びは重要である。この経験から導き出された結論は以下の通りだ。

★この章の最重要事項

1 プロバイダ選びは本当に重要なので慎重に行う必要がある

2 マ●コの臭すぎるプロバイダと、マ●コがガバガバのプロバイダは避けるべきだ

3 マ●コがあまり匂わずシマリもマアマアの国産のプロバイダが良いと思われる

4 できればア●ル●ファ●クがＮＧではないプロバイダが望ましい

5 料金が高すぎるプロバイダにはどんな場合でも「ＮＯ！」と言える日本人でありたい

6 村崎が●●年前に●●県●●市で起こした●件の放火事件がこの春めでたく時効！

7 ああ、それにしても世界下品化計画のための支援者や子分や愛人や尻●隷が欲しい！

8　希望者は申込書をテキトウに書いて写真を添えて　メールで村崎百郎まで送れ

9　俺はいつでも本気だぞ！

そう言うワケで今回はまだ正式にインターネットに接続するまで至らなかったが、それでもずいぶんと野望に近づいた気がするので取りあえずは良しとしよう。待ってろよ鬼畜米国のペンタゴン、そのうち必ず侵入しておめーのけ●の穴を●しまくってやるからな！

（恐怖のスーパー中卒鬼畜・村崎百郎によるペンタゴン侵入まで推定あと1000億光年！　果たしてその時まで太陽系宇宙が存在してるんでしょうか？：編集部推測）

初出不明／2000年頃

中卒からの裏ネットワーカー入門　序章

★新世紀鬼畜宣言　ネット悪女篇

お〜どうしたボウズども？　シケたツラしてくよくよ悩んでる場合かよ？　いまや時代のトレンドとキーワードは、犯罪に限らず〝短絡的〟なのがいっちゃんナウいんだから、あまり深く考えずにさっさとヤリまくれよ馬鹿野郎！っても、この本の読者諸君は日夜コンピュータを自在に操ってインターネットにご接続なされている超インテリ様揃いなんだろうから、いきなり俺みたいなバカで下品になれと呼びかけてもそう簡単になれるものでもないだろう。

だが俺は断言する。残念だが全てが秒単位で劣化しつつある現状では、諸君らの活路は俺のようなバカで下品な超極悪鬼畜になる以外にないのだあああああ！　と言うワケで欲望うずまくインターネットと悪女をめぐる諸問題の論点を整理しよう。

1　お前らがネットを利用するのは、単に〝ヤリてえ〟からである

2　ところが〝ネットは広大だが女はすぐにはヤラせてくれない〟

3　それだけならばまだしも、ブ●やネカマやボッタクリ●春が横行して安心してナンパもできない

4　ああ、どーしたら安心してネットでハ●まくれるんだろう？

以上、お前らの悩みの本質はこんなトコだろう。あまりに単純で高尚なテーマなんで反吐が出そうだねえ（笑）。なんてイヤミ言ってもしゃあねえからオラ先行くぜェ。

まず1については全員、異存ねえな？「ボクは違うぞ！」なんてスカシこいたこと言う奴ぁ完全無視だ！　いい歳こいてテメエの欲望を認められないでどうする！

自分の欲望に正面から向き合って正直になれ！　素直になれ！　お前ヤリてえんだろ？　ヤリたくてコンピュータ買ったんだろ？　ヤリたくてネットやってんだろ！　さっさと

認めちまえよ馬鹿野郎！　認めるのは辛いかもしれんが認めれば楽になるぜェえええええええ！　俺は本書の読者諸君が全て、その腹の底にどす黒い性欲をかかえて「いつか深窓の令嬢肉●隷を飼育してみたい！」と心底願っていることを切に希望する！（理由は特にない／単にオレの趣味）

○明日のためのレッスン1

場所を問わずチ●ポをしごきながら一日に何回も「いいか良く聞け愚民どもォ～！　オレはヤリてえからネットやってるンだあ～！　文句あるかああああああ！」と周囲百メートルの御近所中に聞こえるように大絶叫する（チ●ポのない人はマ●コかア●スにツーフィンガー以上挿入しながら元気良く絶叫してみよう！）その効果：このレッスンを実行すると、自分の欲望を強く自覚することができて、日々の生活にも張りあいができ、自分の人生に自信が持て、願望成就のきっかけとなることだろう。また「アレはただものではない」「けだものだ」と周囲から一目置かれる。

さて、次は2について考えてみよう。

これについては実に困った状況がある。なげかわしいことに気前良くタダでヤラせてくれる女が激減しているのだ。近頃に限らず世の中はいつでも何でもカネ、カネ、カネなので仕方がないと言えば仕方がないのだが、ま●こ代があまりに高すぎるのは実にゆゆしき事態である。俺は月イチで対談があるので渋谷に行くのだが、街を見ると歩いているのはホストか風俗嬢かオタク野郎だ。

特に女は10人歩いていたら、そのうち25人は風俗嬢だと思って間違いないから大変なもんだ（ここでいう〝風俗嬢〟とはカタギも含めて〝カネを払わなければヤラせてくれないケチ臭い女〟という意味である。全くもう、この国のオナゴは、いつからカネやモノや食事をおごられなければヤラせてくれない売●になり下がったのだろう？　どこかにゼニカネ抜きで気前良くタダでヤラせてくれる器の大きなオナゴはおらんのか！　いたら一発といわず何発でもいいからヤラせてくれ！）。

最近も『少年ジャンプ』の人気漫画家（27歳）が女子高生を8万円で●春してそれが発覚して逮捕されるという哀しいほどおマヌケな事件があったが、この女子高生の親はいったい娘にどう言う教育をしていたのだろう？　たかが女子高生の腐れお●んこ一発に8万円も払ってくれたお客さんを警察に売るとは、売●婦の風上にも置けないあきれたマ●カ

ス娘である。俺は女子高生の売春が悪いなどとは少しも思わんが（ロリコンじゃねえから全く興味ねえよ）、カネを取ってヤラせるプロならプロらしく、あそこが裂けても客の秘密をオマワリにしゃべるなよなと思うワケよ。

まあ、この場合は、たいしてフ●ラテクもなさそうな小娘に8万も払う客の方にも問題はある。女子高生に8万は明らかに払い過ぎ。女子高生が良いフェ●チオをしてくれたら、「今日は良く頑張ったね」と言ってノートか参考書を買ってやるのが人の道ってもんだろう。そう言うのが正しい〝援交〟じゃねえのか？

ただ俺は何もプロの売春を否定してるワケではない。何の分野でもプロの技というのは確実に存在していて、それらプロの技を持ったプロの仕事にはそれに見合う料金が支払われて当然だとも思う。実際プロのフェ●チオは素人のそれとは天と地ほど違うもんだ。

俺は以前気のクルった風俗嬢と付き合っている時、そいつのア●ルなめとフェ●チオがあまりにも上手すぎて気持ちが良いので、チ●ポを●に挿入しないで際限なくフェ●チオをねだり、口内●射オンリーのセ●クスばかりをしてフラれた経験があるので言っておくが、プロのフ●ラとア●ルなめはもおタマラン！

アレを経験せずに死ぬのは馬鹿である。しかしながら、セ●クスはなるべくならタダがいい。もちろん愛なんてあってもなくても。と言う所で話を2に戻そう。〝ネットは広大だが女はすぐにはヤラせてくれない〟と言うのは実にけしからん問題である。

この際、女性の側に意識改革してもらって〝ネットは広大で女もすぐにヤラせてくれる〟ようになるのが理想なのだが、「んなわっきゃねえだろ馬鹿！」と言われるのがオチなので、ここはひとつ、ロマンを持つしかないだろう。すなわち「この広大なネットの何処かで、ボクのチ●ポに吸い付いてしっぽりとタマを包み込むように優しくナメ上げ、ア●スのシワの一本一本にまで舌を這わせてドリルア●ルなめをしてバキュームフ●ラでボクを何度もイカせてくれて、何時でも好きな時に望めば四つん這いになって尻を高く上げてハ●狂わせてくれる都合の良い女が最低15人はいる！」という宅間守（池田小でガキを刺しまくり8人殺した鬼畜。「バッハのリズムで首吊りたい」など意味不明の名言が多い）もビックリの強烈で身勝手な思い込みを持つことである。

とにかく、こう言う身勝手な思い込みは先に持ったほうが勝ちである。最初から信じるのは難しいかもしれないが、「継続は力なり」と赤尾の豆単にも書いていた通り、人間は一つのことを続けて思い込めば、ある程度発●できるものである。とにかくやってみなさい。

○明日のためのレッスン2

広大なネットのどこかには、自分の肉●隷になりたくてなりたくてたまらないと言う奇特な女が最低15人はいて、日夜自分を求めてネット内をさまよっていると強く激しく思い込み、その姿をスーパーリアルに妄想（想像）して期待せよ！　その効果：本気で思い込むことができると、生きているのが楽しくなります。〝信念の魔術〟ではありませんが、想像することは世界を創る行為でもあり、これを続けるとあんがい本当に肉奴●ができちゃったりするものです。「人は自分がやりたいと思ったこと以外、何一つできない」というウィリアム・バロウズの言葉もありますし（笑）。

そして問題の3である。

「ブ●やネカマやボッタクリ売●が横行して安心してナンパもできない」と言うのはネットに集う迷える小鬼畜諸君の一番切実な悩みだろう。今回の俺の原稿はこの悩みを解消するために書いていると言っても過言ではないので皆もこの先は心して読んでくれ。

実はネットにはびこるブ●やネカマのナンパ問題は、全て俺が以前から提唱している〝鬼畜的発想法の転換〟でキレイサッパリ解決できる問題なのだ。迷える小鬼畜どもよ、ネットナンパでブ●やネカマを釣りあげるのが怖ければ、今すぐ俺のようなゲスで下品な鬼畜になれ。ゲスで下品で粗野で凶暴で、自分の快楽の為なら手段も目的も選ばない真性鬼畜になるのだ。自分が変われば世界が変わる。かのヘーゲルも臭い屁をこきながら「世界は絶対精神の自己展開だ」と言っている（大嘘）。

だから、お前らいますぐ発●しろ。そうすればブ●やネカマなど怖るるに足らず。頭のネジをユルめればオーケー。ブ●でもネカマでもいいじゃないか。ブ●でもネカマでもとりあえず穴があればヤレる。男だろうと女だろうとそいつが生命体なら口や●穴ぐらいあるだろう。そこにチ●ポを入れりゃいいんだよ。ネカマが怖くてメシが喰えるか？　頭のチャンネルを切り替えろ。「ブ●」と言うが美人とどれほどの違いがある？　ブ●と美人の違いは、たかが見た目の表面の皮一枚の問題だろ。

そんなものにこだわってどうする。要はヤレりゃいいんだよヤレりゃよおおおおお。ああ、もうブ●でいいじゃねえか、ブ●でよおおおおお。●スはいいぜええええ、ブ●はよおおおおお。ブ●とヤル時は〝ブ●とやるのが好きで好きでたまらない美意識の狂った人格〟を表に出せばいいだけなんだよ。まさかお前ら持ってる人格がたったの一つだなんて

情けないコト言うなよな。

誰でもちょっと訓練して自己催眠の強いやつをかければ人格の3つや4つぐらい簡単に持てるんだよ。近頃はキ●ガイのことを統合失●症って言うらしいが何と呼ぼうがキチ●イはキ●ガイなんだよ覚えとけこのウスラ●鹿ども！　まあこんな時代だから他人よりも先に深く激しく狂った奴の勝ちなんだよ。

実際、〝ブ●とヤルのが好きで好きでたまらない人格〟を持てば、ブ●とヤルのが楽しくてたまんねえぜ。目ェ合わせるのが我慢なんねえぐらいキツい顔したブ●を、「きみってかわいいねえ」って拝み倒して口説くのは想像を絶するマゾヒスティックな快感を体験できるぜ。その快感はプライドの高い奴ほど凄いらしい（俺はプライドがねえからいまいち）。

「ああ、オレって何の因果でこんなブ●におべっか使って頭さげてまでヤラせて下さいって頼んでるんだァ？　お父さんお母さん、ご先祖様ごめんなさい。ボクは一族の面汚しで戸籍汚しの最低のクズで～す！」なんて言いながらブ●を抱きしめるのは気ィ●いそうなぐらいたまんねえぜ。マジで全身鳥肌立つからな。

　これが身体の相性が最低のブ●になると不快感が最高潮。お前らデブで骨太で汗っかきで目が細くてつりあがって歯並びメチャクチャ、ワキガでマ●コから異臭漂ってくる怪獣レベルの女とハ●狂●たことあるかァ？　そういうブ●の股間に頭から突っ込んで臭いマ●コ舐めるのは、傍から見ると地獄の責め苦以上の拷問に近いぞォ。

　ク●ニしながらチラリと女の顔を見上げると、どうにも崩し様のない顔したブ●が、俺のクン●で醜い顔をさらに歪めて、この世のものとは思えない凄まじい表情で快楽にうち震えてよがり啼くんだぜえええええええええ！

　普通の奴なら思わず発作起こして女が死ぬまで全力で顔面タコ殴りにして逃げる所だろうが、俺は違う。鳥肌を立てながらチンポも立ててブ●のゆがんだ顔を見ながらブ●の名前を大きく叫びながらイクのだ。人生たまにはこういう極北の恐怖と苦痛を感じながら因果を深めて経験値を上げるのもいいもんだぜ。

　ネカマだろうとオカ●だろうと同様。そいつが自分は女だと言うなら女のように扱って、チ●ポしゃぶらせて尻●にハメ●ってやるのが礼儀と言うものだろう。俺も仕事でニューハーフにカマ掘られた経験あるけど実にいいもんだぜ。元が男だからフ●ラチオもツボを心得ていてヘタな風俗嬢よりもよっぽど上手いし気持ちがいい。

がることもないので、人殺しになりたくなければ、ブ●を口説く時は馬鹿にしないで誠実に口説いた方が身のためってことだな（笑）。

もう一つネット恋愛で大切なのが尻●の開発だ。これは人類にとってはシベリア開発以上に重要な問題である。ア●ル●ナニー歴30年の俺には●穴の快感に目覚めていない尻●が処女の連中は男女共々〝大人になりきれないウブなコドモ〟だとしか思えない。この話は『危ない1号』の第3巻の尻●処女喪失体験記でしつこいくらいに念入りに書いたので、もうくどくどとは繰り返さないが、ネットナンパをやるなら尻●ぐらい開発しておくのが常識であり礼儀なのだと言うことだけは覚えておいてほしい。

少なくともワールドスタンダードは水割りと同じく、自分の指でツーフィンガーをラクに自分の尻●に挿入して前立腺を刺激するアナ●オ●ニーでイケることだ（自分の尻●にスリーフィンガーが入るなら男根の挿入も充分可能。アナ●オ●ニーは深みにハマればハマるほどアナ●バイブでは満足できなくなり、誰でも最後は本物のペ●スが欲しくなるものだ。いつ誰にいどまれても応えられるように日頃から尻●の拡張訓練は怠るな）。

尻●が開発されてア●ルの快感に目覚めればネカマはもう怖くない。それどころかネカ

らないから問答無用で拳をにぎりしめて相手のツラに全力で北斗百裂拳を叩き込んで後ろを振り返らずに全力逃走だ。だからまあ、逆にいえばヤルならなるべくネカマかブ●にしておくのが賢明だろう。

ブ●やネカマの美人局など少ないと思われるので、この点からもネットでハ●るならネカマかブ●がいいと言うわけだ。常識で考えてみろ。美人で頭が良くて可愛くて性格の良い女の子はネットなんかからやらなくても現実世界でいくらでも男が寄ってきて恋人ができるものである。だから、そもそも「インターネットと悪女」というテーマは根本から間違っている。だいたいインターネットをやってるような女に善人が一人でもいるのか？　いるのか？　いるのか？

いるなら俺に一発ヤラせてみんかい！　いねーだろ畜生！　いたら編集部気付けで俺に連絡してきやがれ！　全力でハ●倒してくれるわ！……しかしこの問題は女ばかりの事ではない。男性読者諸君も冷静に考えてみろ。はたしてお前らがマトモな市民といえるか？　こんな本買うか万引きする時点で俺と同レベルの社会不適応者だぞォ！　わァかってんのかァアアアア⁉

そんなわけでイロイロけだものじみたセ●クスをしてきたおかげで、オレは上手くシャブってくれるなら90歳のじいさんだろうと16歳のガキだろうと老若男女を問わず病気持ち以外は誰でもかまわねえという悟りの境地に達している。この境地はオウムで百年修行しても到達するのは不可能だろう。

これは読者諸君らのようなストレートでノーマルな性癖を持ったボウヤたちが一足飛びにたどりつけるほど甘いものではないが、徐々に慣らしていけば必ず「どんなブ●でもオカ●でもオーケー」になるので、まあ程々に頑張れや。なるべく若いうちにおぞましいセ●クスを沢山体験して精神を鍛えておくと、後でなにげない普通の女とセ●クスする時に限りない幸せと悦びを感じたりできるから大変おトクだぞ。あと注意しておくが、ブ●を口説く時には間違っても「おめーみてえなバ●モノとヤッてやるんだからありがたく思え」などと考えるなよ。

ブ●に限ってそう言う所には非常に敏感なもので、そんなことを思っているとすぐに伝わってしまい「私、ボランティアで抱かれたくないわ」とフラれてしまうこともあるぞ（ブ●にもプライドがあるんだよな～）。体験してみれば身にしみるだろうけど、こいつは最低と思う、町一番のブ●にフラれるほどミジメで頭にきて発作的に殺人衝動が湧きあ

でも俺にはお前らの腹の中は全部電波で分かる。見え見えだ。お前らは一人残らずヤリたいだけのサカリ小僧とハ●好き娘なんだよ！　と言っても別に馬鹿にしてるワケじゃないからカン違いするなよ。自慢じゃないが、俺はお前らぐらいの歳の頃はお前らの何千倍も性欲が強烈でヤリたくてヤリたくてたまらなかった。10歳の頃から下着泥棒とせんず●りを殆ど同時に覚え、ついでに浜で拾ったＳＭ雑誌を読んでア●ナル●セ●スとＳＭに目覚め、学校の勉強以上にア●ルオ●ニーに精を出し、成長してからはますます性欲がたかまり、下着泥棒も続けたし、たまには強●もした。

強●した相手の家にそのまま住み込んで４年も５年も●し続けたり、その間もヤレる相手とは極力●メ●い、ヤリ飽きた相手には頭から袋をかぶせてエロ本を読みながら我慢してハメた。それでも足りなくてア●ナルオナ●ーやせ●ずりを日課にしていた俺は本当にただの迷惑なセ●クスき●がいだった。あの頃は毎日が射●！　射●！　●精！　の連続で、労働も食事も睡眠も、全ての行動は次に出す精子がき●玉にたまるまでのひまつぶしだった。それで分かったのは

マ万歳だ！　ネット恋愛でネカマをゲットしてア●ルセ●クスとスカ●ロプレイを楽しもう！「ネカマさんいらっしゃ～い！　あなたがどんな男でも女でもオカ●でも老人でもイボイノシシでもボクはかまいません。ボクの所に来たら誰であろうが極太激黒チ●ポをシャブらせてビンビンに勃●してアナ●セ●クスです。その後でボクのア●ルも犯して下さい。ボクは男ですがカマを掘られてイクときはとびきりセクシーな女声で、よがりクルってイキまくりますよおおおおお！」

ついでに書いておくが、ボッタクリのネット売女には引っ掛からないのが一番だが、万一引っ掛かっても一切カネを払わないことだ。初めから「ボクはセックスには一切カネを払いません。純粋な恋愛以外おことわりです」と公言してはばからず、会うときはカネもカードも一切持っていかずに会うなり「ボク金持ってません。要求されたら裸になって暴れます」と宣言して、監禁されそうになったら奇声を発して裸になって脱糞放尿して発●したフリをして相手かまわずウンコを塗りたくれば、放り出されるか撃ち殺されるだろう。

　要は過度なスケベ心を持たず、ウマい話に気をつければボッタクリに合う確率は確実に減る。たとえば、ものすごく可愛い女子高生が待ち合わせの場所にいたら、そんな現実はありえないウソか、強すぎる性欲が見せる脳内現実の妄想に決まっているので、遠慮はい

★鬼畜流「オンナをその気にさせるビッグバン理論」

よお、ねーちゃん、オレに一発めぐんでくんねえかな？　ダメ？　あっそう……待った！　ちょっと待った！　突然言われて戸惑うのは分かる。あんたがオレを恥知らずのあきれたキ●ガイ男だと思うのも分かる。だがちょっと冷静に考えてみてくれ。思えばビッグバンが起きて宇宙開闢以来、この惑星に生命体が誕生し、その中で人類が生まれ進化して戦争を繰り返しながら高度な文明を築き、民主的で人道的な平和を得て、自由に恋愛をしてセッ●スを楽しむことができた時代が他にあっただろうか？

そうだろう、アダムとイブが楽園を追われて以来、人類がこれほど高度発達した文明のもとで、平和で安心して自由にセ●クスを楽しめた時代は他にはないんだよ。君にはその重要性が分かるかい？　そう、人の一生は広大な宇宙の無限さに比べれば、あまりに儚く短い。

そして人が一生に出会える人の数なんてごく限られたものだ。この広大な宇宙の中のちっぽけな星の上で、君とボクが平和な時代に生まれて出会えたことだけでも実は途方もない奇跡の積み重ねの上に成立した〝超奇跡〟なんだよ。ほんの50年でも先に生まれていたら、そこはネットも携帯もないばかりか、みんなお国のために一致団結してクソだせえ

鬼畜真理１　インターネットやってる人間にマトモな奴は一人もいません

鬼畜真理２　どいつもこいつもキ●ガイだ！

鬼畜真理３　ヤラせねえならさっさと死んじまえ！

こう書かれると頭にくる奴もいることだろう。そういう奴はまだマトモだ。つまらん。お前らオフ会で善人面してどーすんだよ馬鹿。そんなことやってるからいつまで経っても女一人ハ●倒せねえんだよ。大人しく場の空気なんか読んでんじゃねえよ阿呆、お前ら空気清浄器かァ？　ヌルヌルと粘着質の偽善的な優しい空気ってヤツが俺には何より耐えがたいぞ。

お前ら、誰の、何のためだかわかんねえねえ奇妙に優しい連帯感と倫理感がはびこってるチャットやＨＰに疑問感じねえのか？　くだらねえ議論してるヒマあったら一人でも多くの女やネカマに「ボクはセ●クス目的でネットやってます。できれば今すぐ一発めぐんでくれませんか？」って正直に頼めよ！　やりたいならやりたいってちゃんと言うのがまっとうな人の道ってモンだろうがあああ！　と怒ってみても無視されるんだろうな。

エネマ●ラ（肛●に挿入するだけで前立腺を刺激してイキまくれる大人のオモチャ／気の利いたエロ本の通販広告では8千～1万円程度で売ってる）を肛●に挿入してのア●ル&チ●コオナ●ーを毎日行う。前立腺の快感と肛門括約筋が鍛えられてもうウハウハ。この快感に目覚めたら安い合法ドラッグなんかやってられねえよ。

その効果：ア●ルの快感を開発してアナ●マニアになったら、もうネカマなんか怖くない。オカマに会ったら進んで尻をさし出すナイスガイになれるぜえええええ！　そして最後に4の「ああ、どーしたら安心してネットでハメまくれるんだろう?」という問題を考えよう。「思い起こせばテレクラも伝言ダイヤルもニフティもインターネットも最初のうちは良かった！

ゼニカネ抜きで、ただ純粋にヤリたいだけの男女が集いサカリ合ったあの日々は何処へ行ったのだろう?」というエロマニアたちの昔を懐かしむ声を良く聞くが、この高度に資本主義的な市場社会では、どんな便利なメディアもたちまちボッタクリ犯罪の巣窟になる運命にある。純粋に商売抜きでヤリまくりたい者同志が、共にチ●ポとま●こを濡らし合って、安心して出会える場を作ることの重要性は政府の構造改革など問題にならないくらい高いが、こう言う問題は官に期待しても無駄である。むしろ民間の草の根団体が率先

鬼畜真理5　女のマ●コにそれほど劇的な違いなどない。どの女も大して変わらない

鬼畜真理6　同じ相手と同じセ●クスをヤリ続けるといつか必ず飽きる

鬼畜真理7　女と付き合うのはめんどくせぇ

鬼畜真理8　しりはいいぜえ、しりはよおおお！

　と言うことである。読んだ通り真理と呼ぶには実にくだらねえ。俺自身はくだらねえが、諸君らも自分の人生にこれといって明確な目標や目的がないのなら、とりあえずセ●クスをめざしとけば間違いないだろう。間違っても正義に目覚めて真面目に政治だの社会運動だのボランティアだのと、世の為人の為生きようなんて考えるなよ、馬鹿がそう言うことするとつまらん被害者になるだけだからな。どうやって女を口説けばいいのか分からない連中は、鬼畜流のビッグバン理論で口説くのが適当だから紹介しておく。

終末論という〝電波〟

村崎百郎

あ〜ハイハイ、終末論ねえ、終末論。いや参ったな、あんたが来るちょっと前に別の人が来てもう3カ月先まで予約入れちゃったんだけどさ。何？　その後でいいから取ってくれェ？　ウチの終末論はいつも最新のネタが揃っていて「恐怖の大王」の正体はプルトニュウム大量搭載の探査衛星カッシーニの大気圏墜落だと大予想だァ？

そんなの古い古い、この近所じゃ3つのガキどころか、お向かいの山田さんちの犬やその屋根の上で昼寝こいてるノラ猫までみーんな知ってる出がらしのネタだよ。その程度のオドシじゃ到底ビビれねえよなあ。今ご教主様にすがるならあんただけは助けてやるって言われてもカネなんかただの一円だって寄進する気になれねえって。

それにしてもあんたらも大変だねえ、この不況は霊感商法業界も同じらしいからねえ。景気が回復してくんなきゃ終末論も満足に売れねえだろ？　そろそろ時期も時期だし世紀末商法の大バーゲンセールも終盤に向けてラストスパートだ。「恐怖」を娯楽にしている各種メディアの特売恐怖商品も、あまりにも沢山普及しすぎて客も目が肥えて贅沢になっ

モンペはいてアタマ丸ボーズにされて若い奴から順に戦争に行かなければならなかったんだよ。

そんな中でセ●クスを自由に楽しめたのはほんの一部のお偉いさんたちだけだったんだ！　そう、だから、ああ、ボクは君に出会えてとても嬉しい！　ボクはこの星に生まれて君に出会えた奇跡にはいくら感謝しても足りないくらいだ。だからお願いだ！　ボクたちがこの星のこの時代に生まれて出会った記念にセッ●スをしよう！　飢餓や疫病や戦争で、セッ●スを満足に楽しめなかった先祖の皆さんに成り代わって、人類史に残るラブリーでハイホーなセッ●スをしよう！（もちろんタダでだ！）さあ早く！

以上の理論というか口説き文句は論理的には完全に破綻しているからでまかせのとんでもねえ代物なのだが、これを語る場所や時間や相手を慎重に選べば、それなりの説得力を持ち、不思議とヤレることが多かったので俺は重宝している（実話）。まあ、適当にアレンジしてやってみろ。星が降るように沢山見える田舎の夜なんか最適だぞ。あんまり思慮深くない女相手にやってみると●交率が高いのは言うまでもないが（笑）。

○明日のためのレッスン3

な人間の皆さんが真剣に考えるべき問題ではないことだけは確かである。もちろん終末論を奢れる人類への警鐘として受けとめ、ゴミやダイオキシンなどの地球規模の環境問題に危機感を持ち、真面目にこれを討議することは地球の未来のためにも子孫繁栄のためにもやぶさかではない。しかし、霊だの霊界だの神の裁きがどうのと言う〝脅し〟がメインの恐喝性終末論は徹底的に無視するべきだろう。

アタマの中へ直接神だの悪魔だのを自称する輩からのメッセージが頼みもしないのに延々と届く妄想インターネットの電波受信歴が37年に及ぶ真性キ印電波系で、幽霊や悪魔や天使の幻もよく見る俺が今更言うのも何だが、神だの仏だの霊界だのと言う非科学的なものの全ては、自意識過剰な人間と言う生き物が自らでっちあげたうえで、でっちあげた事実をきれいさっぱり忘れた性質の悪い妄想にすぎない。

読者の中には「そんなことは、わざわざキ●ガイに言われんでも分かっておるわい！」と言う科学的で冷静な諸兄も沢山おられることだろう。その方が望ましいし当然だ。しかし、>20世紀も終わりかけていると言うのに、まだまだこの世に多くの〝宗教〟が偉そうに残っていてハバをきかせているのは否定のしようがない事実である。それも教団を経営している連中が、明確に金儲けの詐欺商売をやってる意識があるならまだしも、どう見てもマジで信じているとしか思えないような手合いがほどんどだから驚きだ。そう言う事実を

して行うべきであろう。

だからいま本当に必要なのはイラクだのアフガンだの北朝鮮みてえにどーにもイケてねえ臭え国の支援や援助団体ではなく、国内の性欲を何とかするフリーセ●クスＮＧＯなのだ！　たとえば俺はいま、発作的に、だめ連ならぬ〝ハメ連〟というぐーたらで自堕落なフリーセ●クス交歓組織を考えた。正式名称は「セッ●スはヤリたいけど相手探すのメンドーでカネはないし払う気もない、それでも何でも誰かとハメハメしたい自堕落なハメ人間共同体」なのだが、別にどうでもいい。

こう言う連中がだらだらと組織を全国的に大きく育てて、交通費だけでいろんな相手とヤレるような状況になるといーかもしんないけど俺はめんどくせえことを自分でやる気はねえから誰か試しに作ってみろや（笑）。話題になるぜ～ア●ル●セッ●スＮＧＯなんて、名前聞いたたけで尻●うずくしな～。まあそう言うわけだ。だからとっとと発●してヤリまくれ！　どいつもこいつも●ったアタマが狂気の向こう側でもう一度反転して正気に戻っちまうまで深く激しく●うがいい！

初出不明／１９９０年代後半～２０００年頃

考えると人類全体の正気度がどれほどのものかが分かるだろう。

俺は何も自分が電波系のキ印として特別並外れた受信力を持っているなどとは思っていない。普通の連中よりははるかにバカで下品なうえにスケベだという意識はあるが、それを除けば頭に入ってくる非科学的なヴィジョンや膨大なメッセージのキチ●イ度は多くの幻視者や予言者、霊能者たちと大差ないと思う。一つの繋がりを持つ幻聴幻視が24時間一秒も絶え間なく連続して何日も続くことは稀で、どんな幻聴幻視もある時期にフッと途切れることがあり、そのとき意識が冷静に戻って「ああ、あれは電波だったのか」と気がつくものなのである。これは俺に限らず、多くの霊能者などの電波系の連中も同様だと思う。

絶対に、見えないモノが見える連中は、本当は心の奥底でそれが自分自身の過剰な自意識が作り上げた妄想であることに気がついているはずだ。にもかかわらず霊だの霊界だの神だの悪魔だのと言い続けてそれをネタにカネをせびる野郎は、回復不能のモノホンのキ●ガイでなければ明らかに詐欺の確信犯に間違いない。そんな連中の言うことは一言たりとも耳を傾ける義理も義務も必要もない。目の前の霊能者が「あんたの前世は……」などと言い出したら、言い終わらないうちに容赦なくブン殴れ。

てるから並大抵の恐怖では満足しねえだろ？　俺もできれば聞いただけでき●玉が縮み上がって思わず脱糞放尿するような凄まじい恐怖が欲しいんだけど、やっぱり俺みたいに魂のレベルまで腐った鬼畜には無理かねえ？

……以上の会話は、決してしつこい勧誘で人気のあるＹ新聞の販売拡張員との会話ではない（新聞の拡張員にはいつも「オレは中卒だからいらねえよ」と言って断っている。いまだかつて、それに続けて「何だよ、オレの学歴に文句があるのか」と言って「だったらなおのこと、新聞取って勉強でもしがやれこのクズがあ！」と言い返されたことはない。「オレも中卒だけど卑屈にならずに頑張ろう！　と言われて手を握られたことはあるがそれでも契約はしなかった）。

以上の会話は、俺のアタマに常時やってくる様々な〝電波〟の中で最もタチが悪く（これに比べれば、Ｙ新聞の拡張などはガンジーかマザーテレサ）決してまともに耳を傾けてはいけない電波の一つ〝終末論〟の販売拡張電波に対する俺の対応の一例である。

一連のオウム事件からも明白だが、〝終末論〟はしばしば悪質な霊能者や教団どもが行う宗教サギやボッタクリ霊感商法の集金理論に利用されやすい妄想の一つであり、まとも

シロウトは素手で殴ると拳を痛めるから側にある椅子かテーブルでも振り上げてブン殴れ。景気付けに「近代科学をナメるんじゃねえええ！」と言いながら殴ってもいい。奥歯が折れるまでメチャクチャにブン殴ってから、それでも霊だの霊界があるかどうか聞いてみるがいい。死後の世界など、それが見えるとかあるとか言う奴らを皆殺しにすればとりあえずは消滅する妄想なのである。

俺は同じ電波系として宗教サギを働く連中だけは絶対に許せない。奴らは、こともあろうに我々電波系の人間を日夜苦しめる〝電波〟と組みやがった裏切り者である。それだけならば妄想戦の敗者として同情もするが、電波に荷担し電波の受信者（信者）を増やし、同時にカネも儲けようと言うあさましい根性は電波系のみならず人類に対する重大な裏切り行為で、その罪は万死に値する。

できれば皆ゴロしにして畑のコヤシにしてやりたい所だが、この国にはそう言うクズ鬼畜のチ●カス野郎にも人権があると言うのだから驚きだ。まあ、とりあえず、俺は俺の人生で俺の前世がどうのとか守護霊がどうのとか偉そうに言いだす野郎に会ったら、相手が男であろうが女であろうが容赦なく殴り倒して●穴にフィストファ●クをかまして、リキまなくてもウンコが出る便利な身体にしてやるから期待して待ってやがれ。

それは電波系でもないくせに電波と組んで終末論や世紀末思想をことさらアオッて人々を不安にさせ、バカな宗教テロを起こすきっかけを生んだ一部の学者センセイも同罪である（別に誰とは言わないが、分かるよなァ諸君）。

無知な人々を啓蒙し、人を傷つけたり不幸にする根拠のない迷信（因果論から導かれる弱者差別など）から解放し、文明や科学を進歩させるのに貢献するのがまっとうな学者や研究者の在り方だというのに、〝電波〟と組んで終末思想をアオり、それをネタに儲けやがるとは全くもって言語道断、いつかゆっくり愛してやるから覚悟しな。

忠告しておくが、何もそう思ってるのは俺だけじゃねえから月夜の晩以外にも気をつけろよ。ホント言うと俺はお前が誰かに刺●されるヴィジョン、何度も見てるんだ。まあ、もちろんそんなものは俺の願望が妄想になって現われただけのことだってのもよ〜く分かってるんですけどねえ。何事も「初めにイメージ」ありきですからねえ。

確かに宗教には、過去においても現在においてもなお、「悪いことをすると死んでから地獄に落ちるぞ！」と言うオドシによる共同体内の倫理感の確立や秩序維持に貢献してきた事実はある。それは認めよう。だが、それを差っ引いても現在横行している宗教詐欺や

霊感商法には目に余るものがあり、その中でも「終末論」は最悪の妄想である。しかし、当然だが、こんなものは怖れる値打ちもないただの妄想だ。

冷静に考えてみよう。終末論だこの世の終わりだと言っても、日本という国が丸ごと沈没しようが、人類が滅亡しようが、どちらにしても自分が死ぬのは一回ポッキリで、とりあえずは自分の死に恐怖すればいいだけの話なのである。

そして、予言されている終末が来ようが来まいが、いま生きてきる人間は、近い将来に革命的な延命技術でも開発されない限り、ほんの百年もすれば大部分が寿命で死んでいることだろう。時期の違いはあれ死は万人に訪れるものなのだ。確かに「自分が死んでこの世から消滅する」ことを考えるのは誰でも怖い。

だからこそ自分が死ぬことについては死ぬときになってから考えよう。冷静に損得計算をすれば分かるが、ち●こやま●こがピンピンしている若い頃から「死んだらどうしよう」と怖れてばかりいては死ぬまでの長い人生が辛気臭くてセ●クスだって何だってちっとも楽しくないだろう。だから「死んだらどうしよう」という問題は自分が死ぬ間際になってから考えたり怖がればいいことなのだ。何でもモノには旬がある。死の恐怖は死の瞬間に味わおうではないか。

このように割り切って考えると、人類の滅亡もあまり怖くない。どう死のうが苦痛は一瞬だし、死の瞬間には脳内に大量のエンドルフィンが出て苦しいどころかえもいわれぬ快楽を体験できると言う説もあるくらいだ。気休めかもしれないが、この俺も10歳の頃に海で溺れて臨死体験をしたが、その時はそんなに苦しくなかったぞ（結果的に死ななかったせいかもしれないが）。

そして世の中の終末論には、死の恐怖に追い討ちをかけるように「人類滅亡の終末がやってきたときは死後に神の裁きで魂が地獄の劫火によって豪華に焼かれて想像を絶する苦痛があるぞよ！」などと脅迫するたわけたモノも多いが、これも根拠は全部〝電波〟なので気にしたり真面目に聞く必要は全くない。

これは終末論に限らず、宗教や霊能などの電波一般に共通して言えることなのだが、全ては単純に、言いだす奴の「できれば自分が死ぬときはこの世の終わりに立ち会いたい。自分の人生だけは、これまでの人間たちとは違って特別で意義のあるものであって欲しい。そうでなければこの世に生まれてきた価値も意味もない。自分が注目されたり尊重されない世界ならばいっそのこと滅びてしまえ！」などというたぐいの、超身勝手な「自意識過剰」からくる妄想である。

奴らの思考パターンは多少の違いはあれ大方は以下のようなものだ。

「ああ目立ちたい、注目されたい。自分は明らかに特別な時代に生まれた特別に選ばれた人間だ。そうでなければこんな世界は耐えられない。だから俺／私はこの話（終末論）を一般ピープルのうすら馬●どもに話して聞かせなければならない使命があるに違いない。そうしなければ一般ピープルは俺／私のことを注目しないし尊敬も尊重もしてくれない（村長でもないし……）。ああ何て自分は特別で凄い奴なんだろう、そう思うと自分が可愛くて貴重で尊く思えて仕方がないや。

こんなに特別で優れた存在なのに何で世間は俺／私に注目しないで下らない馬鹿タレントやアイドルに注目するのだろう。おや、何か声が聞こえてきたぞ。ふんふん……そうか、そうだったのか！　そうじゃないかと思ってたんだ。ざまあみろ、やっぱり終末が近いんだ。

俺／私を注目したり尊重しなかった奴らなんて、みんな苦しんで死ねばいいんだ。いや、それだけではおさまらない。死んでからも地獄の劫火に焼かれて永遠に苦しむに違いない（自分としてはその方が望ましい。そうでなければ許せない）！　さあ聞くがいい、

俺のことを注目もせずに無知無能で品性下劣にして醜悪極まりないくせに俺／私よりもずっと幸せそうな顔して楽しそうにしたがっている一般ピープルどもよ！（お前らなんか呪われろ！）

これから俺／私の言うことをよ〜く聞け！　この世の終わりは近いぞ、俺／私は見たんだ、大地は割れ、巨大な火柱が天空まで昇るのを……（以下、よくある退屈な終末の描写。ヨハネの黙示録などを参照のこと）」

あさましい、実にあさましい妄想……と言うか、ここまで来ると妄執である。

あのなあ、お前ら、いいかげんに目ェ覚せよ。同じことを何遍も書いて恐縮だが、今日は〝特別〟に、お前らのご両親や先祖に代わって親切で言ってやる。冷静になれ、この世に特別な人間なんか、一人もいねえよ。

生まれつきの貧富の差や身体的な特徴の違いはあっても、この世に特別な人間なんか一人もいない。それが客観的な真実だ。当然だろ。あいつは霊格が高いとか低いとか、あい

つは一流であいつは二流だとか言って、他人に格付けして見下したりするお前！　ホント〜に自分に自信がないんだな、可哀相に。

自分が人よりランクが上で特別な存在だという妄想を持っていないと、不安で不安で一日も生きられないなんて、大蔵省のエリート官僚（この国で最も尊大で最も卑しい妄想を持ったカン違い連中）じゃあるまいし、傍から見てると馬鹿みたいなだけだぞ。

確かに人間は弱い生き物だ。例えばこの『ユリイカ』や『現代思想』をはじめとする青土社や岩波書店の難解な学術書などをちょっと沢山読み続けると（ことに思想書や哲学書）、自分がそういう本を読んでいない人たちよりも格段に賢くて人間が偉くなったような気になってきて、他人を見下しにかかるカン違い野郎が出てくるだろう。

書物にはそう言う錯覚を起こす作用の電波が取り憑いているのも事実なのだが、それにしても実に浅ましく滑稽な話である。ちょっと本を読んで賢くなったと錯覚して、他人を見下して周囲に不快感を与えるだけのつまらない人間になるくらいなら、本など読まずに「何を隠そう大宇宙の支配者は自分である」と言う妄想を抱えたまま、どこかの山奥に一生引きこもったらどうだろう？　本代がかからない分だけお得だぞ。

同じことは終末論を含む宗教&神秘学オタクたちにも言えるだろう。宗教系や神秘学系の本をある程度読み過ぎると、「自分が人より偉くなった妄想」がもれなく授かるから大変にお得（?）である。そうなってしまったら、自力で「自分が偉いはずはない。この世の背後には何もない。死後の世界も霊界も妄想だ」と認識するのは至難の技である。これは天然の電波系よりも性質の悪い妄想患者と言えるだろう。こういう連中の中から多くのハイレベルな〝戦士〟妄想が生まれるわけだ。

そう言うのも本当に、もういい加減にしてもらいたいものである。

別に人間なんて、取り立てて特別じゃなくても才能がなくても、人より同じでも何かが劣っていても、思い込み次第で充分にその中で、なろうと思えば幸せになれる動物なのだ。

お前は〝特別〟じゃなくても充分この世で生きて行ける。人を見下す必要もない。人から見下される必要もない。自分が何でもない、みんなと同じ普通の人間であることを素直に認めてそれを大声で言える勇気を持てよ。

それが人間の尊厳ってもんじゃないのか？（鬼畜の俺に言わすなよ！）
俺にとっての終末論は、何のとりえもない人間の「特別になりたい思われたい」というあさましい自意識過剰が生んだ醜い妄想でしかない。

そんなものからはもういい加減、卒業しよう。

「俺は明らかに主観的にも客観的にもちょっと精神的に狂ってる部分があって、下品でスケベで暴力的な鬼畜だけど、基本的にはあんたらと同じ、ごくごく普通の人間だ。そのことについては別に何とも思わない。だから終末がいつ来るかなんか全然気にならないし知ったこっちゃない。そうだな、仕事が片付いた週末にはのんびりと大好きなア●ナルセ●クスでもして楽しみたいもんだねえ。何？　刹那的に生きてると地獄に墜ちる？　いいよ別に、ただしそれがホントにあればの話だけどな」

P.S.1

この原稿を書き初めた12月16日の夜（その後すぐに電波の妨害に合い年明けまで中断）、物語にぴったりのＢＧＭのように、アメリカによるイラクの空爆が始まった。衛星

放送ではバクダット市内の模様を中継していたが映画のように派手な戦闘シーンなど全なく、力なく昇る対空砲火も隅田川の花火大会以下の迫力だった。

夜明け前に何となく誰かに呼ばれたような気がして家のそばのゴミ集積所へ行ったら、まるで冗談のようにパブロ・カザルスの発言を集めた『カザルスとの対話』（白水社版）が無造作に捨てられていたので思いきり苦笑した。いくらカタロニア地方の鳥が「ピース、ピース」と鳴こうが地上の戦火は尽きないだろう。合掌。

P.S.2

実はこの原稿を書き初めた昨年末から急に「実は俺はキリストの生まれ変わりである」という超ド最低のバカ電波が定期的にやってきて困っている（こんなことは78年の夏以来だ）。それがアホらしい妄想であることは冷静に考えなくても分かることなのだが、恐ろしいことに、油断をしたり気を抜いたり精神が弱っているときにこう言う電波を受信すると、「そう言えば俺はここ数年、たいした理由もなく髪の毛を長くのばしたり口髭をのばしたりしている。これで40キロぐらい痩せたら外見はキリストそっくりになるだろう。

もしかしたら本当にそうなのかもしれない！」などと言う気に一瞬なってしまうから俺

は電波と俺の中のキ●ガイが恐ろしい。今も時々、ふいに振り向くとイキナリ嘆きの壁が見えたり、十字架の上から見えるゴルゴダの丘の風景が広がったりしてとても不愉快である。ああ、教会が、エルサレムが俺を呼んでいる！　うるせえ！　黙れ！　気安く呼ぶんじゃねえええええ！　このキチ●イ電波どもがあああ！

初出／ユリイカ　１９９９年２月号　特集終末論　寄稿文　発行　青土社

全オカルト妄想電波批判

はじめに：「お前ら、いい加減にしろよ！」

最初に断わっておくが、生まれつき自分の意志とは無関係に常時幻聴&幻視体験をしている電波系体質の俺は、一般に幽霊と呼ばれる奴を見たり、神や仏や悪魔や天使を名乗る連中の声を直接アタマの中で受け取ったことは無数にあるが、これまで霊だの霊界だの前世だのを信じたことは一度もねえんだよ馬鹿野郎！

他人に見えない幻が見えたり聞こえたりする程度のことが一体ナンボのモンだってんだ！

そんなもんは所詮自ら作り上げた妄想でしかねえんだっつーの！　そんなコト他人に言われなくても分かってンだよ馬鹿野郎！

コレ読んでる読者の中にも俺と同様の体質の奴がいるだろうが、間違っても「自分は選

ばれた特別な人間だ」とか「周りの奴らよりもレベルが高い」とか勝手に思い上がってイバるんじゃねーぞ、俺ら電波系は人よりも秀れているんじゃなくて、少々感覚器がイカれてるだけの欠陥持ちでしかねえんだからな。

そもそも人間の感覚器なんか不確実でアヤフヤなんだから、ないものが見えたり聞こえたりするぐらい不思議でも何でもねえんだよ。それを逆手に取ってつまんねえエリート意識持つ馬鹿の精神構造ってどんなものか分かるかよ？　オカルト現象や神秘思想にハマる奴のパターンなんか昔からミエミエだぜ。

社会性や協調性に乏しく、現実世界と折り合いをつけるのが困難で内向的で書物の世界に閉じこもりがちで、友達も少ないくせに自己顕示欲だけは人一倍あり、やたらと「自分は特別な存在」と思いたがって、でっちあげの即席オカルト理論武装で「全て目に入るものは高次元からのメッセージ」と思い込み、何でも自分の都合の良いように解釈して、誰からも傷つけられないように幾重にも重ねた複雑な妄想で自己をていねいに包んで守り続け、ひたすら高次元からの救いの手を待ち望む……

コイてんじゃねえよ馬鹿野郎！

おめー一体何様だァ？　特権意識（妄想）を持たなけりゃ満足に生きられないなんてホントに情けない野郎だな。

普通の人間として普通に生きる「勇気」も無い奴らが「狂ったオカルト妄想」と対等に渡り合えるワケがねえだろ！

そんな奴らはせいぜい妄想に取り込まれて狂気に陥るのが目に見えてるんだから、それでもオカルトに興味があるという奴は、最低限、「これは自ら作った妄想なんだ」と分ったうえで夢を見る冷静な態度を忘れるなよ。

「現実逃避のためのオカルト好き」なんて、あまりにも情けなさすぎるからよォ！

★超古代文明

解説：太古の昔、現代の我々よりもはるかに進んだ文明がこの地球上にあったのではないかというロマンあふれる壮大な妄想。

代表的なのは今から一万二千年前に大西洋に沈んだと言われているアトランティス大陸で栄えていたアトランティス文明や、太平洋上にあったと言われるムー大陸、インド洋上に沈んだと言われるレムリア大陸などだが、他にも世界各地の遺跡で発見されるオーパーツ（その時代のものとは決して思えない高い技術を持った出土品：ピリ・レイスの古地図や水晶のドクロや古代の乾電池など）の存在に「エジプトやメソポタミアやマヤやアステカなどの古代文明は、実は我々の想像以上の叡知と技術を持っており、それは地球外からやってきた異星人からもたらされたものだった」というＵＦＯ信奉者が好きそうな妄想が複雑にからみ合い、この分野はオカルト業界ではいつも安定した一番人気を保っている（映画『レイダース』シリーズの大ヒットや、グラハム・ハンコックの『神々の指紋』がベストセラーになったことは記憶に新しい）。

ちなみに日本にも「超古代文明が栄えていた太古の昔、日本は世界の中心で、人々は天かける船で世界を行き来していた」という竹内文書をはじめとして、秀真伝、宮下文書、上記（うえつふみ）など、記述されていることが本当なら正史をゆるがしかねない異端文書が数多く存在していてマニアの心をくすぐり続けている。

中でも極めつけは「生体内原子転換」の記述まであると言われる「カタカムナノウタヒ」と言う文書だが、書かれている字（記号）を見る限り、元が〝電波〟であることは間

ルセ●クスが気になって夜も眠れない。フィニッシュの体位は！　持続時間は！　相手のま●こはちゃんと臭かったのかァ？」ってデバガメ根性まる出しで超古代文明に興味がある人畜無害なスケベ野郎ばかりではないようだが、こうした超古代文明妄想を逆手に取って「自分はアトランティス文明人の生まれ変わりで超特別な人間なんだ」と言う妄想に易々と取り憑かれて本気で威張る馬鹿もいるから気をつけろよ。

80年代に流行した「戦士妄想（主にオカルト雑誌の文通欄で流行した妄想。キーワードをいくつか上げて〝ムー大陸で私と一緒に闘った記憶のある人連絡下さい〟というタイプのものが多かった。俺も〝レムリア大陸でボクとア●ルセ●クスをした記憶のある女性の方、今世でも楽しみませんか〟という手紙を文通欄に出して没をくらったことがある。実に残念だ）」ってのも同様だぞ。

アレは確か『僕のき●玉を守って』だか『僕のフグ●を強く吸って』だか『僕のア●ルに舌を深々とさし込んで宿便を吸い出して』とか言う少女漫画が元になってンだよな（『僕の地球を守って』でしょ：編集部注）。

こう言う前世妄想については「心霊」の項目で批判するとして、ここでは超古代商法批判でもしておこう。

し、この種の妄想の根底にあるのは「昔は良かった」的な根拠のない羨望である。

村上春樹の小説ではないが、人は過去を美しい思い出にしようとするものだ。

しかし、そんな偽の思い出に浸ってばかりいてはこの世の下品化は進まない。

過去の世界の連中が耐えがたいほど醜悪だったと言う妄想があってもいいではないか。

そこで鬼畜な俺としては今後「太古の昔、大西洋上に、現代をはるかにしのぐ恥知らずで破廉恥な超古代鬼畜文明があり、人々は他人の尻穴に平気で手をつっ込み、わしづかみにした糞をその場でむさぼり喰うようなスカ●ロな連中だった。これに怒った神は彼らを滅ぼした。実はソドムとゴモラはアトランティス大陸とムー大陸だったのだ！」という超下らない妄想を捏造して流通させて人類史に糞を被せようと思うのでみんなもよろしく頼む。

そして、日本の超古代文明についてだが、皇室関係の陵墓については宮内庁が絶対に発掘許可を出さないので謎につつまれたままになって、そのことがオカルト主義者たちの妄想に拍車をかけている。

違いない。遺跡関係では「大和三山は人工の山」だとか「実は黒又山はピラミッドだった」とか「沖縄近海にムー大陸の遺跡がある」などの話題が部分的に盛り上がっているが、大ブレイクとまでは至っていない。

☆村崎のコメント

これは一番ポピュラーなオカルトだ。この程度のオカルトなら「ロマンあっていいんじゃねえか」って言う奴も多いだろう。

実際、昔のコトをあれこれ妄想するのは楽しいだろうし、確かめようがないからいくらでも好きに妄想できるんだよな。

俺も若い頃は電波で一万二千三百年前の春分の日にアトランティス大陸の某所で行われた「参加者十万人のア●ルセ●クス祭典」をノゾいては興奮してア●ルオ●ナニーに耽ったもんだぜ。

こう言う幻想はいつもふいにやってくるんだが、世の中には俺みたいに「古代人のア●

だった」と徹底的にデタラメで超下品な日本の歴史を書いている。
何百年か後の超古代文明マニアが「村崎文書」として珍重することを夢見てだ。
そう言う訳で、俺のようにフザケた奴や意味不明のサイコな奴は昔も大勢いただろうから、いま残っている遺跡や古文書や遺物をみんな真面目に受け取るのはどーかと思うぜ。
ピラミッドだって王の墓などではなく、古代エジプト人の壮大で巨大な冗談だった可能性もあるんだからな。

★超能力

解説：漫画でもおなじみのテレパシーや予知や透視やテレポーテーションや念写などの一般の人間が持っていない特殊な能力のこと。
日本では70年代にTVでユリ・ゲラーによる「スプーン曲げ」が公開されてから大ブームが起きて真偽論争やトリック暴きなどが真面目に盛り上がったが、そもそも現象から考

信じる馬鹿もいないと思うが、ある日読者諸君の玄関先に物売りがやってきて「これはアトランティス文明の叡知が込められた特別な水晶です。今ならたったの4百万円でいいです、とってもお買い得ですよォ～」と言ったら迷わず全力でブン殴って塩まいとけよ。

教祖系の馬鹿も同じだぞ。

本ぐらいならともかく、超古代で霊感商法なんかとんでもねえぜ。

「はるか昔に今より進んだ超文明があったが何かの理由で滅びてしまった」と言う妄想史観は、これを警鐘として受け止め「科学や技術がいくら進歩しようとも使い方を誤れば人類は滅びの道を進む。

だから我々は進歩しても謙虚な姿勢で世界平和や環境問題を真剣に考えよう」と言う方向に思考を持っていくならそれなりに有意義なものとなるだろう（俺はどーでもいいけどな）。

俺にしてみれば「超古代文明妄想」は昔から電波で良く見るので珍しくも何ともない

えれば、たかがスプーンを曲げることのどこが超能力なんだか全く理解不能である。

手をふれずに山の地形を変えるぐらいのパワーがあるなら超能力と呼んでもいいが、手でも曲げられるスプーンを念力で曲げる程度では「超微力」である。

この分野のオカルトはしばしば教祖系の山師の権威付けに利用されるのでとても罪深いが『バビル2世』や『スキャナーズ』や『サイコメトラーＥＩＪＩ』など、しばしば漫画や映画やＴＶドラマのモチーフに使われて娯楽になっているのも事実だ。

最近のアメリカでは遠隔視を「リモート・ヴューイング」などと呼んでビジネスにしている連中がいるらしいが、単なる妄想を商売にしてカネ儲けをはかるとはナカナカの鬼畜である。

☆村崎のコメント

そもそも「超能力」って言う言葉自体が思い上がりのカン違いを生む元凶になってるのは間違いない。

調査もできず結論が出ないので、いくらでも珍説&奇説を発表できる妄想天国状態と言うわけだ。

また、「偽書」とよばれる各異端文書は、現在のサイコさんが書く電波文書に等しく、できそこないのSF小説のようなものが多いのだが、ここからも学ぶことは多少ある。

それは「現在残されている歴史（書）はその当時の支配者に都合の良いものでしかない。

支配者に都合の悪い歴史は正史には書き留められずに抹消されただろう」と言う考え方である。

我々はここから単純に底なしの陰謀論にハマるのではなく、「自分が受けとる情報については常に批判的精神を持って向かうこと。何もかも簡単には信じない」と言う懐疑的な姿勢を忘れてはならない。

ついでに書いておくと、俺は趣味で俺の子孫に向けて「歴史を信じるな、真実はこう

この発想が「自分は他人が持っていない能力を持っている」↓「だから自分は優れた人間だ」↓「だから人の上に立ってあたりまえ」と言う醜悪で短絡的なエリート意識（妄想）に繋がるから俺は「超能力」ってコトバが大・大・大キライなんだよ。

お前らだまされるなよ！

確かに失せ物を簡単に探す能力を持ってる人間や、危険を予知したりするような人間は実際にいる。

俺も過去の膨大な幻聴幻視体験の中で何度か予知が当たったこともある。

しかし、「そう言う特殊な能力を持っている人間がいる」と言うのと「そう言う特殊な能力を持った人間を崇め奉らなくてはならない」と言うのは全くの別問題であり、我々にそんな必要も義務もないことだけは超能力がこの世に存在することの数億倍も確実な事実である。

この世は広いし人間も多いから、中には他人よりも少々感覚が鋭くて、傍目には「超能

力」に見える力を発揮する奴らもいるだろう。

そんなのは多少珍しいだけで、気に入ったら百円玉の一個ぐらい放り投げてやればいいだけの話で、すぐに土下座してそいつの信者になって全財産を寄進する必要はどこにもねえんだ、覚えとけ馬鹿野郎。

目の前で奇跡見ても簡単に感動すんじゃねえぞ。

「ある人間の持っている特殊能力と、そいつの品性や人間的価値は全く別物である」と言うことを忘れるなよ。

自分以外の他人への全面信頼&全面依存&自己判断能力放棄の果てにあるのは今現在のオウム信者どもの情けない姿だ。

自分自身の保身のために他人の迷惑も考えずに超能力を欲しがるあさましい姿……鬼畜として見ればまあ合格なんだが、麻原みたいに「一見して偽物」とわかるような山師を教祖としてあがめる美意識は完全にアウトだな。

ついでに書いておくと、日本の学校教育では全く教えないのだが、人間と言うものは何らかの象徴体系（仏教だとかカバラだとか）を学習しながらヨガの呼吸法や瞑想などの身体的訓練を平行して行えば、誰でもその象徴に添ったヴィジョン（光とか映像とか、天使や仏の姿とかの幻想）が見えてくるもので、それは超能力でも何でもなくて、人間なら誰にでも備わってる機能なんだよ。

だからちょっとばかり修行して神や仏の幻を見たぐらいで舞い上がってイバッてんじゃねーぞ馬鹿野郎！

とにかく謙虚な姿勢は大切だ。超能力への憧れや妄想は「できれば自分は選ばれた特別な人間でありたい」と言う情けないエリート意識の現われである。

これまで何度も書いてきたがもう一度くり返して言おう

「この世に特別な人間など一人もい・ね・え！」

人は特別な人間じゃなくても、思い込みや考え方次第でいくらでも幸せになれるんだ。

だから、頼むから超能力だとか霊能力だとか情けない妄想にすがらないで強く生きてくれよ。

超能力がなくたっていいじゃねえか。気に入った異性のチ●ポやま●こやア●スを克明に妄想する「妄想力」ぐらいで我慢しとけよ。

そのほうがスプーン曲げるよりもよっぽど有意義だぞ！

★UFO

解説：言わずと知れた「空飛ぶ円盤」現象のこと。

ＴＶでもいちばん派手に取り扱われている分野のオカルトで、ここには宇宙人飛来説や「米政府は密かにエイリアンと密約を結んでいる」などの国家的陰謀説や、円盤は実は宇宙ではなく地球内部から飛来してくるという地球空洞説に基づく解釈など、いくつもの妄想が渦巻いていてとても賑やかである。

この種の物件は時代が進むにつれてＵＦＯの飛行写真や目撃証言から、牧場の牛たちが殺されて血を抜かれている「キャトル・ミューティレーション」現象や、牧草地にＵＦＯの着陸跡が残る「ミステリー・サークル」現象や、ＵＦＯにさらわれた人間が円盤内部で身体に何かを埋め込まれるという「インプラント」現象など盛り沢山に増えまくって、視聴者を飽きさせることがなかった。

ＴＶの特番では矢追純一というプロデューサーの仕事が秀逸で、ＵＦＯ問題にケネディ大統領暗殺の真相をからめながら巨大な陰謀論を展開し、気がついたら番組の終わりには「我々は母なる地球を大切にしなければならない」などと結論がエコロジカルな地球環境問題にすり変わっていたこともしばしばあって実に面白かった。

最近では「サイエンス・エンターティナー」を名乗る漫画家の「あすかあきお」の仕事が（真偽はともかく）めざましく、「キャトル・ミューティレーションの正体は米政府の秘密兵器プラズナーの実験」、「しばしば目撃される宇宙人ラージノーズ・グレイの正体は昔から地球に存在した未確認の両生類で、これを宇宙人に仕立てているのは米政府の陰謀」、「本当の空飛ぶ円盤は地球内部からやって来ている」など、どこから仕入れてくるのか分からない極めて衝撃的で電波的な新事実を次々と発表してマニアの妄想心をくすぐり続けている。

☆村崎のコメント

「何かが空を飛んでいる」と言う妄想は、そう言う妄想を持っていない連中からすれば、「墜ちてこなけりゃ別にいいだろ」と思うだけだろうが、感じている人間にとってはかなり深刻な問題で、俺もときどき上空ではなく足元の地下一千メートル下を通る物体の波動（もちろん妄想）が頭に障って、無性に他人をブン殴りたくなるときがあるので、マニアが騒ぎたくなる気持ちは非常に良く分かる。

（そう言う時は周囲の猫に精神を集中して気をまぎらわせている。個人的な見解だが、猫の存在には妄想の中和作用があるような気がしてならない。もちろんそれも俺の妄想かもしれないが……）。

しかし、光る円盤型の飛行物体というのは、幻想の形態としては特に珍しいものでも何でもなく、俺も過去に何度も目撃しているが、その度に「やれやれ、またタチの悪い妄想が見えてるぜ」と思うことはあっても、「これは米政府の陰謀に違いない」と感じたことは一度もないねえ。

空飛ぶ円盤を見て地球以外の宇宙人を妄想することは夢があって良いのかもしれないが何でも馬鹿の一つ覚えで米政府の陰謀だと考えるのはもういい加減に止めとけよ。

だいたい今の米政府はわざわざ「陰謀」なんて言うタルいことなんかやらなくても、イラクやユーゴの空爆を見りゃあ分かる通り、公然と邪悪で残虐な計画を実行するミエミエの「陽謀」をやってンだから、とんでもねえ鬼畜政府だぜ。

俺は日本国民の一人として前の戦争であいつらに負けたことを今でもちゃんと怨んでるし、奴らが終戦間際のドサクサに実験感覚で原爆を2発も落としやがったことだけは絶対に許せねえ。

だからUFO問題で「米政府の陰謀論」を叫ぶ連中は、その先の「世界平和のために米政府打倒！　次の戦争での米国完全殲滅！」まで叫ばなけりゃ嘘だぞ！　UFOの謎を完全解明するためにはみんなで一致団結して憎っくき米政府を打倒して、国家機密のファイルを全部公開しなけりゃならねえんだ。そこまでやるかァ？

最近のUFO現象については、陰謀説以外にも「実はUFOは未来人の乗ったタイムマ

シンであり、彼らが降りて来て我々と直接会わないのは過去への干渉を避けているからである」と言う、もっともらしい珍説もあるが、話がそこまで行くとムキになって否定する気にもならねえからもう勝手にやってくれって感じだ。

ハッキリ言えば、俺はＵＦＯについてはサッチー報道と同様に完全に飽きてんのよ。

いつまで経っても目撃情報ばかりで進展がないし、ＵＦＯをとらえた映像ったって、鼻クソみたいにショボい光点がチカチカ移動してるだけじゃ地味すぎてつまんねえんだよ。

あれならＳＦ映画の方がずっとリアルで迫力あるよな〜。

だから俺の興味は、この先、宇宙人の●穴写真（超アップ）が『ムー』に載るのが早いか『お尻倶楽部』に載るのが早いかとか、せいぜいそれぐらいのモンだ（個人的には『ＧＯＮ！』に「これが宇宙人の●穴だ！　彼らのア●スは何とアンドロメダ大星雲のように宇宙的なウズを巻いていた！」なんてスクープ記事を発表して欲しい所だが……）。

まあ、どっちにしても、円盤状の幻を見たぐらいでギャアギャア騒ぐなよ。

騒ぐ前に、自分の目に見えてるモノが妄想や幻影でないかどうかを謙虚な気持ちで疑ってみた方がいいぞ。

お前が完全に正気である根拠だって、実はどこにも無いんだからな。

★心霊

解説：幽霊やポルターガイストや心霊写真など、「霊」の存在を扱った分野のオカルト現象。

19世紀の英国では「人間は死後も霊として生きる」と言う心霊主義が流行して、霊の存在を証明するために降霊会が盛んに行われたが、そのほとんどはイカサマであり現在横行する悪質な霊感商法の基礎となった。

この分野の妄想は数あるオカルト現象の中でも予知や予言と同様に最も悪用され易い妄想で注意する必要がある。

関連物件としてコックリさんやウィジャボード、生まれ変わりの謎や心霊手術、タタリ

や呪いなどがあり、降霊会も最近は現代風にアレンジされて、宇宙存在と交信する「チャネリング」と言うのが流行っているが、これはどう考えても〝電波〟以外の何物でもなく、百害あって一利無しなので近寄らない方が身のためである。

他にも死にかけた人間たちが共通して見る妄想ヴィジョンについて研究する「隣死体験」も立花隆の著書などでポピュラーになった。

☆村崎のコメント

俺が一番嫌いなオカルト野郎は「自分は霊格が高い」とか言って威張りくさって人を騙して高いカネをむしり取る自称「教祖」や「霊能者」（俺と同様の電波系のキチ●イども）なんだが、間違ってもそう言うクソ野郎どもを尊敬したり崇めたりカネ出したりするんじゃねえぞ。

別にキ●ガイじゃなくても威張る奴にロクな奴はいないし、どんな分野でもホンモノの人物は自信を持っているせいか、虚勢を張らずに淡々として下品に威張ったりしないからな。

こと心霊に関しては全てがイカサマだと思っていて間違いないが、とりわけ「霊格」が高いとか低いとか言ってヒエラルキーを作りたがる奴は超がつくぐらい最悪のゲス野郎だから、そう言う奴に会って言いくるめられそうになったら、とりあえず近くにある椅子を振り上げて全力でブン殴っとけよ。

どうせ「霊格」が高い奴は強い守護霊に守られてンだから滅多なことで怪我なんかしねえよ。

ブン殴って怪我するような情けない霊能者なんか頼るなよ。

と言うか、そもそも霊能者なんて言うイカサマ野郎に依存しなけりゃ生きられないようでは人生終わってるから、さっさと死ねと言いたいね。

そのさい霊能者を道連れに死んでくれたら少しは世の中がキレイになって万々歳だから自殺志願者は誰か一人、霊能者を道連れに死んで欲しいものだねえ。

中には善良で金を取らない霊能者もいるだろうが、霊だの霊界だのという妄想を安易に

容認する姿勢は気にくわないぜ。

俺の感覚では人は死んだらそれでおしまい。

あとには何も残らない永遠の虚無があるだけだ。

霊だの霊界だの地獄だのという妄想は、そう言う事実に対してまともに向き合うことができない人間の脆弱な心が作り出した「偽物の恐怖」にほかならない。

宇宙の広大さと人間存在の矮小さを思えば思うほど、霊だの霊界だのと言うのが人間中心主義に基づく思い上がりの妄想に感じられるのだ。

だいたい何で人間ばかりがそんなに特別な存在なんだよ?

どこにそういう根拠があるんだ?　高級霊が降りてきて私に言ったァ?　そんなもんタダの〝電波〟に決まってンじゃねえか!

俺のアタマの中にはしょっ中来るし珍しくも何ともねえよ。

自称「高級霊」が降りてきたぐらいで舞い上がってんなよ馬鹿野郎！　そんな声が聞こえること自体、お前が正気じゃねえ証拠なんだよ！

他人を自分の妄想に巻き込んでカネ取ったりしてると、それこそ死んでから地獄に墜ちるぞ～！

そう言う訳で、読者諸君は今後、自分は霊能者だと言う奴に会ったらキチガイだと思って哀れんでやれ。

人に見えない幻が見えるぐらいで自分が偉いと思い込んでる阿呆は徹底的に相手にするな。

本気になって話を聞くと馬鹿が移るぞ。

チャネリングも同様にタチの悪い〝電波〟なのでまともに相手にするなよ。

これは一部の「占い」も同様だが、自分以外のものへの依存心を育てるだけのセラピー

は治療ではなく発狂の促進にしかならないから前向きに生きたければ絶対に関わるな。

だいたい「地球よりも文明が数百年も進んだ星に住む肉体を持たない霊的な存在」とか言うのがフザけてるよな〜。

そもそも「人間よりもレベルが何倍も高い至高の存在が言うことだから間違いないない」なんていう発想自体が「自己判断停止→思考停止→他者への全面依存→何でも教祖の言いなりになる馬鹿な奴隷」という人生最悪のコースを約束してるから素晴らしいぜ。

もっとも、それを「楽」だと感じるのも自由だし、常に誰かの犬でしか生きられない哀れな奴もいるから一概に否定もできないんだが、俺はそんな生き方は絶対に嫌だから電波の言うことなんか信じねえよ。

たとえそれが「妄想」であっても「自由意志」だけにはこだわりたいからな。

最後につけ加えると、霊界や地獄があると言う妄想が「悪いことをすると死んでから地獄に墜ちる」と言う妄想を人々に普及させて、非科学的ながら、結果的に共同体内部の倫理観の確立や秩序の維持に役立ってきたこともまた事実である。

霊も地獄も信じない奴ほど「死ねばそれでおしまいで地獄に行くこともないから、生きているうちに好き放題をやった方がとってもお得」と考えて殺しや放火などのえげつない鬼畜な悪事を平気でやるから困ったものだ。

まあ、それも鬼畜の俺にはどうでもいい話なんだが……。

★占術

占いには占星術やタロットや風水や血液型占いや気学や天中殺や大殺界や水晶占いなど様々な占いがあって、最近は「動物占い」が大ブレイクしているようである。

これらの占いが非科学的なことは言うまでもないが、人間と言うのは気の持ち方次第で積極的にも消極的にもなれる生き物なので、積極的に占いを信じる人間には、ある種の占いが有効に機能することもある。

☆村崎のコメント

おまじない程度の他愛のない遊び感覚でやるぐらいなら何の問題もないのだが、特定の占い師に入れ込み過ぎて「この占い師に見てもらならければ私は何も決められない」状態になるのは感心しない。

人は一人では生きていけないものだが、それでも他者への依存心は最低限度に留めておくべきだ、と一応は真面目に言っておこう。

何を隠そうこの俺は実を言うと日本で唯一の「女の尻●占い」の専門家である！

俺に●穴を見て貰いたい女は念入りに風呂に入ってから本誌編集部に連絡をくれ……と書けば女性読者諸君は「何をたわけたことを！」と思うだろう。

どの占いにもそういう批判的な態度で臨むことが大切なのである。

占いについては心のどこかで「占いは科学ではない」と徹底的に馬鹿にしながら「でもまあ、聞くだけは聞いてやろう」的な冷静な態度が必要だ。

占い師に良いことを言われたら信じれば良いし、悪いことを言われたら謙虚に注意して過ごせばいい。

当たる占いというのは「この人の占いは当たる」と言う相談者の先入観や思い入れが相乗効果をあげて、相談者自らが占い通りの運命を送ろうと努力するから当たるのである。

それで幸せになれるなら安いものだが、占いの結果を信じても占い師本人を全面的に信じて崇める必要は全くないので、そこだけはくれぐれもカン違いしないように。

しょせん占いなどは「当たるも八卦、当たらぬも八景島シーパラダイス」と言われている通り水物であり、そんな金があったら彼女と水族館にでも行ってデートした後で一発まこでもキメた方がいいことだけは確かなようである。

カネは有意義に使えよ！

●予言&預言

解説：見事にハズれたノストラダムスの人類滅亡予言（と言ってもそもそも人類滅亡の予言ではなかったと言う説が有力）や、カトリックの歴代法皇を占った聖マラキの予言、アトランティスの王が書いたとされるエメラルドタブレットの予言や、死海文書の予言や、間近に迫った神の大天罰について語られているというファティマ第3の予言など、有名な予言は幾つもあるが、その内容はほとんど破壊的で無責任に人類滅亡や終末を予言している脅迫に近いものである。

しかし、どんなモノにも始まりと終わりはあるのだから終末がやってくると聞いても特に驚く必要はない。

別に世界が滅びなくとも、誰にでも死の瞬間は確実にやって来るし、その時がその人間にとっての「この世の終わり」になるのだから。

☆村崎のコメント

『ノストラダムスの大予言』シリーズでいいように儲けまくった腐れ鬼畜の五島勉は今も

のうのうと元気に生きてんのかねえ?

7の月を前に朝日新聞で謝罪めいたコメント出してたけどもう遅いんだよ馬鹿野郎。

この俺ですら、奴に道で出会ったら奥歯が全部折れるまで容赦なく全力でブン殴ろうと本気で考えているんだから（正義感からではなく全くの趣味で）、全国的にはどれだけの人間から怨まれてるか分かったもんじゃねえぜ。

命が惜しいなら死ぬまで不用意に人前に出ない方が賢明だな。五島は一連のオウム事件の直後に「大予言シリーズで人々の終末意識や不安感をアオり、結果的にオウムの勢力拡大とテロに加担した共犯も同然の大悪人」とマスコミに戦犯扱いされるとすぐにケツまくって逃げの体制に入って死んだフリをこいて、一九九九年が近づくと途端に「人類滅亡はない」とか言い出すような殺す価値もないカス野郎だが、こういうカス山師にいいようにオチョクられて本買って不安がってたバカどももちゃんと反省しとけよ。

俺は子供の頃に田舎で『ノストラダムスの大予言』の話を聞いたときから「俺のアタマにやってくる電波が言うことと大差ないとんでもねえイカサマだ」と思ってずーっとムカついてたよ。もちろん全く信じちゃいなかった。

なぜなら、この世界では、みんなが期待することは良いことも悪いこともみな、そう簡単にはやって来ないし実現しないのが常だからだ。

おそらく、この世界は滅びそうでいてそう簡単には滅びることはなく、まるで金魚のフンのようにダラダラと長く続くことだろう。

そして多分、人類滅亡の大予言を信じたい連中の大半は、歴史の中の「特別な瞬間」に居合わせて特別な体験をしてみたいという、好奇心の強い奴らなんだろう。

「自分が生きているうちにこの世の終わりが見たい。自分が死んだ後もずっとこの世界が続くなんて信じたくない。できれば自分の死とともに終わって欲しい」ってなことを考える寂しがりやな気持ちも分からないでもないが、何も世界はあんたのためにあるんじゃないんだから、そこんとこは我慢しとけよ馬鹿野郎。

何度も言うようだが、人は「特別」じゃなくても「普通」で充分幸福になれるんだからよォ。

●未確認生物

ネス湖のネッシーや屈斜路湖のクッシーや、ヒマラヤの雪男やＵＦＯが目撃された現場近くで目撃されるというモスマンや、日本の中国地方で目撃されたヒバゴンや、沖縄のギジムナーや、俺のチ●ポに形が良く似ているというツチノコや、背中に翼の生えた猫（なぜか写真が残っている。トリックかもしれないが）など多数。

この他にも成層圏の上の方には透明のクラゲみたいな軟体動物がプカプカ浮いているというヨタ話もあるが、それが何体いるかは透明なので誰も確認できないとか。

☆村崎のコメント

動物は猫のひと以外あまり興味がないからどーでもいい。

だからネッシーとクッシーが実は腹違いの兄弟で、お母さんは野村のサッチーで、お父さんが中央アフリカのコンゴに住むモケーレ・ムベンベであると主張する奴がいても俺は

ムキになって文句を言うつもりは全くないぜ。

それでもおそらくネッシーあたりはスコットランドの観光政策の一環なんだろうな。

そう言えば俺は昔の日本のプログレバンドの四人囃子の「泳ぐなネッシー」って曲が好きで好きで…って話はどーでもいいのでヤメ。

世界は広いし未確認の動物が何種類いても何ら不思議なことではないだろう。

問題はその動物の尻の穴がどんな状態で人間とア●ルセ●クスがヤレるのかヤレないのかと言うただ一点である。

俺の妄想電波の調査によれば、ネッシーのヌードをオカズに夜毎抜いてる大バカ者が北海道古平群古平町に約一名いるらしいが、北海道民なら義理でも3日に一度は地元屈斜路湖の妄想獣クッシーで抜けと言いたい。

それだけだ！

☆村崎百郎「非公認」ＷＥＢより☆

初出不明／１９９０年代後半～２０００年頃

霊界殲滅計画

クソをしながら読んでくれ！
「霊界殲滅計画」霊的カツアゲはもう古い。霊能者を吊るせ！　今すぐニダ！

全国家のブラザーさん＆シスター無能諸君！　俺が天下のゲス野郎、村崎百郎だ。ある種の電波が言うには、俺はこの世の腐敗を加速させる為に、オリオン座方面のなんとかいう（発音不能）星からはるばる数十万光年を経て転生してきた、腐りに腐った魂なんだそうだが、オリオン座うんぬんはともかく、浅草ロック座の興行には目のない性根のすわったスケベである事は間違いない。

このたび本誌編集部様の御好意でページを頂いたので、これから毎月この世を腐らせる為の、良識持ちには不愉快極まりない下品で最低のクソ情報をどんどんたれ流すつもりなのでよろしく。読者諸君、できれば俺の連載は、便器にまたがって糞をしながら、自分の糞の匂いを楽しみながら読んでくれよ。いい情報はいいニオイのもとで読むのが一番だぜ

ええええええい！

　さあて、さしあたり初回は霊界潰しでも提唱しようかね。霊だのタタリだのっていう発想があるから、いつまで経ってもこの世の腐敗が進まねえっていう話だ。確かに俺は、頼みもしないのに電波が頭に届くキ●ガイだが、あの世とか霊界とかは認めちゃいねえんだ。仮にあっても認めない。科学的にどうとか言う問題じゃなくて、俺が無いって言っているから、俺の世界じゃそんなもんは存在しねえんだよ。

　ここで、「霊の世界の存在を人々が信じていた方が、除霊だの霊感商法だの言う、どす黒い悪事のネタに利用できるんじゃないですか？」と言う、一見前向きな意見もあるだろう、しかしそれは大きな間違いだ。全く逆である。それを説明する前に、少し冷静に霊の問題を考えてみよう。だいたい、守護霊だの背後霊だのがいたとして、みんなの背中に常時はり付いているさまを想像してみるがいい。たとえ先祖の連中とはいえ、オ●ニーやセ●クス、更に排便中も後ろからじっと見守ってるなんて冗談じゃねえぞ！

　過保護なんてもんじゃねえ、たかが先祖のぶんざいで子孫のセ●クスを覗くなんて、タ

チも趣味も悪い只の変態じゃねえか。ファック・オフだね。コレ読んでる多少霊感の強い諸君、今度セッ●ス中に、突然後ろを振り返って見ろよ。背後の空間に、ヨダレを垂らしてあんたらのステキなまぐ●いを凝視している守護霊がいたら、思いっきり「変態！　金払えこの馬鹿！」と叫んでやりな。

たとえば、強●事件があったとしよう。●姦のまっ最中、被害者の守護霊って何やってるんだ？　その霊が男なら、やっぱり興奮して強●の現場を見ながらせん●りでもコイてるんじゃねえのか。いやいや、今、俺にきた電波によれば、誰かが誰かに強●されている最中は、犯人の守護霊も被害者の守護霊を強●しているそうだ。う～ん、理にかなったウケ狙いのあざとい説明だねェ。コレだから電波なんて信用できねえんだよ。で、霊も●されると気持ちイイのかよ？　霊もイクのかァ？　この、バ～～～～カ！

まあ、こんなふうに役に立たない変態守護霊が何匹いようがどーだっていい事だ。要は、霊や霊界の存在を否定する事で、人々から倫理観や良心の呵責をなくするのが俺の目的なんだ。俺は以前、ヤーさまからこう言う話をうかがった事がある。人を殺して、逃げて自首するような連中は、たいがいその枕元に被害者の霊が立つんだそうな。

それで良心の呵責にたえ切れず自首してしまうという。「殺した奴に枕元に立たれたぐらいで自首するようじゃぁ、ヤクザなんてやってられねえよ」と、そのヤーさまは言っておられたが、全く同感だ。なまじ、「あの世には地獄があって、悪い事をして死んだら地獄に堕ちる」「人を殺したらタタリがある」などという、しょーもねえ考え方がはびこっているから、人々の犯罪を犯そうという気持ちにブレーキがかかるんだ。

だから、俺はTVで大槻教授たちが霊やオカルトを否定するたびに「いいぞ！　大槻ィ、言ったれェ、上岡ァ！」って声援をおくってるよ。教授が科学的に地獄なんてない事を証明してくれれば、宗教もなくなり、霊感商法もなくなるが、そのかわり、人間は罪の意識や、死後に地獄に堕ちる心配をせずに、堂々とワイルドな犯罪に手を染められるんだから、俺の思うツボだよ。

そうなれば、この世は今以上に凶悪で悪質な詐欺や殺人が横行するだろう。悪い事をしようが、良い事をしようが、死ねばそれで終わりなだけなら、生きている間に好き放題やった方が得じゃん！　そんな進歩的で魅力的な考え方を世の中に広める為にも、俺は大槻教授やサイコップを絶対支持だ！　このさい、霊だの霊界だのは邪魔だからさっさと死んで貰おう。

本当に地獄があったらどうなるかって？　知らねえよそんなもん、俺は自分で大量殺人鬼になる気なんかないし、どっかのバカが起こした犯罪をＴＶの前でセンベイかじりながら屁ェこいて笑いながら見ィ〜てェ〜るゥ〜だァけェ〜の、ただのゲス野郎だからな。

何？　人でなし？　人間の屑？　誉められると照れちゃうな、そう、俺は鬼畜なんだよ。

★今月のまとめ「霊も霊界も地獄も単なる妄想、人は死んだらそれまで。何人殺そうが地獄に行く事もない」「とにかく死ねばそれまでなんだから、生きているうちに好き放題やった方が得」

来月は、更に精神が腐敗する深い地獄を見せてやるぞ、けつの穴を広げて期待しろ！

……とか書いたらこの雑誌はこの号で廃刊。　守護霊様の祟りですかねえ（笑）。

俺が一番「悪い奴」だ！

（鬼畜にとっての「悪い奴」とは？　より改題）電波系鬼畜工員　村崎百郎

俺は他人の不幸を何とも思わないどころか、常に自分以外の人間全ての不幸と絶望を願ってやまない卑怯卑劣な人でなし鬼畜だ。

ゆえに、俺にとっての〝悪い奴〟といえば、通常の意味とは全く正反対に「正義の側にいる連中」全てのことをさす。

具体的にあげるだけでもムカつくが、正義を愛する連中、正義の味方、善良な市民、人道主義者、まともな宗教家（今どきいるのかよそんな奴！）、エコロジスト、市民ボランティア、何かというと人権人権人権人権人権人権と声を大にしてワメく人権擁護派の弁護士だとか文化人……そういう連中は全て鬼畜な俺にとっては〝もの凄く悪い奴〟なのである。

はっきりいってしまえば、こういう連中は〝正義〟という名の最悪の妄想にアタマをヤラレている救いようのないキ●ガイどもなので、今すぐみんな死んでくれたらどれだけ世の中がスッキリするかわからない。

しかし「現世では悪がはびこる」というグノーシスな思想の通りに、世の中はそう簡単に良くはならない。

……などというゴタクは言い出すとキリがないし、いってる本人も退屈になるので、このへんで止めて本論に入ろう。

だいたい、簡単にコトバで〝悪い奴〟などというが、善と悪の区別ほどあやふやなものはない。

それは立場が変われば簡単に逆転するものであり、物の〝価値〟と同じで、ある種の価値観を共有する人間同士の関係性の中にしか存在しないものだ。

たとえば、この地球上には国ごと全てが狂っているアメリカという蛮国がある。

この国は、植民地のアガリで喰っていた大英帝国で食い詰めたプロテスタントのカスどもが船に乗ってやってきて、罪のないネイティヴ・アメリカンやバッファローを虐●しまくって作った、とてつもなく因業な国である。

そういう建国史がうしろめたいせいか、この国は誰も頼まないのにやたらと〝正義〟に固執して、「世界の警察」気取りで世界中の紛争に首を突っ込みたがるのだ。

中国の民主化についてあれこれ文句をたれているようだが、中国にしても「人種問題や麻薬問題や凶悪犯罪を山ほどかかえた蛮国」に偉そうに人権がどうのといわれたくはないだろう。

所詮、〝正義〟などというものは、自らの行為を正当化させる都合の良い大義名分で、こういう国の姿勢からは「人は〝正義〟にこだわればこだわるほど〝正義〟から遠ざかるものだ」ということぐらいしか学べない。

これが〝悪〟でなければ一体何が〝悪〟なのだろう？

そもそも〝正義〟だの〝善悪〟だのというものは人間が都合のいいように自らの行動を区分しただけのことで、それにたいした根拠などあろうはずがないのだ。

俺はこの世で最低最悪の鬼畜だという意識がある。

〝悪い奴〟とは俺のことだろう。で、俺のどのへんが一番鬼畜かというと、それは俺自身が「自らの行為や行動にいかなる正当性をも求めない」ところだと思う。

これは「俺は徹底的に自分の快楽の為にしか行動しない。善や悪は行動原理の範疇外である」ということだ。

俺はこれまでの下品で最低な人生の中で、多くの不良やヤクザや人間のクズどもに関わってきたが、連中を観察して気がついたのは「どんなにワルといわれる人間でも人をブ

ン殴るにはそれなりの理由を必要として、ガンたれたとか肩が触れたとか、何らかの理由がないとブン殴りにかからない」ということだった。

これは鬼畜の俺には理解不能の現象だった。

たかが人間をブン殴るのにどうして理由がいるのだろう？

俺は、10歳の頃に海で溺れて死にかけたときにした〝神秘体験〟のおしまいの部分で自分の中にとてつもなく邪悪な存在（この世に存在する悪の総体？）が身体に入ってきてからは、どんな陰惨な暴力行為も、卑怯で卑劣な行為も手段を選ばずに平気でできるようになった。

多人数で袋叩きに合っても、バットを持って夕食時に一軒一軒お礼参りに出かけて行って、家族の前で食卓をひっくり返して暴れた。

卑怯な闇討ちや相手の兄弟家族を襲うなどの卑劣行為を、何度も繰り返したおかげで、当時は村じゅうから「キ●ガイ」と呼ばれて疎まれ怖れられたものである。

加えて体質が電波系（常にイロんな奴らの声が聞こえる霊感みたいなもんだ）なので人をブン殴った瞬間にそいつの歩んできたこれまでの人生のヴィジョンが走馬灯のように見えるときがあった（サイコメトリーってやつだ）。

自分が殴った相手の赤ん坊の頃、親や周囲のみんなに祝福されて可愛がられている姿、お袋のおっぱいを飲んでいる姿、よちよち歩きの頃、ランドセルを買ってもらってはしゃいでいる姿、親に叱られて泣いている姿、日が暮れるまで友だちと遊んでいる楽しそうな姿……そうしたヴィジョンをたくさん見てしまうと、自分もそいつを見守ってきた家族の一員になったような親近感を覚えてしまうものだ。

ああ、こいつはみんなに愛されてきた結構いいヤツなんだなあ、子供の頃はあんなに可愛かったし、お父さんもお母さんもいいヒトたちじゃないか……などと感情移入してしまうのだが、そういう暖かい感情を全部ブッ壊して、一瞬限りない愛情を抱いた相手を情け容赦なくブン殴るのである。

これがまた、なかなか破壊的で背徳的な快感なのだ。相手をいいヤツなんだなと認めて好きになりながらブン殴る。疑似的に罪悪感を昂揚させながら暴力を振るうのだ。

嫌いな人間をブン殴るなど誰でもできる簡単な行為だが、好きな相手を思いきりブン殴るのは至難の業だ。

俺は好きになった相手を加減をせずに、たいした理由もなく無慈悲に思いきりブン殴る。

こういう理不尽な暴力こそが鬼畜的快感を呼ぶのである。

敵対する不良連中以外の普通の友人に対しても、日常の何げない会話中に発作的に殴りかかって相手の歯が折れるまでブン殴ったことも何度かある。

当然、その都度相手からは「このキ●ガイ!」と罵られて絶交された。そんなとき俺は「ああ、これでいい、俺は鬼畜だからこれでいいんだ! 親しい友人を理由もなく突然殴るなんて、俺は何てヒドい鬼畜なんだろう」と鬼畜としての自分に酔うのである。

こんな複雑な快感はマトモな善人どもには逆立ちしても理解できないだろう。

暴力の快感は、どんなにいっても言いつくせないくらい甘美なものだ。

アタマの中のスジを切って他人に殴りかかる瞬間、俺の眼の前はまっ白く光輝いてえもいわれぬ快感が全身をつきぬける。

「おお、暴力こそわが生の証し、この瞬間こそが至福のとき」と自分の暴力行為に心底陶酔できるのだ。

俺にとって俺が行う全ての暴力は快楽以外の何物でもなく、それも「全く理不尽で明確な理由もなく、卑怯卑劣に、弱者に対して一方的に行われる陰惨な暴力」ほど、もたらされる快楽は大きいのだ。

そういう嗜好を持った俺がこれまで頻繁に暴力事件を起こしてきたのはごく自然なこと

である。

ここにはとても書けない犯罪行為も数多く繰り返してきたが、悪運が強いせいか電波のお導きかわからないが、大きな刑事事件として発覚したことは一度もない。

「罪と罰」という言葉があるが、俺の場合は「罪と罪」と言い切ってもいいぐらい「罰」のないさわやか人生なのである。

読者諸君には、悪事に限らず何でも計画的にコソコソやりゃあ、そう簡単には発覚しないということを覚えておいて欲しい。

そういう犯罪自慢ばかりしても仕方がないので、一般的な〝悪い奴〟についても語ろう。

おそらく一般的な意味での〝悪い奴〟とは、共同体の秩序を乱す反社会的な犯罪を犯す連中のことをさすのだろう。

しかし、単純な刑事事件を起こして捕まる馬鹿は〝悪い奴〟というよりも〝馬鹿な奴〟である。俺には、そういう〝馬鹿な奴〟の犯罪報道をテレビの前で娯楽として笑いながら見ている連中こそ〝悪い奴〟のような気がする。

たとえば最近の例でいえば、帝京大学のラグビー部の連中が起こした未成年への婦女暴行（輪●）事件を思い出してほしい。

概してこういう〝男らしい事件〟はフェミニストや人権主義者から徹底的に糾弾される傾向にあるが、そういうニュースを見ているヒマな視聴者の中には、俺のように事件をネタによからぬ妄想にふけり、事件をオカズにして何回も抜くような不謹慎な鬼畜野郎もいるのである。

これはインターネット上のアイコラ以上に取り絞まりようがないのでタチが悪い。

参考までに、人の心の奥でどういう邪悪な妄想がなされているのかを、今度の輪●事件報道を目にした全国の男らしい視聴者の典型的な反応を俺のアタマの中にやってきた電波をいくつか紹介しよう。

「それにしても被害者のオ●ンコはどんな色・形・ニオイをしていたのだろう／モリ●ン度は？／処女だったのだろうか……いやそんなはずはない！／どういう感じで押さえ込まれてマワされたのか想像するだけでカウ●ーが出てきますね／やっぱり（輪●も）友情とチームワークの勝利だね／最初の一人はおトクだけど仲間の出した精●で一杯の●穴にブチ込むのはちょっと……／で、女の方はイッたのか？／何回イッたんだよ？　しまいにゃ腰まで使ったンじゃねえのか？／仲間意識のタカマリと股●のタカマリは性比例するのか／こいつら運が悪かっただけだよな、どこの運動部の連中もみんなやってることだろう／ようし！　こうなったら俺も来年は帝京大学を受験するぞ！／被害者の人権を考えると怒りで胸とアタマが痛くなるけど事件の状況を考えると何故か股●がゾクゾクしてくるのは私が罪深いせいでしょうか？／体位は？　一人平均の持続時間は？／ちなみにア●ルを犯ったのは何人？／何が悪いって、やったあとでカネ払わなかったのが悪かったんじゃないの？　一人一万ぐらい出してりゃ事件になんなかったんじゃないの／ああ、輪●のできる仲間のいるこいつらがうらやましいねえ、俺には信頼して組める仲間が一人もいないから、強●はできても輪●はできねえ／中には二回●した奴もいるだろうね／エロ漫画みたいに●とア●スと口の三か所に同時にチ●ポをぶち込まれたりもしたんですかね／ビデオは撮らなかったのかねえ／体験告白手記が読みたい／言うことを聞かないと帝京大学の校門の前に置きざりにするぞ／可愛そうに……俺のチ●ポで慰めたい！／捕まったこいつら

が出所後にもう一度スクラムを組んで、被害者宅に押しかけてもう一度親の見ている前でその娘を輪●したら、はっきりいって俺はこいつらを認めるね、ホンモノだよ／で、被害者の尻●は処女だったんでしょうか／あああああア●ルセ●クスがやりてえええええ！」

……こういう妄想が列島をくまなくかけめぐっている。

こんなことを妄想する連中こそ〝悪い奴〟であり、糾弾されるべきだが、残念ながら人が心に思うことを取り締まれる法律も手段もこの世には存在しない。

おそらく今後は、この事件を題材にしたエロ小説が書かれたり、エロビデオが撮られたりするだろう。

人の不幸を己の幸福としか感じられない人間のクズ――そうした連中こそが鬼畜であり〝悪い奴〟なのだ。

☆村崎百郎「非公認」ＷＥＢより☆

ゴミストーカーが教える変態撃退マニュアル

村崎百郎

イタ電話野郎、ストーカー、チカン、強●魔……女の子にとって迷惑きわまりない変態どもにはどう対処すればいいのか? 激増する猟奇変態犯罪を電波系鬼畜ライターの村崎百郎に聞いてみた!

ティーンズロードの読者諸君、はじめまして。俺がゴミストーカーにして日本最低級の変態野郎、村崎百郎だ。変態のことならオールマイティーの超ド変態の俺にまかせてもらおう。さて、まず、忘れてはならないのは「基本的に、全ての男はケダモノ」ってこと。これはストーカーやチカンや強●魔は何も特別な人種ではないということだ。

どんな善良そうなスカシ野郎でもそいつが男である限り性犯罪者になる可能性は絶対にある。くれぐれも変態性犯罪者が特別な存在だなんて思わないことだ。とりわけ「野獣期」と呼ばれる14歳~20代前半の男にマトモな恋愛など到底無理、この時期の男の大部分はいくら抜いてもチ●コに精●があふれかえり「ヤレるためなら何でもやる」という極め

○イタズラ電話野郎

対策：無視が一番だが、いちいち受話器を外して置くのもシャクにさわる。イタ電魔というのは自分のち●こをしごきながら電話を掛けて女の声に反応して快感を得るという種類の変態で、「いいかげんにしなさい」「うるせえバカヤロー」などという罵倒の言葉も相手の思うツボなので注意。

どうせなら妄想中のイタ電魔が最も不快な気持ちになり、せ●ずりが不発に終わってしまうような言葉を電話口で大声で言ってやろう。（例）「小森のおばちゃまのヘアヌード！」「きんさん、ぎんさんの古オマ●コ！」など。妄想力の強い奴ほど即座に反応して頭の中で映像化して、いたたまれない気持ちになるだろう。

○ストーカー

初出不明／１９９０年代後半〜２０００年頃

が、毎日それをやると社会的な信用も失われそうなので難しいところである。

痴漢が狙うのは触っても声を出さそうにない気の弱そうな女の子なので「おとなしそうな顔をしない」というのは必要だろう。声が出せないなら、あらかじめ市販のボイスレコーダーに大声で「私はいま痴漢に襲われています。気が弱いので声が出せません、助けて下さい！」という声を吹き込んでおいて、痴漢に合ったら即座に再生するというのも一つの手である。

いずれにしても、痴漢を容認することは痴漢を増長させて更に多くの被害者を生むことになるので「たかが痴漢」などと許したりしないこと。

○レ●プ

対策：最近はワゴン車で後から近づいてきて数人で一気に女の子に襲いかかり車の中に引き込んでさらわれてマワされるという「白昼堂々の拉致監禁レ●プ」がトレンディらしいので道を歩くときは後方の車に注意しよう。また、マンションなどで一人暮らしをしている女の子は、帰宅時に自分の部屋の鍵を開けて部屋の中に入るまでのあいだに周囲に注

て危うい精神状態にあるのだ。
この俺にしても、野獣期には年間の射●回数が軽く一千回を越えていたし、女をハメ倒す為ならどんな嘘も犯罪も平気でやっていた。好きでもない女に真剣に「愛しているよ」なんていってハメるのは常識で、女を人間扱いなどせず、「お前らは黙ってヤラせてヨガってりゃいいんだ！　このクソ馬鹿マ●コがあ！」としか思っていなかった。

実にあきれたことだが、読者の女性諸君は、自分が常にこういう鬼畜連中がうろついている世界に住んでいるんだということを忘れないでいてほしい。「この世はそんなに平和な場所ではない」「男はみんな変態猟奇性犯罪者予備軍」という認識のもとに危機意識を持って生きることが大切だ。

実際問題として、あんたらの恋人だって、よそで何をやってるかわかったもんじゃないだろう。くれぐれも「私の彼氏だけは違う！」なんて男を信用したりしないことだ。あんたの彼氏も根は俺と同じ超ド級の変態野郎さ。

次に最近の変態の具体的な鬼畜的対処方法をあげておこう。

話番号ばかりではなく、店の包装紙や時刻入りのレシートから、捨てた人間の行動範囲が推測できて、ストーカーにストーキングされやすくなるからな。ゴミはなるべく自分の名前のついた封筒や請求書などを全部外して、地域のルールを守り、回収日の朝に正しく出すこと。それが最良のゴミストーカー対策だ。

初出不明／１９９０年代後半～２０００年頃

対策：逃げるのが一番とされているが、それもシャクにさわる。相手があきれるほどひどい行動（ストーカーの前で立ち小便をする、野糞をする。極端に品性下劣な言動をくり返す、など）をして愛想をつかされるようにするとか、逃げるにしても手なずけて貢がせまくってからにするとか、いろいろと工夫は必要だ。

「恨んだ相手を十年以上つけ狙って復讐を続ける」という趣味を持っている俺がいうから間違いないが、偏執狂のしつこさを甘く見てはいけない。命の危険を感じたら「ストーカーに追い詰められ、心身ともに疲労して一時的に発狂」したふりをして、相手を捕まえて目を潰しちまうのが一番効果的だろう。

とにかくキ●ガイと闘うには自分もそれ以上のキ●ガイになることが必要だ。罪を問われても日本の法律はキ●ガイには大甘なので大丈夫だ。

○チカン

対策：満員電車にはカッターを持って乗り込んで、歯を光らせながら一駅ごとに「あたしに触ったら切るよぉおお！」と大声で宣言すると少しは痴漢に合いにくくなるだろう

ナンセ相手は普段お世話になってる国家権力だからねえ。この国がホントに耐えられないぐらいイヤな奴は、さっさと他所へ出て行けきゃいいんだ。近くには韓国とか北朝鮮とか、正義にあふれた正しくてイイ国が沢山あるからねえ。身も心も心底腐った俺にはこの国ぐらい腐って汚い国の方が住みやすいぜ。

それがイヤな奴らは、警察官様にタテ突いて国家権力と闘争しているチンケな妄想に浸ってないで、さっさとイカダか泥舟にでも乗ってこの国から出ていけ。それができない奴らは以下のことを正しく認識しろ。俺たちはみんな性根の腐った国に住んでいるとびきり臭い糞なんだ。糞にはプライドもへったくれもねえ。糞は糞らしく、ハエにたかられるようにとびきり臭く腐ってしまえ。な〜んて抽象的なコト書いてもしょうがねえから、ドンドン先行くぜ。

★私はいかにして警官を愛するようになったか？

中卒で働き出して、勤務先の工事現場や工場で陰惨な暴力事件を起こしてはクビになっていた俺は、悪い噂が立ちすぎて地元で勤務する職場が一つもなくなってしまい（拳のカ

意を配ること。人間はそういう気の抜けた瞬間を大胆に襲われると弱いものだ。

襲われたら大声で助けを求めるのは常識だが、それでも駄目でいよいよ●されそうになったら、恥を忘れて脱糞、放尿をして全身に糞を塗りたくろう。よほどのスカ●ロマニアでもなければ、糞まみれの女を●す根性のある奴はそうそういないものだ。あと、従順にフェ●チオするふりをしてチ●ポを思いきり噛み切るぐらいはやっても罰は当たらない。強●魔はそれぐらいのことをされても当然である。

○総括

いろいろ書いたが、襲われる女の子の側にも覚えておいてほしいことがある。それは「男の性欲をソソる格好をすれば、それだけ性犯罪にも合いやすい」ということだ。女の子の側にはそういうつもりはないにしても、それを見て勝手に欲情する男は確実に存在する。面倒な話で恐縮だが、この世の中ではミニスカや超ボディコンなどの扇情的な格好をするなら、それなりの覚悟も必要ってわけだ。

あと、出すゴミにはくれぐれも注意しろよ。捨てたゴミを拾われると、住所や名前や電

タチが変わるまで他人をブン殴るほど、ひたすら暴力が好きだった）、どうせなら東京へ行こう、あれだけ沢山人がいる都市なら、ときどき無差別に人を襲っても田舎のように捕まったりすることはないだろうと考えてのことだったワケよ。

その頃の俺は目つきも最悪で、見るからに凶暴な顔と格好をしていたね。今なら珍しくないかも知れないが、当時の俺は髪をまっ青に染めて、眉を剃り、おまけにバカでかいアフロヘアにして、鋲をたくさん付けた皮ジャンを羽織って「いつ誰に襲われても、逆にこちらから殴り倒して奥歯が全部折れるまでブン殴ってやる！」と心に決めて、目をギラギラさせながら周囲に油断なくガンを飛ばして街を歩いていたから恐ろしい。

今考えると若かったのかなあとも思うが、当時の俺は「誰でもいい、一度でいいから人間を一人、〝撲●〟してみたい！」と日夜真剣に考えていたんだ。そう言う志を胸に抱いて生きていて、周囲から浮き上がらないハズがない。結果的に路上で誰かに襲われることなど全くなかったね。ただ、昼間に道を歩いているだけでもずいぶんと警察官様に不審訊問を受けたもんだ。

特に東京で先進国首脳会議があったときなんか、場所によっては辻ごとに立っている警察官様たちに何度も呼び止められて「オイコラ」「何やってんだ！」とやられたぜ。しか

鬼畜流警官対策　鬼畜流警察対策のススメ

最初からハッキリ言っとくけど、俺は警察官様のことを大好きで愛してるからね。今までもこれからも、こう言う本の中でも字面上は一言だって警察官様の悪口はこれっぽちも言うつもりはねえよ。まあ、それが俺流の「警察対策」の第一歩なんだけどさあ。と言っても、何のことか分からない奴の方が多いだろうからイチから説明しよう。心に思ってもいないことを平気で文に書けるって部分で、俺は鬼畜ライターなのさ。

★警察官様とは争うだけ無駄

なんせ人生なんて長いようで短いからな。生きてる間はなるべく自分の楽しみのために有効利用したいと誰でも思うだろう？　俺は天下の警察官様とイザコザを起こして貴重な生存時間を無駄にツブすなんて考えただけでも鳥肌が立つねえ。そうならないためのテクニックをこれから皆に説明してあげようというわけだ。まず、警察官様と争うことがこの国で快適に生きるには時間の無駄でしかないってことを正しく認識することだ。

しこれは考えてみれば当然だ。

目つきが悪く殺気を放ちながら怪しい格好をして街を徘徊している奴を見かければ、別に警察官様でなくたって誰でも「何だあいつは？」と怪しく思うだろう。「周囲から浮いた怪しい格好をして歩けば警察官様に注目される」のは当然なんだ。

正直に言うと、それより若い頃に更に激しく凶暴だった俺は、地元の警察官様ともいろいろあったのだが、思い出したくもない話ばかりなので、その話はここでは割愛する。とにかく、いろいろと不審訊問を受けたり、つまらないことで警察官様とモメたりしながら俺が導き出した結論は以下の通りだ。

1　悪事は人目に触れないように秘かに行うこと

2　そのためには普段から目立たない、人畜無害で気の弱い「一般小市民」を装うのが一番いい

3　殺気などと言うものは、人を襲うその一瞬だけ出せばいいものだ。普段からあからさ

まに人前で出すものではない

4　凶悪な気配を消して警察官様をやりすごせ。彼らの目にとまらないような根性無しの大人しい人間のフリをしろ

このように書くと「冗談じゃない。オレは人にナメられるのが死ぬより嫌だ！」という誇り高いお方もいることだろう。しかし、どんなに格好をつけて強そうにしても、自分以外の連中に心の中でどう思われているかなんて分かったものではない。人にナメられているかナメられていないかなんてことは、単に本人の気分の問題にすぎないのである。自分が好きでも何でもないどーでもいい連中に、自分のことをどう思われようが構わないではないか。

そう言う連中にナメられまいと努力をすることとは、わざわざそいつらのために行動しているようで、俺にはとても我慢ならないぜ。そう言うことをふまえた上で、警察官様たちに逮捕されないための秘儀を公開しよう。最重要のポイントは「警察官様に怪しまれたら終わり」と言うことである。

これはオウム事件の頃にＴＶによく出ていた信者の皆さんの態度が一番分かり易い「悪い例」だ。やたらと「証拠は！　証拠はあるのか！」と叫ぶバカさかげんと身苦しさ……あいつらはホントに犯罪者としても三流以下だったねえ。証拠さえなければどーにかなるという思考自体がすでにアウトなのだ。

証拠が見つからなくてその時はしのげても、警察から「こいつは怪しい」とマークされれば監視の目がついたり、いらぬ嫌疑をかけられたりで、そんな面倒なことになっては、とても思いきり悪事を楽しむ余裕は生まれない。「証拠がなければそれで大丈夫」などと思うのは大きな勘違いなのだ。警察官様が長年の経験で培った〝職業的カン〟というやつを完全にごまかせなければ、証拠の有無など無意味に等しいのだ。警察官様に「あっ、こいつはどう見ても根性なしのパンピー野郎だ。こんな奴じゃあ立ち小便もできねえだろうな」と思われるような情けない印象を与えられるようになることが大切なのだ。

そうなるための最良の方法が、冒頭で言っていた「俺は警察官様を愛している」と自分に言い聞かせる発想につながるのである。たとえば、「オレはこいつが憎くて憎くてたまらねえ！」という敵意は、言葉にしなくても明確に相手に伝わるものである。しかし同様に「私はあなたに非常に好感を持っています」と言う好意もまた、確実に相手に伝わるものである。

常日頃から「僕は警察官様の皆さんが大好き。彼らは正義の味方で街の平和を守ってくれるとてもいい人だからいつもとっても感謝してます」と強く思っていれば、その好意は警察官様と一対一で対面したときも良い形で伝わるものである。

警察官様も人の子で、その習性は基本的に「敵意を向ければ敵意が帰ってくるし、好意を示せば親切で返してくる」と言うものである。警察官様は横柄でぞんざいな態度を取る相手には「何だコノヤロー」で答えるし、紳士的な態度で敬語を使って礼儀正しく話しかける市民（ひと目で分かる暴力団員とアジア系の外国人は除く）には、それなりの礼を以て答える非常に単純で分かりやすい生き物なのである。

こう言う素敵な人々を相手に、わざわざケンカごしで対応するような輩は、隠れて悪事をするなど百年以上早いので、さっさと死んで転生でもした方がいいだろう。読者の中には「オマワリに敬語を使うなんて我慢ならねえ」と思う方もおられるだろう。そう言う方は自分の中で「敬語は相手を馬鹿にして使う言葉」と言うふうに位置づけて生きていけば無理なく生きられる。

ちなみにこの俺も、敬語は馬鹿にしてナメきった相手にしか使わない。俺にとっては敬

語＝侮蔑用語なのだ。まあ、そう言うわけで、ウラで悪事をしている人間は警察官には普段から好意と感謝の念を持っておこうと言うわけだ。何度もくり返すが「悪意も好意も確実に相手に伝わる」と言うことを忘れてはならない。

★悪事には悪事用の別の人格を作っておけ！

「逮捕されないためにどうすればいいか」と言うことをつき詰めて考えた俺が取った次の行動は、悪事を行うときのために自分の中にもう一つ別の人格を作ることだった。これも「証拠さえなければ大丈夫」と言う発想がいかに危険かということと密接なつながりのあることとなのだが、悪事をなした記憶がある限り、「やましさ」や「罪悪感」はついてまわり、嘘をついても何となく言葉や態度に微妙に現われるもので、刑事様や警察官様は犯罪者のそう言うところを決して見逃さないのである。

だからいくら証拠がなくても「こいつは怪しい、絶対に何かやってるにきまってている！」と言う心証を刑事様に与えてしまってはおしまいなのだ。そこで俺が考えたのが、自己暗示と自己催眠をくり返して疑似的に分裂症になり、凶悪で沈着冷静な全く別の人格を作り、悪事をなすときだけその人格を自己暗示で呼び出すというムチャクチャな方法

だった。
これには刑事様の職業的カンも全く対処できないはずだ。何せ、人格を普通に戻したら自分でも「悪いことをやった」と言う記憶がまるでないのだから「やましさ」も「罪悪感」も感じようがないのである。

おそらくウソ発見器にかけられても反応などしないだろう。この方法はかなり難しくてそれなりの訓練も必要なのだが、「オレはバレずに悪いことがやりてえ！」という強い意志を持ってさえいれば実行は不可能なことではない。ただ、一歩間違うとモノホンの精神病になってしまう危険性も確実にあるので、やってみようという方は充分気をつけて勝手にやって欲しい。実行して精神がおかしくなっても俺は知らないからな。

★古本屋から聞いた警察様とのステキな関係

最後に、これは「警察官様に怪しまれない方法」とつながる話なのだが、今から数年前、俺はある古本屋の親父から以下のような興味深い話を聞いた。半分はその親父の妄想かもしれないが参考までに書いておこう。聞けば聞くほど有りそうな話である。古本屋と

言うのは「古物商」と言うことで「盗品の売買」に関して警察と連絡を取り合う関係にあるらしい。そのせいか、それ以外でも警察に協力を求められることがあると言うことだ。

まず、どこの地区の警察署でも、管轄する地区に住む住人を対象に「不審人物リスト」というモノを作成しているらしい。その数は東京なら私鉄沿線のひと駅につき約二百名とも言われるらしい（俺も入ってるかなあ……）。そのリストに関して古本屋も協力を求められると言うことだ。それはもちろん客に対しての情報提供である。

俺が話を聞いた古本屋の親父によれば、まず全共闘運動や内ゲバや爆破テロなどが盛んだった時代から先は、左翼系の書物を沢山買っていく人物が警察の興味の対象だったらしい。それがずっと続いた後に、80年代の中頃、有名な連続幼女殺人事件が起きた後は、ロリータ関係の雑誌や写真集を集中的に買っていく人物にも警察は興味を持ったらしい。

そしてオウム事件が起きた後は、宗教書関係を買っていく連中にも興味を持ち出したと言う。もちろん神戸で起きた小学生連続殺人事件以後はホラー関係の書物を集中的に買う客も興味の対象になっているに違いない。ナイフを集めるミリタリーマニアも同様であると言う。以上は「防犯」と言う視点で考えると実に明快で理にかなった発想である。

神戸の小学生殺人事件のときなどは、事件の起きた周辺のレンタルビデオ屋が、警察から客の借りたビデオのリスト一覧の提示を求められて、それについて「プライバシーの侵害だ」、「いや、非常時だから仕方がない」とマスコミで賛否両論の論争があったことも記憶に新しい。以上のことから、俺の言いたいことはもうお分かりだろう。

1　古本屋やレンタルビデオ屋を信用するな

2　ヤバイと思う本やビデオは地元の店で頻繁に買ってはいけない

3　ヤバイと思う本やビデオは持ってることもおおっぴらにしてはいけない

4　猟奇趣味がありいつかそれを実現したいと思う者は、住んでいる地域社会の皆さん向けに人畜無害に見えるダミーの趣味（極端な例は盆栽やゲートボールなど）を持って健全な人間のフリをしろ

5　警察はときどき新聞の拡張員を装って、玄関から部屋の中を伺おうとするらしい。だから玄関は小ざっぱりとさせてヤバそうなモノは見えない位置に置いておけ

6　ゴミ出しは地域社会のルールを守り、近所のおばさんたちの評判を良くしろ

7　何かウラで長期的に悪事を働くなら表向きは「少し抜けていて臆病で善良な一般小市民」というキャラクターを完全に演じきろ！

と言うワケだ。もちろんこれに「常日頃からおまわりさんに尊敬と感謝の気持ちを持って、街でおまわりさんを見かけたら、心の中で〝いつもありがとうございます〟とつぶやいて頭を下げよう」と言うのも忘れてはならない。まあ、ひと事だけど健闘を祈るぜ。いやあ、それにしても警察官様ってホントに素晴らしい人たちですね！

☆村崎百郎「非公認」ＷＥＢより☆

初出不明／１９９０年代後半頃

ゲス

村崎百郎書き下ろし小説



パープルナイト

パープルナイト

黒いコートを着て自転車にまたがり、十六夜の月影に照らされて夜の中へ漕ぎ出すと、路地裏の暗がりから同じように自転車に乗ったゴミ漁り仲間の村崎百郎が音も立てずに現われた。

奴とは数年前に知り合って以来、毎日のように一緒に夜を徘徊する仲だ。芝居じみた口調で皮肉を言ったり、さして面白くもない駄洒落を延々と語り続けるのには時々閉口するが、ゴミ漁りの腕だけは確かなものがあり、そのことには俺も一目置いている。

夜空を見上げながら「月が白い、夜半過ぎにはもっと冷え込むだろうな」と言う百郎に「もう十月なんだから当然だろう」と答えて、今夜も二人のゴミ漁りが始まった。行き先は、生まれつき神や悪魔の声が常時アタマの中に直接聞こえてくるという百郎のキ●ガイ電波体質まかせで、奴が想念で街中をスキャンして、拾って嬉しいゴミや物語が落ちていそうな所を見つけるのだ。

「じゃあ頼むぜ、人が来ないように見ていてくれよ」そう言いながら百郎は路地裏へ行

き、アスファルトの地面をなぞりながら何やらぶつぶつと呪文めいたものをつぶやいてゴミ探査儀式を始めた。俺の役割は、百郎が意識を集中できるように周囲に気を配るだけだ。奴に言わせると「周囲の探査をするときは、自分の身体へやってくる電波への防御を一時的に完全に外してしまうので、そばにいる人間の意識が全部流入して大変」なんだそうだ。俺にも詳しくは分からないが、頭の中に音の大洪水が出現してかなり苦痛らしい。いかにも筋の通ったキチ●イが語りそうな〝ご立派なキジルシ理論〟だとは思うが、本人の言う通りにしておけばお宝ゴミが拾えるんだから、俺はいつも百郎の気の済むようにさせている。とりあえず、俺に危害さえ及ばなければ、こいつがキ●ガイかどうかなど、どうだって良いことなのだ。ちなみに俺の意識は百郎には「ニュートラルな状態で近くにいても障らない」タイプのものらしい。

「史郎は俺と違って攻撃的な性格をしていないけど、それでも俺と精神構造が似ているから気が合うんだと思うよ」と百郎に言われると「お前も同じキチ●イ」と言われたようで少し複雑な気持ちになる。そう言う仲間意識は全くないのだが……。

　などと考えていると、しばらく黙っていた百郎がふいに立ちあがり、左手を伸ばして北東の方角を指差した。どうやら御神託がおりたらしい。

「その方向だと、今夜の徘徊コースは川沿いの道だな。明日は燃えるゴミの回収日だし、何か面白い本でも拾えるといいな」

「……そうさなあ、今夜は何だか向こう側の地区に広がる闇が、俺をさかんに呼んでいるような気がするんだ、気のせいかもしれないけど」

「いいじゃないか、あのへんはアニメおたくが何人も住んでる場所だぜ。またいつかの夜みたいに、読んだあとで高く売れる漫画の単行本が箱単位で大量に拾えるかもな」

そいつはどうだかわからない、と言いながら百郎は無表情で自転車に乗って川をめざして走り始めた。その後を追って俺もゆっくりとペダルを漕いで走り出す。何故だか不意に、中学二年の夏休みに浜に流れ着いた流木を繋いで作ったチャチなイカダで、夜の海へ漕ぎ出した時のことを思い出した。あの心地良い不安と底知れぬ不気味さは、漆黒の夜の入り口に立った者だけの快感なのかも知れない。

荷台に新聞や雑誌をしこたま積みあげた軽トラが前方を通り過ぎた。

「ここは激戦区だぜ」と百郎が言うように、この街では一晩ゴミを漁っているといつも必

ず路地裏で二、三台はこんな回収トラックに出くわしてしまう。彼らは結束された大量の新聞や雑誌、ダンボールなどが目当てなので、彼らの通った後でもお宝が残っている可能性は充分ある。俺や百郎が好んで漁るのは、必ずしも雑誌や電化製品などのリサイクル可能な『モノ』ではなく、それを捨てた人間の全体像や生活のストーリーが見えてくる『モノガタリ』ゴミなのだ。

百郎は自分が実感できない『感情』を知りたくて、そして俺は各種メディアのフィルターを通さない本当の『現実』がどんなものかをこの手で確かめたくて、ゴミを漁って他人のプライバシーや物語を覗いている。そう書くと何やら大層なことをしているような気がするが、それは妄想と言うもので、やっていることが単なる下品なゴミ漁りだということは二人とも重々承知している。

そんなゴミ漁りを二人でつるんでやり始めてもう数年になるが、いくら漁ってもそう簡単には満足のいく結果が出るものではない。

「何もしないよりはマシだろ！　黙々と自分のゴミだけを出す生活よりは、他人様のゴミを漁ってそれを楽しみ、飽きたらそれも捨てるという生活の方が、結果的には人より出すゴミが増える分だけ人よりリッチでゴージャスと言うものじゃないか？　おい、俺が言っ

てることは完全に間違ってるよな、そうだろ、史郎！」

俺をとりまく『現実』も、ゴミから出る物語を漁ったからといって明確になるものでは決してない。むしろ、そうしたゴミから拾うゴミのようにお安い物語を読めば読むほど、俺の現状認識能力の混乱に拍車がかかり、俺をとりまく現実はますます虚ろで怪しいものに感じられてくるばかりだ。

確かなことは、人が捨てるゴミに付着するような物語はやっぱり人が捨てたくなるようなクズのような物語ばかりだということだ。

『人間がどれほど下らないゴミのような存在か』を知りたければゴミを漁るがいい。ゴミを漁れば漁るほど、ゴミの持つ物語を深く読み取ろうとすればするほど、ゴミと自分の区別がつかなくなり、全ての関係性を離れた所から考えれば、自分とゴミとが同等の存在であると言うことが頭ではなく、実感として理解されることだろう。「ゴミの定義って何だ？　役に立たないもの、必要のないもの、捨てるべきもの……みんな俺に当てはまることばかりだぜ」「他の誰にとってもゴミじゃない奴なんかどこにもいねえよ。だからくっだらねえ見栄や体裁やプライドなんかさっさと捨てちまって、みんな自分がゴミであることに大きな自信を持って堂々と生きることだな」

「俺もゴミなら奴らもゴミだ。だけど、どうして同じゴミ同士、夢の島で一緒に仲良く腐れないいんだ？」

百郎はときどきそんなふうに誰に言うでもなく言葉を吐き捨てる。それも立派な『言葉ゴミ』ってわけだ。

静かに自転車を走らせていたら、目指した地区のゴミ集積所にたどり着く前に妙な女に出くわした。

その女は、この寒空に上着も羽織らず黒い長袖のワンピース一枚で、真一文字に口を結んで前方を激しく睨み据えながら、川沿いの道を真正面からぎくしゃくと一心不乱に歩いて来た。異様なのは、右足のストッキングがつっかけたサンダルが隠れて見えなくなるぐらい見事に脱げ落ちていて、それを思いっきりずるずると引きずりながら歩いていたことだ。これは尋常ではない。

こちらを一瞥もせずに女が通り過ぎると、前を走っていた百郎が自転車を止めて振り返

り、目を輝かせて嬉しそうに話しかけてきた。

「どう思う？」

「歩きにくそうだったな」

「違うだろ」

「ああ、見るからに『痴情のもつれ』って感じだったな」

「フッ、男の方が下手クソだったんじゃねえか。もしも強●なら手際が悪かっただけかァ？　でなきゃ『信頼していた男の部屋へ遊びに行ったはいいが、部屋に入るなり突然男が豹変して……』と言うありがちなパターンかねえ」

その背後に膨大な物語の存在を感じさせる光景と言うのはある。俺も百郎も、ゲスな妄想力を刺激されてほんの少し興奮してしまった。夜ならではの出会い、夜ならではの物語ーーそんなものの断片に触れたとき、俺の心は一瞬激しく己の生を実感するのだ。

「これは面白い」

自転車の向きを変えて女の後を追った。百郎も無言でついて来た。女は角を曲がると、コンビニエンスストアに入り、すぐに出てきて表の公衆電話から何処かへ電話をかけた。どうやらコンビニで小銭の両替をして貰ったようである。

俺達はコンビニの前に自転車を止めて中に入り、雑誌コーナーで新着のマンガ雑誌を立ち読みするふりをしながら表で電話をかける女の様子を窺っていた。女は十分程受話器に向かって何かを話し続け、その後で目の前の街道でタクシーを拾って、ストッキングを引きずったまま乗り込んで新宿方面へ向かって行った。

百郎と俺は黙ってそれを見送りながらコンビニを後にした。「あれはいかにも親しい女友達の所に電話して、事情を説明してそこへ向かったとしか考えられないな。見たろう？ ポーチもバッグも何も持っていなかったし、とりあえず泊めてよって頼んだんじゃないか。おそらく友達の家に着いたら『ねえ、聞いてよ、〇〇ったらサイテーなのよ……』って朝まで男の悪口を言ってんだろうな。まあ、とにかくこれで大丈夫さ」俺がそう言うと百郎は少し眉をひそめて「あの女が引きずっていたのは『ストッキング』だったのかな、それともワケアリな『過去』だったのかな」などと格好をつけて顎に手を当てて考えてい

るフリをしている。

どっちだって歩きにくいことには変わりないさとも思ったが、声に出して言うのもなんだか面倒になって、黙って自転車に乗ってペダルを漕ぎ出した。

どうせ他人事だし、あの女にも二度と会うことはないだろう。雑誌を賑わす『事件』にもなりきれない中途半端でチンケな『出来事』—そんなことは、いつだってこの夜の中では無数に起きたり行われたりしているものなのだ。

「全てを見届ける必要なんかないさ」

そう言いながら、後からついて来た百郎が俺の横に並んで自転車を走らせる。こいつのことだから、さっきの女を見て触発されて、今宵世界のどこかで無残に●される処女たちの●間を流れる破瓜の血でも夢想してるんだろう。

しょっぱなからそんな辛気臭い光景を見てしまったせいなのか、その夜はもう一度、妙な出会いがあった。それは百郎が受けた御神託にしたがって行った公園脇のゴミ集積所で

起きた。

「何やってんの？」

ゴミを物色しているときに年の頃なら十七、八の女の子に背後から声をかけられたのだ。そもそもゴミ漁りの最中に声をかけられること自体が稀で、しかもそれがどう見ても高校生の女の子だったので俺達はほんの少し驚いた。普通こんな行為をあからさまに堂々とやっていると、周囲の奴らの方が引いてしまい遠くから胡散臭そうな目をされることはままあるが、年配の人間でもない限り、声をかけられるなんてことは皆無なはずなのだ。それに時間も午前一時を回っていて、女子高校生に声をかけられるには少々遅すぎる時間帯だ。

ショートヘアーで気の強そうなきつめの顔立ちは嫌いじゃないんだけど、理屈っぽそうでなんかメンドくさそう。

それでも百郎はひるまずにヘラヘラ笑いながら堂々と答えた。

「見ての通りのゴミ漁りさ、町内会の皆さんの抗議はごもっともだし、批判は全て甘んじ

て受けるつもりだけど、俺達はこれをやめる気は毛頭ないよ。あんたの出したゴミがあって、漁られるのが嫌だっていうのなら、今度からゴミはちゃんと朝の時間帯に捨てるんだな」

「ううん、違うよ。私このあたりの住人じゃないし、道徳にうるさいタイプでもないわ。ただホームレスにも見えない人がゴミ漁ってるからヘンだと思っただけ」

「ちっちっ、ゴミ漁りはホームレスだけの専売特許じゃないんだぜ。仕事や家庭のあるなしにかかわらず、人はゴミを漁るときは漁るものなんだよ。『そこにゴミがある限り』ね……」

傍で聞いてててこっちが恥かしくなることを臆面もなくしゃあしゃあと平気で言えるのが百郎だ。

「もしかして探偵とかスパイとかやってるの？」

「公安警察が目をつけた団体の職員のゴミを漁っているという話は良く聞くし本当だと思うけど、俺達は違うね。もっと文学的な理由によるものだ」

「俺達？」

それにしても『文学』とは恐れ入った、これは新しいパターンだな。俺は百郎がこの娘にどういうペテンをしかけるのか、楽しみになってきた。

「今宵、この東京の夜の中を徘徊し、モラルに欠ける人々が捨てた下品なゴミを漁るダストハンターのお仲間は、二十三区やその他の市を合計すると、少なく見積っても三千、いや、三万人は下らないだろう」

「ええっ⁉　ウソでしょ、そんなにいるの？」

「いるいる。どの夜にも、どの街にも、どの時間にもダストハンターは必ずいて、君の家の出したゴミも漁っているさ」

「ふーん、そう言えば、私もたまにホームレスの人が段ボール箱を拾っているのを見たことがあるなあ。でもそんなに漁っている人がいるなんて信じられないよ」

「だけど、こうしてちゃんといるんだもんね～。君の後にはりついている水子霊よりは確実な存在さ」

「失礼ね、私はまだ高校二年生よ」

「悪い悪い、冗談だよ。でも充分子供の作れるトシだろ。それともまさか処女だとでも言うのかな？」

「そんなつまらないドジ、踏まないってことよ」

女の子は百郎の下品な冗談にも怯まずに答えている。もしかしたら良い子なのかもしれない、そう思っていると、彼女は百郎が最も好みそうな質問をしてきた。

「ところで何を拾っているの？」

「いやあ、よくぞ聞いてくれました。その質問、待ってたんだ。ちょっと長くなるけど良いよね」

百郎は大きな眼を最大限に細めて返事も聞かずに上機嫌に語り始めた。

「本や雑誌や電化製品、自分で拾って楽しいものは何でも拾うね。実を言うと俺はとてもスケベな変態君でさ、初めて下着泥棒をしたのが十歳の頃というフェティッシュな野郎なんだよ。それがどんなティッシュかは高校生の君には難しいかもしれないけど、とにかく駅周辺で配っているテレクラやサラ金のチャチいティッシュとは色も形も太さも格段に違うんだ」

「はあっ？」

この告白には気丈な女の子もさすがに眉をひそめた。

「そういうわけで俺は女の子の捨てる下着類もしっかり漁ってるんだ。これがやってると結構沢山出てくるし、引越しの時のゴミからは、たまには下着と一緒にその女の子の写真なんかも出てくるんだから嬉しいのさ。おかげ様で東京に出てきてから今まで16年間は、全く下着泥棒をやらずに済んでいるよ」

「あっそう、良かったたね」

女の子は何の愛想もなくそっけなくそう言った。

「だけど、俺達がメインに漁っているのはそう言う『物』じゃあない。俺達が漁っているのは捨てられた『物』に付いいた『物語』なんだよ。わかるかな？」

「物語って、お話のこと？」

そこで百郎は持てる駄ジャレを総動員して「物ではなく物語を拾うゴミ漁りの何たるか」をできるだけ面白そうに女の子に語って聞かせた。こうして俺達はいつの間にか女の子と打ちとけてしまった。

こんな知り合い方をしてしまった場合は名前を聞くのも野暮な気がして俺も百郎も女の子の名前を聞かずにいた。向こうもそんなことには別段こだわらないようだった。

「……別に理由なんか聞きたくないけど、こんな時間に俺達に声をかけるんだから何かワケアリで朝まで暇なんだろう？　だったら俺達と一緒に夜を歩かないか。今日は十六夜の月も見事だし、こんなに気分の良い夜は一年を通してもそうそうあるもんじゃない。ゴミ

を漁りながら俺達の拾った物語を紹介してあげるよ。
俺達は今夜出掛けにマンションにき●玉とペ●スを両方置いてきたから、君を襲う心配もないぜ。一人でフラフラしている方がよっぽど危険だしね」

女の子はそう聞くと吹き出して笑った。

「アハハハ、それは奇遇だなあー。私も今夜はお家にヴァ●ナとア●スを置いてきてるんだよ」

そう言うと女の子は笑いながら百郎の肩を小突いて、ややしばらく百郎の眼に見入っていた。

「まあいいよ、信じとく。悪いコトできるヒトじゃないみたいだしね」

「正確に言うとこいつは『良いコト』とか『悪いコト』という発想がまるでない奴なんだけど……」

俺がそう言うと百郎は向き直って耳打ちしてきた。

「おい史郎、今夜俺を呼んでいたのはどうもこの娘みたいだぞ」

「どうやら、そうみたいだな」

「この娘に俺達の夜を教えてやろうぜ、暗くて深い闇の中の汚穢に満ちた物語の数々を」

女の子を百郎の乗る自転車の荷台に横に腰掛けさせて、俺達はゆっくりと夜の中へ漕ぎ出した。午前二時をまわって住宅街の道路には人通りはほとんどない。女の子が百郎の腰に軽くしがみつきながらどこへ行くの？　と尋ねる。

「そうさなあ、女の子が一緒となれば、やっぱり『お花畑』が適当だろう」

百郎がそう言ったので俺も思い出した。そういえば、一カ月程前に新しいやつをこの近くで見つけていたのだ。最近の様子をチェックしておくのもいいだろう。

「お花畑？　ずいぶん可愛らしい趣味ね」

「行けばわかる。そう滅多にはないやつだから楽しめると思うよ」「花が好きなの？」

「いや別に。俺は穴の方が好きさ、特に女の下半身に付いてるやつは二つとも大好きだねえ」

「はあ？」女の子はやれやれ聞くんじゃなかったなと言う顔をして黙ってしまった。相変わらずロクなことを言わない奴だ。

「穴はいいぜえ、穴はよオ。考えてみれば俺のこれまでの半生はそう言う穴を塞ごうと言う徒労の連続だったぜ……」

百郎は誰も聞いちゃいないのに調子に乗って語り始めた。

「若いうちはモノの道理って奴がまるで見えてないもんだから、〝この世には俺に塞いでもらいたがっている穴が無数に存在しているんだ〟って勝手に思い込んじまって、そりゃあもう大変だったよ。塞いでも塞いでも魅力的な穴が次から次へと目の前に現われては

〝早く塞いで〟と俺を誘うんだからたまんねえ。だいたい塞いだってほんの一瞬だけで、穴ってやつはいくら塞いでも塞いでも塞ぎきれるもんじゃないんだ。そこんとこが一番の問題なんだよな」

若い女の子が耳を塞ぎたくなるような話を何の屈託もなくしゃべる方が問題だと俺は思ったが、女の子はそれほど動じていないようで「塞ぎきれないって、サイズに問題でもあったの？」と気丈に切り返す。「いやあ、ちょっと大きすぎて入らなかったことが多くてね」と百郎が負け惜しみを言っているうちに、俺達は目的の『お花畑』のある交差点へ到着した。

俺は「あれがそうだよ」と言って百郎の自転車から降りた女の子に交差点脇の電柱の下を指さした。

そこにはしおれかけた花束がいくつかと線香の灰でいっぱいになったクッキーの空き缶が無造作に路上に転がっていた。夜風に飛ばされた白い花弁があたりに散乱してしまった。

「一カ月前に花畑ができた頃は、花束がこの三倍ぐらいはあってなかなか賑やかだったっ

けな。まるでパチンコ屋のリニューアル開店日さ。俺達はこんな場所を『お花畑』と呼んでいるんだよ、分かるかい？」

女の子は驚いたように路上の花束に見入っていた。

「……これって、ひょっとして事故現場ってこと？」

「夜を徘徊していると、年に何回かはこんなお花畑に遭遇するんだ。見通しの悪い曲がり角や交差点の近くに、ある日突然大量に花束が置かれる。俺達はそう言う弔いの花束を見て、見たこともない誰かの死を知るのさ」

「……」

「一昨日見たときには花束ももっと沢山あって、ホントにお花畑みたいだった。一緒にたくさんのお菓子やチョコレートにまじって、玩具も置かれていたから、ここで死んだのは多分小さな子供だったんだろうな」百郎は無表情で倒れている花瓶を立てながら言った。

「最初はみんな、こんなものさ。毎日の様に花が飾られお菓子が供えられ、お線香も絶え

ない。でも、半年もすれば殆ど何もなくなる。人は他人の死を悼んでばかりもいられないからね」

俺は跪いてアスファルトの路上に手を当てて静かになぞった。

「ウチの近所でも五年くらい前に若い奴がオートバイで事故って大きなお花畑ができていたよ。友達の多い奴だったと見えて、当初はずっとその場所に花が絶えなくて、死んでから三年目ぐらいまでは命日になると路上に座り込んで夜通し酒を飲んでいた奴が数人いたほどだった。だけど五年経った最近はそう言うのもさっぱり見なくなったね。死んだ人間はそうやってゆっくりと忘れられて行く。薄情なようだけどそのほうが健全だと思う。いつまでも他人の死を悼み続けるのはどうあったって不健康だし」

女の子は黙って立って花束を見つめていた。

百郎が嬉しそうに笑いながら言う。

「そうそう、不健康で思い出したよ。俺達がこのお花畑を見つけてから何度目だったたっけな、一度だけ死んだ子供の母親らしい女が線香をあげていたのを見たぜ。年も二十代半ば

ぐらいの若いお母さんでさ、しゃがみこんで線香に火をつけながら携帯電話をかけてるんだ。後から近づいて聞いてみたら、何とこれが死んだ子供に話しかけてるんだから驚いたねえ。『寒くない？　ちゃんとご飯食べた？　寒くなってきたから風邪ひかないようにね……』なんて一心不乱に語りかけてるんだぜ。子供を失った悲しみがあまりにも大きくて、精神がどうかなっちまったんだろうな。いま思うと鬼気迫る光景だったな」

俺は天国の公衆電話で頭に輪をつけた血まみれのガキが「一回言えばわかるよ、も～ママってばしっこいんだから！」とうんざりしながら電話に答えている様子を妄想しながら百郎に訊いた。

「なあ、携帯の電波はあの世まで届くのか？」

「『あの世』なんかねえよ。聞こえてくる『声』なんて、おおかた人々の強烈すぎる想いが空間に刻まれて『電波』になってそこらじゅうを漂ってるんだろうよ。人の感覚なんか当てにならない、人は自分の聞こうと思う事以外は何一つ聞けないのさ。だから子供の母ちゃんは自分自身の声を聞いてるんだ。その気になれば携帯じゃなくてもインターホンだろうと米びつだろうと、どこからだってガキの声は聞こえるさ。人が狂うパターンなんて無数にあるんだ」

それを聞きながら女の子が路上を見つめてぽつりと言った。

「……こういうときは『可哀相に』とか言うべきなのかな？」

「好きにしなよ。ここにはあんたとは何の関係もない俺達しかいない。あんたがしがみついている日常で頻繁に使う『営業用の感情』を出さなけりゃいけない理由なんかどこにもないさ。俺だってそばに気を引きたい女でもいれば、いくらでもウケ狙いで〝ああ、かわいそうにね〟って悲しそうな顔をして優しい人間のフリができる。だけど、悪いんだけど、俺は自分に関係のない見たことも聞いたこともない奴らの死なんか本当に悲しくも何ともねえんだ。だから、こんなこともできるさ」

そう言うと百郎はやおらズボンのチャックを下ろして花束と花瓶に思い切り小便をかけはじめた。

「多少の栄養にはなるだろう。これは死んだガキとは何の関係もないのに遺族のエゴでぶった切られて路上に晒された罪もない花達への哀悼の気持ちだ。なあ、『優しさ』って

のはまだ生きているものへ向けられるべきだろう、違うか？」

そんなものは誰がどう見たって『死者への冒涜』である。だから俺も百郎の横に並んで仲良く花束に小便をかけた。

女の子も、「私も気持ちだけかけとくよ、悲しくもないのに悲しいフリをするのはやっぱりどこか辛い気がするから」と言って俺達が放尿するのを嫌がりもせず後ろから眺めていた。

「そんなスカシばっかりやってるから、頭がおかしくなる連中が増えるんだ」百郎は小便を終えると無表情で自転車に戻っていった。

そして俺達は静かにその場を離れた。遠ざかる『お花畑』を振り返りもせず、俺は胸の片隅に広がる夜の中でひっそりと花ひらく無数の『お花畑』を想い、花達が夜風に吹かれてカサカサとゆれるのを感じていた。

この夜のどこかで俺の知らない『死』がいくつも風に吹かれている。俺の知らない生がそこらじゅうでウジャウジャと蠢いているように。

「いまのはずいぶんと辛気臭い物語だったな、次はもう少し楽しいのを見に行こうか、たとえばあそこだ」そう言った百郎は三丁目の角を曲がったところで自転車を止めた。酒屋の隣がきれいさっぱり片付けられて更地になっていた。

眉一つ動かさないで百郎がつぶやく。

「爆撃があったようだな」

俺もここは誰の家だったんだろう？　と考えてみるが思いだせない。三日に一度は必ず通っていた道なのに、ろくな印象がなくて全く思い出せない。

女の子が不思議そうにくり返した。

「爆撃ィ？」

「そう、爆撃だよ。突然こんなふうにして街の風景が変わってしまうのは、まるで空襲があって爆撃でもあったみたいじゃないか。バブル経済が華やかなりし頃は、こんなもんじゃなかった。毎日どこかの家やアパートが地上げされて家が取り壊され、一晩にいくつもこう言う爆撃跡地を見かけたな。俺達の住む街はいつも俺に断わりもなく、ピザかチーズケーキを切り取ったみたいに部分的に勝手に姿を変えてしまうんだ。俺はいつも突然の更地を見かける度に『爆撃があったんだ』と自分に言い聞かせて納得しているのさ。こんな街で暮らしていると郷愁なんか感じる暇はない。俺の知らない誰かの都合で勝手に変わる風景……そんな街のどこに愛情を持てって言うんだよ。」

確かにここは普通の家だったと思うが家の形は全く記憶にない。

「ビルが壊され、ほんの一瞬土が掘り返される。俺達の住んでいる街が、大地の上にあるんだって実感できるのはその時ぐらいさ。あんたも街を歩いていれば工事現場に行き当たるだろう。土が歩道にこぼれて乾いた土埃が路上に散乱する。新しい靴を履いてはじめてのおでかけでそんな所に行き当たったら、間違いなく嫌な気持ちになるだろうな。さっさとコンクリートに包まれてキレイになってくれって思うのさ、土に対する愛情なんかないだろう」

「わかったけど、それの一体どこが楽しいのよ？」

「自分に関係なく誰かの都合で勝手に変わってしまう街並みをみていると、それに参加できない〝どうしようもなさ〟を感じて街のことがどうでもよくなるだろう。余計な愛情や感情移入がなくなるのは楽しいことじゃないか」

「それは違うんじゃない？　人間なんだから、心に何も引っ掛かりがないと楽しくないじゃないのさ」

「俺は『何かに対する愛情』をひとつずつ捨てていくのが楽しい〝ひとでなし〟なんだよ！」

「そんなのぜえったい認めない！」

「いいよ別に」

言い争ってむくれている女の子と百郎をとりなして自転車を進め、住宅地を抜けて刑務

所跡地の公園脇へ出た。
俺はそこで自転車を降りて百郎と女の子に歩くように言った。
「ここからはしばらく歩いて行こう。夜の中にはときどきこうして自転車を降りて徒歩で散策すべき場所があり、徒歩なればこそ発見できる物語もある」
女の子は眉をひそめて嫌そうな顔をした。
「何か特別なことでもあるの？」
「ついて来れば分かるさ、ささいなことなんだけどね」
「何だよ、もったいぶるんじゃねえよ」
俺は二人を連れて公園を囲むように流れている川を下流の方に向かって歩いていった。しばらく歩いて路地裏に入り込む。少し歩いて広い道に出ると西に傾いた月の光が街灯と溶け合って、通りは奇妙な明るさをたたえていた。

「ここだ。耳を澄ませてみなよ、水の音が聞こえるだろう。ほら、そこのマンホールのあたり」

「ほんとだ、川みたい……でもこれがどうしたの？」

「わかんねえ女だな！　こうやって人知れずみんなのクソが流れてるって言いたいのさ、こいつは」いまいましそうに百郎が言う。

「月影が照らす夜の街のなかで耳を澄ますと小川のせせらぎが自然に聞こえる状況って、情趣があって良いだろう？」

「別にィ」女の子はつまらなそうにかぶりを振った。

「これはお子様にはちょっと難しい楽しみさ」と百郎。

「何ですって？」

「はいはい、二人ともけんかはやめてね。向こうの自動販売機はどうだい」そう言いなが

ら通りの反対側の自販機を指す。

「あれがどうかしたの？」

二人を連れてそばへ行ってみるとその自動販売機はブーン、ブーンと大きな音を立てていた。昼間に街を歩いている分にはそう簡単には気づかない音だ。

「どうだい、知らなかったろう。こいつはかかえている缶コーヒーの温かさを維持しようとこんなにうるさい音を立てていたんだよ。こいつの熱いスピリッツが伝わってきそうだろう？　何か言ってるようにも聞こえる。何て言っているかわかるか？」

「さあな、お前らさっさと買え、買えってか？」

「そんな所でしょうね」

二人は、まるでこのうえなく酷い映画を親に無理矢理見せられた直後の子供のような顔をして俺の目を覗きこんだ。

「何だか『お達者倶楽部』をやってるみたいよね」

「なあ史郎、そろそろまじめにゴミ漁りでもしようぜ」

そうまで言われると何だか少しムカついてくる。

「もういい、わあったよ、どうせ俺は詩人だ！」

「だれも悪いなんて言ってないわよ」

「言いたいことは何となく分かったからさ」

いいや、こいつらは何も分かっていない。

「とにかく、その先のマンションに行こう！　そこが一番行きたかった場所なんだ」

そう言って俺は二人を連れて川沿いの低地に建つ5階建てのマンションの屋上へ上った。この屋上はビル自体が低いにもかかわらず妙に見通しが良く、池袋のサンシャインビ

ルや新宿副都心の高層ビル群が一望できるので深夜の散歩で疲れたときに、たまに立ち寄って上ってはぼんやりと景観を楽しんでいた場所だ。

「なるほど、見晴らしは確かに良いわね」

「いかにも詩人が好みそうな場所だな」

百郎はフェンスにもたれながら赤色灯が多数点滅している新宿の高層ビル群を見つめていた。女の子もそちらに目をやりながら言う。

「あそこだけ不自然に浮いてるね。何だか賑やかで」

「そりゃあそうだろ。賑やかにしなけりゃ形が形だけに細長い高層ビルなんか群れてりゃ遠目にはお墓のようにしか見えないもんな」

「墓標かあ……そうかもね。それにしても賑やかなお墓だなあ」

見晴らしが良いのと歩き回ってつかれたので俺達は何となくそこで休みを取った。俺は

空の話がしたくなって西に傾いた月を見ながら女の子に話しかけた。
「このへんはまだいいんだけど、もう少し新宿の方に行くと空の色が気持ち悪いんだぜ。知ってる？」
「わたしも中学生のときまで住んでいたのは千葉の方だから分かるよ。妙に明るいんだよね」
「そう、雲がまばらに出ている夜なんか、街のネオンが反射して空全体がオレンジ色に染まるんだ」
「暗くない夜なんて最悪だ、闇があるから夜は楽しいのに」
百郎が空を見上げながら言う。
「だったら、追いやられた闇は何処へ行ったんだろう？」
「さあな、住んでる連中の心の奥にでも潜ったんじゃねえか？　お前好きだろ、そういう

安い話」

「ああ、三つで五百円ぐらいのね」

「わたしはどうせ明るいなら、もっと嘘くさい、ヘンな色の夜がいいな、たとえば紫とか」

「そういえば俺がいつか幻視した夜も、街中がそんな色の微光に包まれていたな。ある日、陽が落ちて夜が来て、東の地平から数えきれないぐらい多くの満月が音もなく静かに昇ってくるんだ。夜半過ぎには空いっぱいに無数の満月が広がり、地上は夜とも昼ともつかない神秘的な光に包まれる。そして、外へ出てその光景を見た人間はすべて静かに発狂して世界中が狂いはじめる――そんなヴィジョンだったな」

「眩しそうな夢だなあ」百郎が物憂げに答えた。「それは月の光が人を狂わすんじゃねえよ、『すでにお前らは元々気が狂っていたんだよ』ってことを思い出させてくれるだけなんじゃねえか？　そう考える方が自然だぞ」

マンションの屋上から降りた俺達は、それから少し周辺の住宅街のゴミ集積所を漁り歩き、いくつかの『見どころのありそうなゴミ袋』を物色した。ファッション雑誌や安目のエロ本などを見つけたがどれもあまり大したものではなく、拾うことはなかった。ただ、お寺のそばの集積所で赤茶けた中ぐらいの雑誌の束が落ちているのを見つけた。それは、七〇年代初期のわりと短い期間だけ刊行されていた『終末から』という雑誌の創刊号から終刊号までで、「世紀末も押し迫る汚穢都市東京の腐敗した闇の中で『終末から』と言う本を拾うとは、もの凄く辛気臭くて良いではないか」と百郎が気に入ったので、これは持ち帰ることにした。

エロ系のゴミでは、たばこ屋のそばのマンションのゴミ集積所から風俗嬢の捨てた衣類のゴミ袋を三つばかり見つけて、「こりゃあいいや」と中から少し汚れのついたパンティ四枚とブラジャー一枚を選別して拾得。そばで見ていた女の子はひどく嫌な顔をしていたが、俺達が漁って見せるゴミの中から出てくる手紙やダイレクトメール、給与明細などから捨てた人間のプライバシーが次から次に出てくるのを見て目を丸くして驚いていた。そう、たとえば電話番号なんか、電話料金の請求ハガキを拾えば一発で分かってしまうのだ。

そして、この夜の最低賞は、三丁目の大きなマンションの三〇八号室に住む若夫婦の出

したゴミの中から破りもせずに揃って出てきた衆議院の総選挙の投票用紙の引き換えハガキ。それもポストによく投げ入れられている宅配裏ビデオや出張性感マッサージなどのチラシにまじって捨てられていた。「よりによって投票日前にピンクチラシと一緒にして捨てるとは、夫婦揃ってなかなか政治意識の高い連中だな」百郎が感心してマンションの部屋番号をチェックしていた。あとで御褒美に、彼らの郵便受けに犬のウンチでもプレゼントするつもりなのだろう。友人ながら嫌な奴だと思う。

街道へ向かう坂道を登ったところにある小さな公園で小休止。で百郎が女の子に話しかけはじめた。

「せっかくだから、夜が明ける前に少しは濃い話をしてあげよう。

この近くで大量にゴミを拾った話だ。

今年の三月の半ばの頃だ。この時期は丁度引越しシーズンで、まだ使えるゴミも大量に出まわるという、ダストハンターにとっては毎晩が宝の山のような時期なんだ。その夜も俺は史郎とつるんでこの街道沿いのアパートやマンションのある地区を自転車で流してい

た。そのときに、この公園の出口の横のゴミ集積所に大量のゴミが出されていたんだ。長年の経験から俺達はゴミの山をぱっと見ればそれが単なるカスゴミの山か、まだ使える品物が数多く捨てられているお宝の山かどうかが分かるんだけど、そのとき見たゴミの山は明らかに『金持ちの引越し』という感じだったんで、俺達は嬉しくなって盛大に漁った。まだ使えるビデオデッキや小型テレビ、ＣＤや洋画のビデオソフト、未使用のまま箱ごと捨てられている新品の食器類、衣類の袋も十袋以上出ていて、俺も史郎も片っ端から自転車の荷台に荷物を積んで、ここから近い史郎のアパートへ何回も往復したものさ。

夜明け近くに史郎のアパートに戻った俺達は、ゆっくりと拾ったもののチェックを始めたんだが、その中から奥さんの『妊娠ノート』が出てきたもんだから、こう見えても赤ん坊好きの俺達は大喜びでページの端から端まで一行も漏らすまいと食い入るように読んだんだ。日記によれば、彼らはなかなか子供のできない夫婦だったらしくて、妊娠した子供は病院で何度も体外受精を試みた末にやっと出来たらしかったんだ。奥さんの喜びは大変なもので、懐妊が告げられた日のページには〝病院の先生やお父さんだけでなく、今は世の中の全てのひとたちにありがとうと感謝の言葉を捧げたいと思います〟なんて書いているわけよ。俺も史郎も『子供ができたぐらいでこんなに幸せな気持ちになって世の中に感謝するなんて、何て甘っちょろい善人なんだろう』と思ったものさ。

もう一つ新婚旅行の海外旅行の記録も入っていて、ヨーロッパ各国に行ったらしいんだが、こちらもイラスト入りでホントに微笑ましいの。他人の幸せなんか屁とも思わない俺達だけど、そういう日記は何だかほのぼのしてしみじみ良かったよ。

今から思うと何でそういうものが捨てられていたのかちょっと考えるべきだった。普通の状態なら離婚する以外にそんなものは捨てたりしないからな。

次の夜も、同じ所を通りかかると、また同じ所に大量にゴミが出ていた。今度も新品のタオルやシーツなど、使えそうなものを物色して持ち帰った。その中に度のついた眼鏡が何個も入っていたんでちょっと変だなあとは思ったんだけど、あんまり気に止めなかったんだ。あれも今にして考えると迂闊だったなあ……。

そして三日目の夜にまたまた大量に出されていたゴミの山から書類関係のゴミを拾ったときにことの全てが判明したのさ。

印刷された葬儀委員長の挨拶文が出てきたので分かっちまったんだ、俺達が漁っていたのはその一週間前に事故で死んだ男のゴミだったんだとね。書類関係と手紙関係のゴミを検証して分かった事実はなかなか悲惨だったね。ゴミを出したのは28歳の残された奥さん

で、捨てられた家計簿を見たら、やっぱり旦那の死んだ日から空白になっていた。それも、まあ当然だよな、家計簿って中に小さく日記みたいにコメントをつけるスペースがあったりするんだけど、そこを読むと『お父さんのお母さんのお見舞に行ってきた』とか『今日はお父さんの好物の焼肉』なんて書いてるんだ。何月だったか先のページのある日の所には『結婚記念日』とか書いていたのが哀れだったよ。

そして書類を見ると、銀行でローンを組んで千葉の方に土地を買ってこの春から家を建てようという矢先だったみたいなんだ。建築会社から郵送されてきた家の青写真や図面もいくつかあったからね。

子供が生まれたのが去年の十月だから生後半年の子供を残して逝っちまったってわけだ。結婚し、子供も生まれ、土地を買い、家を建ててさあこれから明るくて楽しい家庭を作ろうとした矢先にプッツリと消失してしまった人生ーー俺は別に『こいつの三十四年の生涯って何だったのかな』なんてつまらないことは考えないぜ。俺はたまたま俺と同い歳で突然死んじまった男の情報を受け取って、しみじみ『人は死ぬんだなあ』って思ったんだよ。

なあ、わかるか？　人は全く本当に死んでしまうものなんだよ。過剰な情報の洪水の中に生きる俺達は『誰かが死んだ』なんて言う情報はものすごくあたりまえすぎて慣れっこになってしまっているけど、小説だとか映画を読んだり観たりして多くの物語を受け取りすぎて『人が死んだ』と言う表現に慣れっこになってしまって、新聞の社会欄の三面記事で死亡記事を見てもああそうかと思うだけだったりするけど、でも、こうして住宅街の夜にゲスなゴミ漁りで他人の死を確認すると、圧倒的なゴミの物量を前に『人が死ぬと言うことはこれだけのゴミが出ると言うことなんだなあ』って、実感できるんだよ。だから何だって話じゃないけどさ。

ちなみにこれは三月の初めの話で、奥さんは旦那が死んでから確定申告に行ってるんだよ、わずか四千円余りのお金を取り戻すためにね。葬式の前に区役所の相談所に行って窓口で順番待ちをしていたときの奥さんの気持ちってどんなものだったろう？　六カ月の赤ん坊は何も分からず笑うか泣くか眠るかしかしないんだろうしな。

俺は、と言えば奥さんの捨てたゴミの中から黒いガードルを拾って『おお、これこそ未亡人になりたてのホヤホヤ下着だ！』なんて喜んでゲスな妄想を燃やして下着を頭から被ってせん●りをこく、超最低のゲス野郎だ。

『人が死んで、たくさんのゴミが出る』話はそれだけだよ。

考えてみると、面白くも何ともないな」

百郎は、黙って静かに闇の向こうへ小さく敬礼をした。

「これで今夜のゴミ漁りツアーはおしまいだ。俺達の話したことはある意味で全てでたらめで全てがほんとうだ。大切なのは、ことの真偽じゃなくてそこから何を学べるかってことさ」

「いいか、メッセージは無限に存在している。そいつらを全部真に受けて発狂するのも明晰さを獲得するのも大した違いなんかない。世界なんか好きに解釈すりゃあいいんだよ。だから物語ぐらい自分で狩るんだぞ。たとえひまつぶしの物語でも〝ひとまかせ〟はよくねえぜ」俺もつられて偉そうに訓をたれていた。こんなことを言うようではもう最低のオヤジだ。

そして、黙ってそれを聞いていた女の子は何とも言えない表情を浮かべた。おそらくは「何言ってんだ、こいつら？」と思っているのだろう。そうだよなあ、考えてみればこん

百郎でも史郎でもない別の人格をまとって。

（了）

初出／「文藝」第36巻第1号／１９９７年2月1日　発行　株式会社河出書房

かなり昔の文章ですが、分かる人には分かる、響く人には響く内容なのではないかと思います。

面白がって読んでいただければ幸いです。

2021年　8月11日　森園みるく

な話、楽しいはずない。

空も白み始め、俺達は私鉄の駅まで女の子を乗せていった。もうじきに始発電車が動き出す時間だ。

「どうもありがとう、私もこれから自分でゴミを捨てるときは気をつけるよ。それじゃあね」女の子は手を振って改札の方へ向かった。最後まで名前も聞かなかったが縁があったらまた会えるだろう。

「さて、今夜はこのへんでおひらきかな？　明日の晩、また会おう」

そう言って百郎は光の中に溶け込んでいった。

どうせあいつは今夜もやって来る、どんなことがあっても。

朝の光の中を、俺は家路を急いだ。

村崎百郎のパンデミック時代を生き延びろ！④
鬼畜のススメ
覚醒編～豊かにこころを腐らせよう！❶

著者　村崎百郎
発行者　有限会社　ミルキーワールド
スキャンニング　株式会社　エレキテル　電子化代行スキャンPRO事業部
新表紙デザイン　森園みるく
モノクロ表紙デザイン　森園みるく
表紙デザイン　電子書籍出版代行サービス
編集　校正　森園みるく　小山繭子　中嶋誠

☆参考サイト

あとがき

村崎百郎が亡くなった後、遺品を整理している時に、彼の次の単行本としてさる出版社から発売を検討されていると思しき『紫の炎』と題された単行本用の草稿（コピー）を見つけました。

発売が決まってないということもあってか、私は生前の村崎から何も聞かされていませんでしたが、『紫の炎』には以前村崎が書いたいくつものコラムや連載の文章に加えて、書き下ろしの文章も予定されていたようです。

結局発売も書き下ろしも叶わなかった訳ですが、選別されていたコラムはとても面白いものが多かったので、村崎のＰＣにあった数々の文章から選別したものも追加して発売しようと思ったのですが、タイトルが『紫の炎』だとベタ過ぎるし、Deep Purpleか⁉と思い（そもそも村崎はDeep Purpleファンでは無かったし）改題して、今回の「鬼畜のススメ　覚醒編～豊かにこころを腐らせよう！❶」と、「鬼畜のススメ　覚醒編～豊かにこころを腐らせよう！❷」（２０２１年10月発売予定）に分けて発売する事にしました。

https://note.com/kitiku

村崎百郎非公式ＨＰ

http://murasaki100.com/index_00.html

森園みるく公式ＨＰ

http://morizono.babymilk.jp/

★次号予告★

２０２１年　９月頃「鬼畜のススメ」お試し版（入門編）発売予定！

～内容（詳細未定）～

＆ＭＯＲＥ

乞うご期待！

村崎百郎（むらさき・ひゃくろう）

61年シベリア生まれ。中卒。80年に上京。凶悪で暴力的な性格が災いし、陰惨な傷害事件をくり返しながら多くの工場や工事現場を点々とする。現在は工員兼鬼畜ライター。生まれつき神や悪魔の声が頭の中に直接聞こえてくるという「電波系」であり、その体質を利用して、「妄想神経」と呼ぶ透明無形の神経繊維を体外に無限に伸ばして、他人の体に潜入&憑依をしたり、路上のゴミを探査したりと、いつ精神病院からスカウトがきても不思議ではない状態のキ●ガイ技を多数会得している。95年より「すかしきった日本の文化を下品のドン底に叩き堕とす」ために「鬼畜系」を名乗り、この世の腐敗に加速をかけようと、「卑怯&卑劣」をモットーに日本一ゲスで下品なライター活動をはじめる。（この活動に関する同志&奴隷&喜び組&敵対する「正義の味方」は常時募集中）主な執筆雑誌は『危ない1号』（データハウス）、『ＧＯＮ！』（ミリオン出版）、『イマーゴ』（青土社）など。共著に『ジ・オウム』（太田出版）、近刊予定に『鬼畜系』（太田出版）、『電波系』（太田出版／根本　敬と共著）などがある。

情報は以下よりチェックよろしくお願い致します。

森園みるく　ＦＢ

https://www.facebook.com/milk.morizono

森園みるく　Ｔｗｉｔｔｅｒ

https://twitter.com/noritakamilkmor

「まぼろし博覧会」
http://maboroshi.pandora.nu/
「怪しい少年少女博物館」
http://ayashii.pandora.nu/
「猫の博物館」
http://nekohaku.pandora.nu/
「セーラちゃん」Ｔｗｉｔｔｅｒ
https://twitter.com/maboroshimusume
ＹｏｕＴｕｂｅ　アムールみるくチャンネル
（「まぼろし博覧会」内「村崎百郎館」の完成工程動画が観られます）
https://www.youtube.com/user/1225MILKMILK
ｎｏｔｅ（村崎百郎の過去の文章が読めます）